

京都大学構内遺跡調査研究年報

昭和54年度

京都大学埋蔵文化財研究センター

序

本年度の京都大学構内遺跡の調査は、本部構内、北部構内、医学部構内および和歌山県白浜町瀬戸臨海実験所などの各地で行われた。後半期から助手1名の増員があったが、それでもまだ仕事の量が調査担当者の数を上まわった。その点、調査会長の二年目をお引受けいただいた理学部亀井節夫教授には、多大の御負担をかけることになった。現場の調査が多いということは、センターの本来の目的である研究活動が十分になされなかったうらみがなくもない。しかし、それは徐々に成果をあげるよう努力したいと思っている。調査の件数が多いということは、それだけ、建築計画が多いということである。各部局が任意に建築計画を立てるのを、どこかで整理していただく必要がある。われわれとしては建設に追いたてられる調査ではなく、学術的研究に基づく調査を実施し、その成果をふまえて、大学構内の土地利用について全学的立場から検討されるのが望ましいと考える次第である。

本年度の調査にあたって、多くの人々の御協力をいただいた。京都大学構内遺跡調査会と当センターの委員諸先生には、それぞれの専門分野から、有益な御教示をいただいた。また、奈良国立文化財研究所、高槻市教育委員会、巽三郎氏からは出土遺物について御助言をいただき、京都市文化観光局文化財保護課、和歌山県教育庁文化財課および京都大学施設部、経理部、庶務部と各原因部局の御協力を得た。ここに、厚く御礼申しあげる次第である。

昭和55年1月

京都大学埋蔵文化財研究センター長

樋口隆康

例 言

- 1 本年報は、京都大学構内で昭和54年1月から同12月末日までに発掘・整理作業を終了した埋蔵文化財調査と保存の報告および京都大学構内遺跡に関する研究をまとめたものである。
- 2 国土座標に従って1辺50mの方形の地区割をし、調査地点の位置を表示する。
- 3 層位と遺構の位置は、国土座標第6座標系 ($x = -108,000$ $y = -20,000$) が、($X = 2,000$ $Y = 2,000$) となる京都大学構内座標によって表示する。ただし、旧来の構内座標について、本年度、四等三角点からの厳密な補正を行った(第1章2参照)。
- 4 遺構の略号を使う場合は、奈良国立文化財研究所の方式に従って、溝(SD)、井戸(SE)のように表示し、各調査ごとに通し番号を1から付した。
- 5 遺物番号は本文、実測図、写真を通して表示を統一した。遺跡の調査名であるローマ数字のあとに、調査ごとの通し番号を1から付した。
I : 京都大学北部構内BG31区発掘調査 V : 京都大学教養部構内AO24区発掘調査
II : 京都大学本部構内AW28区発掘調査 VI : 京都市北白川小倉町遺跡の発掘調査
III : 京都大学吉田キャンパスの試掘調査 VII : 京都大学北部構内BD35区発掘調査
IV : 和歌山県瀬戸遺跡の試掘調査
(例 I1 : 京都大学北部構内BG31区出土遺物1番)
- 6 参考文献は、本文中に〔著者名、発表年次〕の形式で表わし、本文末に一括した。
- 7 遺物・遺構の実測と製図は、泉拓良、宇野隆夫、岡田保良、清水芳裕、五十川伸矢、吉野治雄、津隈久美子、田中はる代、家根祥多、藤原喜信、原充、花谷浩、土橋理子が担当した。図面のまとめは吉野治雄が行い、遺物の写真撮影は清水芳裕が担当した。
- 8 本文は、樋口隆康、亀井節夫、泉拓良、宇野隆夫、岡田保良、清水芳裕、吉野治雄、原充が各章を分担執筆し、執筆者名は章の初めに記した。
- 9 編集は、樋口の指導のもとに泉、岡田が行い、清水、五十川、吉野が協力した。

京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和54年度

目 次

第1部 昭和54年度京都大学構内遺跡の調査

第1章 昭和54年度京都大学構内遺跡調査の概要と成果……………	1
1 調査の概要……………	1
2 構内座標の転換……………	2
3 調査の成果……………	4
第2章 京都大学北部構内BG31区の発掘調査……………	9
1 調査の方法……………	9
2 層位と堆積……………	10
3 遺構……………	12
4 遺物……………	13
(1) 縄文時代と弥生時代の遺物……………	14
(2) 平安時代以後の遺物……………	16
5 植物遺体……………	17
(1) 花粉分析……………	18
(2) 種実類……………	18
(3) 木質物……………	19
6 そのほかの調査……………	19
7 小結……………	20
第3章 京都大学本部構内AW28区の発掘調査……………	21
1 調査に至る経過……………	21
2 層位……………	22
3 遺構……………	23
4 遺物……………	26
5 小結……………	29

第4章 京都大学吉田キャンパスの試掘調査	31
1 北白川合宿研修所新営予定地BH37区	31
2 医学部総合解剖センター新営予定地AP19区	33
3 医学部構内電気管理設予定地AL18区	36
4 教養部構内電気管理設予定地AM24区	37
5 工学部機械系校舎新営予定地AT29区	39
第5章 和歌山県瀬戸遺跡の試掘調査	41
1 遺跡の概要と調査の経過	41
2 層位と遺構	42
3 遺物	44
4 小結	47
第2部 京都大学構内遺跡の研究	
第6章 京都大学構内出土の旧石器	51
第7章 北白川上層式土器の細分	53
——京都大学教養部構内AO24区出土の縄文土器を中心に——	
1 教養部構内AO24区出土の縄文土器	53
2 北白川扇状地の北白川上層式土器	58
3 北白川上層式土器の細分	59
第8章 平安時代鴨東白河の景観復原	61
1 はじめに	61
2 白川と北白川	62
3 白川の地の展開——院政期以前——	63
4 神楽岡周辺の景観	64
5 むすび	66
参考文献	68
京都大学構内遺跡調査要項	71
京都大学構内遺跡調査の歴史一覧	76

図 版 目 次

- 1 京都大学吉田キャンパスの地区割と調査地点
- 2 京都大学北部構内BG31区 1. 第1検出面の遺構 2. 第2検出面の遺構
3. 南壁の層位
- 3 京都大学北部構内BG31区 1. 小川と足跡群 2. 埋没林
- 4 京都大学北部構内BG31区 1. 足跡列 2. 倒木
- 5 京都大学北部構内BG31区 縄文土器, 弥生土器
- 6 京都大学北部構内BG31区 縄文土器, 土製品, 石製品, 石器
- 7 京都大学北部構内BG31区 土師器, 緑釉陶器, 灰釉陶器, 軒瓦
- 8 京都大学本部構内AW28区 1. 東壁北部の層位 2. 東壁南部の層位
3. 北壁西部の層位
- 9 京都大学本部構内AW28区 1. 検出全景 2. 発掘後全景
- 10 京都大学本部構内AW28区 1. 道SF1断面 2. 道SF1轍
- 11 京都大学本部構内AW28区 1. 土坑SK3上部の集石 2. 土坑SK3断面
3. 土坑SK4断面
- 12 京都大学本部構内AW28区 土師器, 瓦器, 青白磁, 染付, 陶器, 和鏡, 火打石
- 13 京都大学吉田キャンパスの試掘調査 1. BH37区TP5北壁の層位 2. BH37区
TP7北壁の層位 3. AP19区TP1南壁の層位
4. AL18区TP1検出の石列
- 14 京都大学吉田キャンパスの試掘調査 1. AT29区TP6土坑の層位 2. AT29区
TP4西壁の層位 3. AT29区TP4縄文土器と弥
生土器の出土状況
- 15 和歌山県瀬戸遺跡 1. 遺跡全景 2. 試掘坑A7西壁の層位
3. 試掘坑A5西壁の層位
- 16 和歌山県瀬戸遺跡 1. 試掘坑C1北壁の層位 2. 試掘坑D7南壁の層位
3. 土師器, 須恵器, 製塩土器, 土錘
- 17 京都大学構内出土の旧石器

挿 図 目 次

1	医学部構内AN19区出土の弥生土器	5
2	北部構内BD32区出土の軒瓦	6
3	調査区の区割と試料採取地点〔京都大学北部構内BG31区〕	10
4	中央畔下層群の層位	10・11
5	南壁上層群の層位	11
6	第1検出面の遺構	12
7	第2検出面の遺構	13
8	縄文土器と弥生土器	14
9	縄文土器	15
10	土師器, 須恵器, 緑釉陶器, 灰釉陶器, 陶磁器	17
11	種実類による植生復原	19
12	調査区の位置〔京都大学本部構内AW28区〕	21
13	東壁の層位	23
14	おもな遺構	24
15	土師器, 瓦器, 陶磁器	27
16	銭貨, 和鏡	28
17	試掘坑, トレンチの位置〔北白川合宿研修所新営予定地BH37区〕	31
18	TP4, TP3, TP1の層位	32
19	出土遺物	32
20	試掘坑の位置〔医学部総合解剖センター新営予定地AP19区〕	33
21	TP4, TP7, TP1の層位	34
22	出土遺物	35
23	TP2, TP3, TP1の層位〔医学部構内電気管理設予定地AL18区〕	36
24	TP1, TP2の層位〔教養部構内電気管理設予定地AM24区〕	37
25	TP1出土の土器	38
26	試掘坑の位置〔工学部機械系校舎新営予定地AT29区〕	39
27	TP2, TP4, TP6の層位	40

28	出土遺物	40
29	試掘坑の位置〔和歌山県瀬戸遺跡〕	41
30	試掘坑の層位	43
31	縄文土器	44
32	土師器，黒色土器，須恵器，製塩土器	45
33	土錘	46
34	北沖代遺跡出土の土器	48
35	層位模式図	49
36	粒径中央値と淘汰度の相関図	50
37	京都大学構内出土の旧石器	52
38	京都大学教養部構内A O24区出土の縄文土器	55
39	北白川上層式土器の変遷	56・57

第1章 昭和54年度京都大学構内遺跡調査の大要と成果

樋口隆康 亀井節夫
泉 拓良 岡田保良

1 調査の大要

京都大学では、構内のすべての掘削を伴う工事の計画を、計画段階で埋蔵文化財研究センターへ提出することとしている。工事地点や掘削の深さによって、予定地の変更を要請するもの、試掘調査をおこなって遺跡の存在や遺存状況をまず調べるもの、過去の資料や試掘調査の結果から発掘調査を行うもの、立合調査を行うものに分ける。

この方針に従って、昭和54年度に行った京都大学構内の埋蔵文化財関係各種の調査は、以下の24件である。立合調査は、実施済みのもののみを記した。

試掘調査	北白川合宿研修所新営予定地（北部構内BH37区）	（第4章，図版1-66a～j）
	医学部総合解剖センター新営予定地（医学部構内AP19区）	（第4章，図版1-67a～h）
	医学部構内電気管理設予定地（医学部構内AL18区）	（第4章，図版1-68a～c）
	教養部構内電気管理設予定地（教養部構内AM24区）	（第4章，図版1-69a・b）
	工学部機械系校舎新営予定地（本部構内AT29区）	（第4章，図版1-70a～g）
	人文科学研究所分館資料収蔵庫等新営予定地（北白川小倉町）	（第1章）
	理学部附属瀬戸臨海実験所研究棟等新営予定地（和歌山県白浜町）	（第5章）
	工学部建築系校舎新営予定地（本部構内AZ30区）	（第1章，図版1-71a～d）
	病院東構内和進会館移転予定地（病院東構内AK18区）	（実施予定，図版1-72a～f）
	教養部構内吉田食堂新営予定地（教養部構内AP22区）	（実施予定，図版1-73a～f）
発掘調査	医学部総合解剖センター新営予定地（医学部構内AP19区）	（整理中，図版1-74）
	本部構内実験排水槽新営予定地（本部構内AT27区）	（実施予定，図版1-75）
立合調査	教育学部校舎新営工事（本部構内AW22区）	（図版1-76）
	医学部構内電気管理設工事（医学部構内）	（第1章，図版1-77）
	教養部構内電気管理設工事（教養部構内AM24区）	（第1章，図版1-78）
	農学部旧校舎解体工事（北部構内BD32区）	（図版1-79）
	農学部農芸化学学科硝子温室改築工事（北部構内BF30区）	（図版1-80）
	医学部構内給水管理設工事（医学部構内）	（第1章，図版1-81）
	医学部構内ガス管理設工事（医学部構内）	（第1章，図版1-82）
分布調査	理学部附属花山天文台（京都市山科区北花山大峰）	
資料整理	理学部物理学科校舎新営予定地の発掘調査	（第2章，図版1-56）
	工学部イオン工学実験施設新営予定地の発掘調査	（第3章，図版1-57）
	医学部構内電気管理設工事の立合調査	（第1章，図版1-64）
	北部構内給水管理設工事の立合調査	（第1章，図版1-65）

なお、人文科学研究所分館資料収蔵庫等新営予定地の試掘調査は、人文科学研究所考古学研究室(林巴奈夫教授)に依頼し、また工学部建築系校舎新営予定地の試掘調査は、工学部建築学第二教室地域生活空間計画研究室(西川幸治教授)に依頼した。そのほかの試掘調査、発掘調査、資料整理は京都大学構内遺跡調査会に委託し、その報告をもとに本年報の第1部を作成した。ただし、理学部物理学科校舎新営予定地の発掘調査(第2章)は、別冊で報告する予定であるので、概要を報告するにとどめた。また、工学部イオン工学実験施設新営予定地の発掘調査(第3章)についても、昭和55年度に第2次調査を行う予定であるので、正式な報告を後日刊行する。

2 構内座標の転換

京都大学構内遺跡の調査では、昭和51年度以降、構内全域を50m方眼で地区割し、かつ互いにはなれた地点の位置関係を正確に把握するため、構内座標に基づく網目を設定するとともに、各調査ごとには、精確な座標値と方向角を測定した基点を設置し、すべての遺構、層位の実測を構内座標の経緯線を基準にして行っている〔京大埋文研78a p.2〕。このとき、構内座標では、京都市都市計画局発行2500分の1市街図「吉田」の西北角を点(X=2000, Y=2000)とした。この点は国土調査法第6座標系⁽¹⁾による点(x=-108000, y=-20000)⁽²⁾にあたる。また、構内座標軸は国土座標系のx軸を基準方向としたものになっている。

一方京都市では昭和52・53年度にわたって、合計71ヶ所の四等三角点設置事業を行い、京都市内主要部における発掘調査の地点標示のすべてを、共通の国土座標系で表わすことを可能にした〔京都市文化観光局文化財保護課79〕。京都大学構内にも、屋上点(10)および地上点(10-1)が病院東構内に設けられた。前記三角点の成果表によれば、座標値はそれぞれ次のとおりで、経緯度も表示されている。

$$(10) \begin{cases} x = -109105.33 \\ y = -20042.36 \end{cases} \quad (10-1) \begin{cases} x = -109141.53 \\ y = -19972.08 \end{cases}$$

ところで、昭和51年度以降に京都大学が遺跡調査に用いてきた構内座標系では、一応

$$x = X - 110000, \quad y = Y - 22000$$

によって国土座標を導くことができるし、実際にそのようにして地図上に作図し、構内の地区割を国土座標系に組みこむ配慮をしている〔本年報図版1〕。しかし、元来、構内座標系の局地原点の設定に関して、それが既存の三角点でも、そうした点から正確に測量された点でもなかった。大学構内に限ってみれば校舎や遺跡相互の位置関係さえ正確であれ

ば、局地原点が国土座標系の点としてどれほどの誤差をもつかということは、あまり重視されなかったといつてよい。

他方、京都市域における数々の発掘調査において、その大半が、歴史的な計画都市である平安京の解明を主眼としているにもかかわらず、各調査が共有する測量基準点としては、国土地理院所管のごく限られた三角点を用いる以外になく、せいぜい2500分の1市街図に調査地点を落しこむことで遺跡相互の関係を求めるといのが実状であった。こうした中で、京都市が遺跡調査用の三角点網を市全域にめぐらせたことは、平安京および周辺遺跡研究の今後の展開の上で画期的な事業であったといえる。京都大学構内遺跡についても、白河の条坊的市街が及んだ地域として、平安京の市街地構成と密接な関係にあり、また鴨東の条里形成や地形の変遷を究明する上でも、国土座標系を市全域と共有することの意義は大きい。

そうした観点から、当センターでもできるだけ早い機会に、市の基準点測量標とその測量成果を利用して、従来の構内座標系を、真の国土座標系に基づく局地座標系に転換することを計画し、昭和53年度から54年度にかけて、構内遺跡調査会が主体となって作業を実施した。その座標転換の内容は次のとおりである。

- (1) 京都市遺跡発掘調査基準点(10：京大病院第1病棟屋上)および(4：京都市養正住宅屋上)を使用して、新たに本部構内法経図書館屋上に四等三角点(10-2)を設ける。

$$(10-2) \begin{cases} x = -108257.726 \\ y = -19767.454 \end{cases}$$

- (2) 構内全域に組まれた1次から3次までのトラバース網の各測点について、三角点(10)と(10-2)を基準にして再測する。
- (3) 構内全体で都合26ヶ所の遺跡調査用基準点すべてについて、国土座標第6座標系に則って新たに補正された座標値および真北からの方向角を計測する。

この結果、構内遺跡調査用基点の旧座標値の補正值(ΔX , ΔY)を明らかにすることができた。たとえば、本年報第2章で報告のあるBG31区の調査のために設けられた3ヶ所の基点について、旧座標系では新座標系の値に対してX軸方向で北へ約3.0m、Y軸方向では東へ約3.3mずれていることがわかった。こうした誤差の値は、構内全体で一様ではなく、X軸方向の補正值 ΔX はY座標の、Y軸方向の補正值 ΔY はX座標のそれぞれ一次関数で有効に近似しうることがわかっている。その関数における勾配は、旧座標系が、真の国土座標第6座標軸に対して与えられていた回転の大きさである。その一次関数は、旧

値よりも大きいとき、 ΔX 、 ΔY ともに正とすれば、次の式となる。

$$\Delta X = -2.306 \times 10^{-3} Y + 8.848 \quad \Delta Y = 2.630 \times 10^{-3} X - 2.605$$

上記2式の勾配から、旧構内座標系は、国土座標系のx軸に対して、X軸を $0^{\circ}07'56''$ 、Y軸を $0^{\circ}09'02''$ だけ反時計回りの方向に回転したものであったことが知られる。したがって、BG31区の場合でも、3ヶ所の基点それぞれに ΔX 、 ΔY の値はわずかず異なるが、図面表記の上では、上記の値すなわち3ヶ所の平均値だけ旧座標系を平行移動し、回転移動は無視して十分に、新座標系への転換が可能となる。

BG31区の場合と同様にして、昭和51年度以降の主要な調査地点の座標の補正値を掲げておく。

調査地区	BE33	AE15・AF14	AH17	AO18	BE29	BG32	AA18
報文掲載年報	51年度	51・52年度	52年度	53年度	53年度	53年度	53年度
ΔX (m)	2.60	4.92	-4.71	4.44	3.13	2.79	4.56
ΔY (m)	3.06	-0.34	-0.01	0.92	2.97	3.36	0.97

なお、この構内座標系においては、X座標の値を一定とする南北方向の直線は、正確には真北方向を示さず、各地点に固有の真北方向角をそなえている。京大病院屋上の三角点(10)において、その値は、X軸に対して時計回りに $0^{\circ}07'34''$ となる。この付近では、東へ1kmずれると20秒余りその方向角は小さくなるはずである。

以上、旧構内座標を新たな真の国土座標系に転換することの意義と理由、実際に転換した結果を記したが、本年報以降、構内座標表示は新座標系によることになったので、それ以前の図面と対照するとき、必ず旧座標の補正を必要とする。

3 調査の成果

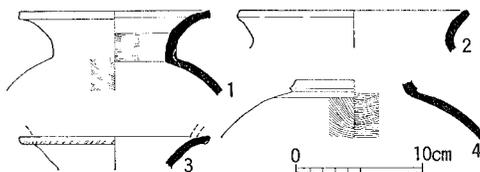
昭和54年度の調査によって、いくつかの新しい知見を得ることができた。その詳細は第2章以下で述べるとし、本節では、それらを各時代ごとに整理して、京都大学構内遺跡の全体像の中で、本年度の成果を明らかにしたい。

旧石器時代 この時代の遺跡は明らかでないが、北部構内BE33区と医学部構内AP19区から旧石器と思われる刮片や石核がこれまでの調査で出土している。本年度は、石器について考察を試みた(原「京都大学構内出土の旧石器」本年報第6章)。

縄文時代 縄文時代の遺跡は、北部構内BF31区を中心とした中期と晩期の京大農学部遺跡、同構内BD35区を中心とした後期の京大植物園遺跡、教養部構内AO24区を中心

とした後期の京大教養部遺跡が確認されていた。これらの遺跡に加えて、本年度新たに、本部構内AT29区に晩期凸帯文土器の包含層があることが判った(第4章5)。一方、北部構内では、BG31区の発掘調査で京大農学部遺跡の北西端を調査し、縄文晩期の人の足跡や小川や埋没林が検出され、当時の集落付近の自然景観と、現在では破壊されてしまった扇状地の自然植生を明らかにできた(第2章)。また、大量に出土した前期～晩期の遺物には編年の基準となる資料もあり、西日本で初めて出土した中期の滑石製垂飾具など貴重なものが多い。同地点の地質断面の観察より、後期以前の高野川系の砂礫層の存在を確認したが、これは高野川の流路と北白川扇状地の変遷を考える上で重要な成果である。以上のほかに、教養部構内AO24区から出土した縄文土器の検討をもとに、北白川上層式土器の研究を行った(泉「北白川上層式土器の細分」本年報第7章)。

弥生時代 弥生時代の遺跡は、北部構内BE29区から出土した中期の方形周溝墓、同構内BA30区を中心とした前期の追分地藏遺跡、教養部構内AQ23区を中心とした前期の遺跡が確認されていた。

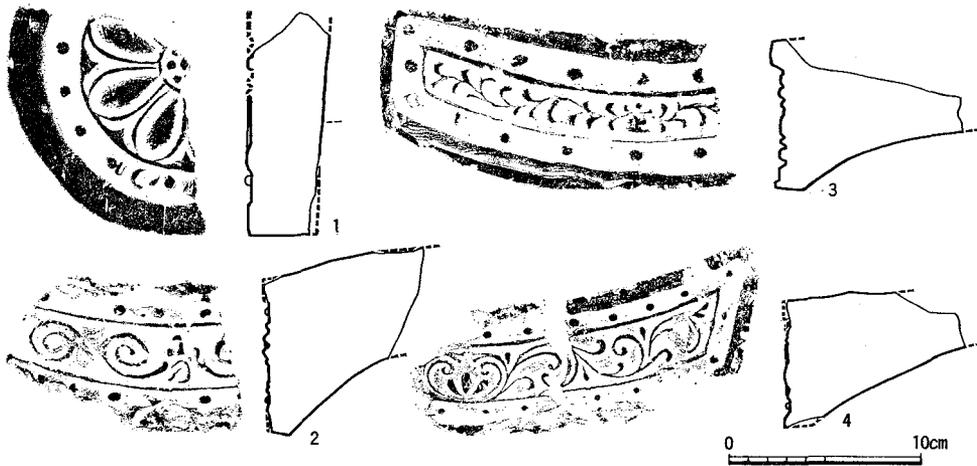


第1図 医学部構内AN19区出土の弥生土器

本年度新たに、本部構内AT29区で前期の包含層を発見した(第4章5)。また、前期や中期の遺跡より一段低い地域である医学部構内AN19区(図版1-64)から、後期の土器が出土している(第1図)。出土した土器は壺がおもであり、胴部が球形に近く張る器形である(1・4)。頸部と胴部の境に低い凸帯が廻る土器(4)や、二重口縁の可能性のある土器(3)からみて、後期の中でも新しい時期に属するものであろう。

古墳時代と奈良時代 京都大学構内には、この時代の遺構が少なく、明確なものは北部構内BD33区の方形周溝遺構のみである。本年度この時期の遺物は、医学部構内AP19区から若干出土しただけであり(第4章2)、新たな知見は得られなかった。

平安時代 この時代は大きく二つに分れ、寺院と葬地を主とし、前期から始まる北部構内と、白河条坊の街区といえる後期を主体にした病院構内とがある[宇野79, 岡田79]。北部構内と病院構内の中間にある教養部構内では、本年度の^{M24}AT29区~~AT29~~の試掘調査で前期の包含層を検出し、また、この地点の西約200mの医学部構内AP19区でも前期の土器が出土している(第4章2・⁴3)。したがって、教養部構内とその周辺に新たに遺跡の存在を想定する必要があるであろう。北部構内では、BD32区の立合調査で平安前期と中期の瓦が地表下約1.5mの黄砂層上面からまとまって出土した(第2図2・4)。この地点と隣接した地



第2図 北部構内BD32区出土の軒瓦

点(図版1-9)の発掘調査で、第2図1・3の軒瓦のほか、3と同範の瓦5点をはじめ約10点の軒瓦、「て」字状口縁の土師器皿、延喜通宝などが出土している〔中村73〕。第2図1は『小乃』銘単弁八葉蓮華文軒丸瓦で、『延喜式』所載の小野瓦屋の一本造りによる製品。2は『小乃』銘均整唐草文軒平瓦で小野瓦屋のもの。1と対応する。3は『上』銘均整唐草文軒平瓦で河上瓦窯のものである。4は均整唐草文軒平瓦で、西賀茂東瓦窯の製品であろう。1～4は平安宮の大極殿、豊楽院、内裏、主水司から同範品が出土している〔平安博物館編77〕。4が平安前期、1と2が平安中期、3は中期でも1や2よりやや下るものである。以上のように、BD32区には平安中期を中心とする瓦がまとまって出土していることから、中期頃の寺院がこの付近にあったと推定しうる。また、同じ北部構内のBG31区でも中期を主とする遺物が出土したが、遺構は検出されなかった(第2章)。一方、BH37区では平安後期の土坑が検出され、BG36区の後期の瓦溜と一連のものと考えている(第4章1)。医学部構内では前に述べた前期の遺物のほか、AN19区で後期の井戸と包含層、AP19区で包含層を検出した(第4章2)。またAN19区の西端で、AP19区の地山である黄色粘土層を高野川系の礫層が切っている地点を検出し、医学部構内のほぼ中央にある南北道路の東西で、地山となる層に堆積時期の差があることが判った。

以上のほかに、平安時代の文献史料と、その研究史の検討をもとに、京都大学構内とその周辺を中心とした地域の景観復原の研究を行った(岡田「平安時代鴨東白河の景観復原」本年報第8章)。

鎌倉時代と室町時代 京都大学構内全域で、この時代を、寺院や邸宅などがある前半

と、田畑となる後半に分けることができる。田畑化する時期は各遺跡によって異なるが、南北朝の内乱と応仁の乱によって平安時代、鎌倉時代の建造物がほとんど破壊されてしまい、その後田畑になっていくと推定している。前半の遺跡は、鎌倉時代から衰退が始まる北部構内、藤原氏勧修寺家流の邸宅もしくは寺院の遺跡と思われる医学部構内、吉田神社関係の遺跡の教養部構内、白河条坊の街区が残っていた病院構内に分けることができる。北部構内BG31区では、江戸時代の水田耕土の下に、室町時代以後の水田耕作に伴う溝を検出した(第2章)。一方、医学部構内では、この時期が全盛期で、多くの遺構が検出されており〔京大埋文研79〕、本年度もAN19区、AP19区(第4章2)で包含層を確認した。現在整理中のAP19区の発掘調査では、この時期の溝や井戸や土器溜が検出され、室町中期頃までは水田や畑となっていなかったことが判った。本部構内も医学部構内と同様にこの時期の遺構が多くなるのが、本年度の試掘調査で判明した。AT29区で鎌倉時代の溝と土坑を(第4章5)、AZ30区では集石を伴う溝を検出している。AZ30区では瓦器の羽釜と土鍋の完形品が4点出土した。

江戸時代 京都大学構内のほぼ全域は田畑であったが、江戸時代の末期に土佐藩邸が北部構内に、尾張藩邸が本部構内に造られている。北部構内では、ほぼ全域が水田と思われる、本年度もBG31区、BH37区とも水田耕土層を確認している(第2章、第4章1)。一方、本部構内では、地形によって水田と畑があったようで、AW28区では南半に水田、北半に畑を確認している(第3章)。医学部構内でも、本年度の調査で、中央の南北道路より東は畑であり(第4章2)、西は一段下って水田であったことが判明した。本年度の調査では、そのような耕作地のほかに、本部構内AW28区で白川道(志賀越道)を検出した。白川道は、平安時代以前に遡るといわれる古道で、今回検出した道路は江戸時代のものである。道路の南側には道路と併行して野壺と小川があり、江戸時代の白川道の風景が偲ばれる。昭和53年度の試掘調査で、江戸時代以前に遡る路面が検出されており〔京大埋文研79〕、今回の調査でもその北端を確認した。この路面と江戸時代の路面の関係については、昭和55年度に行う予定の第2次調査で明らかにしようであろう。

吉田キャンパス外の附属施設の調査 京都市左京区北白川東小倉町47番地所在の人文科学研究所分館は、その東約100mに縄文前期～後期の北白川小倉町遺跡があり、研究所内からも縄文土器が出土している〔梅原35〕。研究所の東端に、資料収蔵庫等新営工事が予定されたため、人文科学研究所考古学研究室に遺跡確認の試掘調査を依頼した。調査の結果、北側の試掘坑で中世頃の礫群を検出したが、南側の試掘坑では地表下すぐに幅1m内

外の花崗岩塊を含む黄砂層を検出した。地表下2 mまで調査したが、縄文時代の包含層は検出されなかった。

和歌山県西牟婁郡白浜町宇崎の北459番地所在の理学部附属瀬戸臨海実験所構内には、縄文時代を主とする瀬戸遺跡がある。昭和51年度の試掘調査と発掘調査で、実験所東南部に縄文晩期の貝塚と墓地、東北部に古墳と箱式石棺を検出した。本年度は、研究棟を含め3棟の建物が予定されている実験所西部の試掘調査を行った。調査の結果、西北部で縄文晩期の薄い貝塚、西南部で弥生後期～平安時代の製塩土器を包含する層を検出し、縄文時代から平安時代に至る遺跡が、場所をかえながらも、砂州の北端と南端にある微高地上に立地していることが判った(第5章)。

以上のように、京都大学構内には、様々な時代の、多様な性格の遺跡が複合して存在している。それは、大学構内にも幾つかの遺跡のまとまりがあり、そのそれぞれが時代によって変化したことの結果と理解される。平安時代以後について考えてみると、鴨東の地は平安前期には京外であったが、平安後期以後は「京・白川」や「京都」と称される中心地に含まれる。南北朝の内乱や応仁の乱で破壊をうけ、その後の再開発はごく限られた地域にしかみられない。そして、織豊政権が京都を改造するにあたって、御土居のそと、すなわち京都の町に含まれなくなるという経過を辿るのである。京都大学構内で確認される遺跡の変遷もこのような地域の推移の中に位置づけることができる。さらに、他の京外の地域をみると、洛北は、鴨東と同様に平安京外から「京都」に組み入れられた地域であるが、近世には御土居の内になり、鴨東とは異った展開を遂げることが判る。すなわち、京外の地は、平安京一京都のあり方をより鮮明に表現しているといえ、京都大学構内における歴史時代の遺跡調査も、平安京一京都の研究の中に位置づけて進めていくつもりである。

〔注〕

- (1) 全国を13ブロックに分割したうち、近畿地方に適用する座標系で、原点(0, 0)は北緯 $36^{\circ} 00' 00''$ 、東経 $136^{\circ} 00' 00''$ の地点(福井県越前岬付近)にとられている。
- (2) 一般には国土座標系に(X, Y)が用いられるが、すでに京大構内座標を(X, Y)で表わしているため、ここでは国土座標に(x, y)を用いる。

第2章 京都大学北部構内BG31区の発掘調査

泉 拓良 宇野隆夫

本調査地は、昭和52年9月に行った試掘調査によって、縄文時代の泥炭質土層と平安時代以後の遺物包含層があることが判明していた[京大理文研78a]。一方、昭和53年度には、当地域の南西にあたる理学部合同建物の建設が計画され、その地域(BE 29区)の遺跡調査を行ったところ、平安後期頃の火葬塚が発見され、重要な遺跡として保存されることとなった。そのため、理学部合同建物の当初の計画は変更され、当地域に合同建物の一部であった物理学科の校舎を建設することとなった。

調査区域は、縄文時代の農学部遺跡に隣接していて、北白川扇状地内の微高地北西斜面とその下の低地にあたる。試掘調査で注目された2層の泥炭質土層については、多くの自然遺物を包含しているため、関連する各分野の詳しい調査を必要とした。したがって、本学理学部動物学教室自然人類学研究室、地質学鉱物学教室第四紀および古生物研究室、農学部林学教室森林生態学研究室、木材研究所木材生物研究室、大阪市立大学理学部生物学教室植物学研究室、京都産業大学理学部物理学教室に調査の協力を依頼することにした。

1 調査の方法

調査区域の北半には旧物理学教室建物があり、地表下1.5mまで遺跡が破壊されていた。したがって、まず、調査区域南半部を地表下1.5mにある黄砂層上面まで発掘調査し、そのうち、旧物理学教室を撤去して、遺物を包含しない黄砂層を機械で掘削した。黄砂層下面から、ふたたび発掘調査を開始し、礫と白砂を確認して現場作業を終了した。

泥炭質土層からの自然遺物の採取について、予備採取を行い、各層にどれくらい動植物遺体が含まれているかを調べた。それに基づいて、亀井節夫を中心に担当者全員で採取方法の検討を行い、小型の種子類は各層毎に1.5kg(約1ℓ)の土塊から、大型の種実は各層毎に約70kg(コンテナ5箱)の土塊から採取することにした。小型のものは、2.0mmと0.5mmのふるいで水洗し、大型のものは5.0mmのふるいで水洗選別した。また、脊椎動物遺体は、5.0mmのふるいを通った土を、さらに1.0mmのふるいで水洗し、過酸化水素水で植物質を分解した試料を用いた。以上の試料の採取は、地形の傾斜を考慮して第3図にNで示した10地点で行った。一方、木質物は、原位置を保っていると考えられる立木と倒木を主として採取し、50分の1の実測図に記入した。花粉分析と、土壌の¹⁴C年代測定のための試料

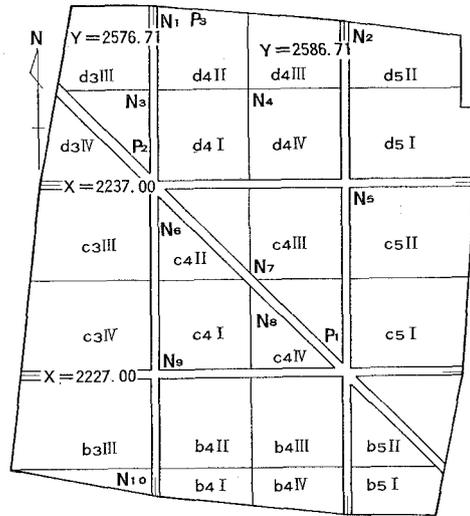
は第3図にPで示した3地点で採取した。また、砂層と礫層については、堆積状態の観察や、粒度分析、礫種組成の調査を必要な地点で行い、その位置と層位を図面に記録した。

2 層位と堆積

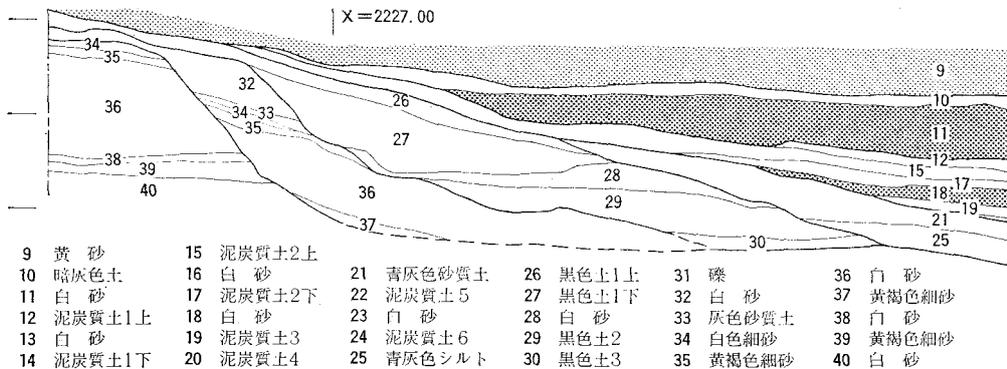
調査区域の現地表はほぼ平坦で、標高62.3mを計る。地表から約4m下までのあいだに40層の堆積を認めた(図版2-3, 第4・5図)。調査区域東南部では地山の白砂層が高く、江戸時代以後の堆積しか認められず、その他の地域では縄文時代から現代に至る堆積がある。連続した堆積を示す地域を中心に層位を観察すると、黄砂(第9層)上面を境に上・下2群に分けることができる。

上層群は水の影響を受けていない堆積で、第1層は表土、第2~4層は江戸時代の耕土と床土層、第5層は室町時代以後の耕土、第6・7層は平安時代の包含層である。第8層は無遺物であった。

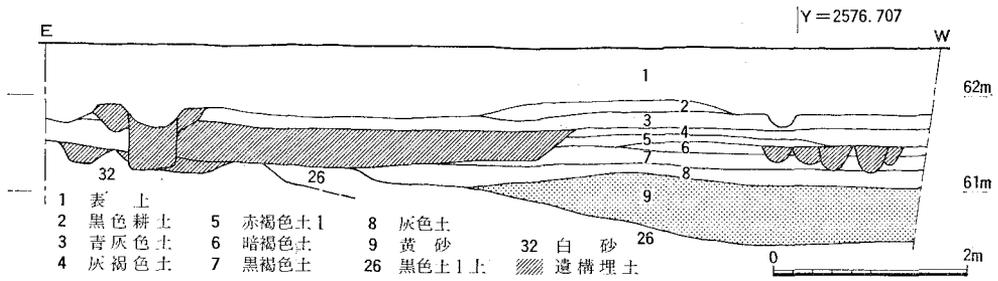
下層群は、堆積時期と堆積過程の違いからさらに7群に分けることができ、下の群から説明する。第32~40層は白川の砂層群でほぼ水平に堆積している。斜面の断層は地すべり性のマス・ムーブメントであり、地下深部につながるものではない。第31層は礫からなり、高野川、賀茂川の基礎データ[横山74]との比較から高野川の礫と確認できた。BE29区(図



第3図 調査区の区割と試料採取地点(1/400)

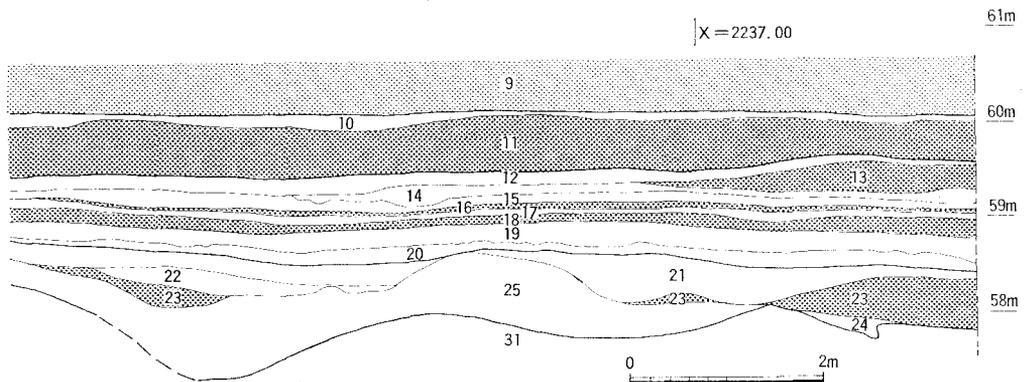


第4図 中央群



第5図 南壁上層群の層位

版1-54)で採取した礫層も同じ組成である。第31~40層の年代を決める資料はない。第26~30層は微高地を構成する白砂と微高地の表面が土壌化した黒色土が混ざりあった黒色泥基質の砂層群で、第29・30層が縄文中期末、第26~28層が同後期初頭頃である。第21~25層はシルトと砂の層群で、部分的に薄い泥炭質土がある。第25層から縄文中期後葉の里木Ⅱ式が1片出土している。第12~20層は、第21層が堆積したのち、滞水域が斜面の西側にできた時の堆積である。調査区域の北東付近がもっとも連続的で厚い泥炭質土がたまっている。調査区域の西側には小さな南北方向の水路が考えられるが(第13・16・18層)、こゝも泥炭質土がたまる環境であった。第12~20層からは縄文晩期の土器が出土した。第11層白砂は3つに分けられ、下位より、無層理の部分、北東から南西への流れを示す斜層理が発達する部分、グレイディングのみられる部分である。この上位の第10層暗灰色土は非常に不淘汰で、表面が土壌化すると共に、下位の白砂が洗い出されて混ざったものである。この層から弥生前期末の壺を1点得た。第9層は北部構内のほぼ全域に分布している黄砂層で、弥生中期初頭頃の堆積である。この層の堆積によって、高野川系の河川によって生じた比高約3.5mの崖はほぼ完全に埋積する。



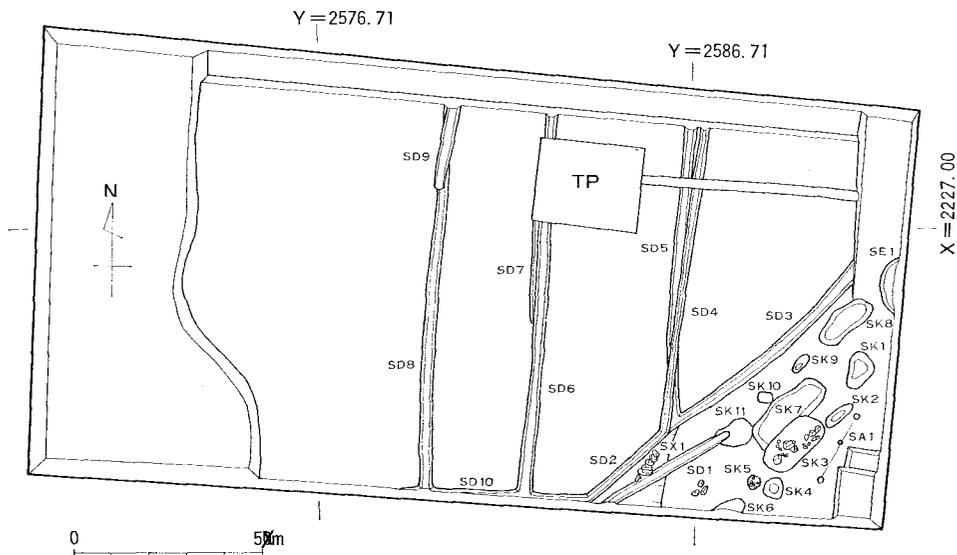
下層群の層位

3 遺構

歴史時代と縄文時代とに大別できる。歴史時代については検出面ごとに記述し、縄文時代については一括して記述する(図版2~4, 第6・7図)。

第1検出面の遺構 第1~3層を発掘した後に検出した遺構で、柵SA1, 溝SD1~SD10, 土坑SK1~SK11, 石列SX1, 野壺SE1である。SD4~SD10は低地にあり, その他の遺構は, 調査区域東南部の白砂層(第32層)が高くなる斜面上にある。斜面上の遺構のうち, SA1, SD1~SD3, SX1, SK1~SK11は斜面の傾斜に沿った方向を持つ。SK1~SK11は石の抜き跡と考えることもでき, 傾斜が変換する地点に石垣が並んでいた可能性もある。一方, 低地にあるSD4~SD10は方位を真北から約 5° 東へ振る溝で, SD6とSD8はSD10に直交する。SD2~SD10は同様な構造で, 断面はU字形, 幅0.7m, 深さ0.3mである。第1検出面の遺構はすべて江戸時代である。

第2検出面の遺構 第5層を発掘した後に検出した遺構で, 溝SD11~SD41, 土坑SK12~SK14である。SD11~SD13は斜面の裾に沿って掘った溝で, SD14~SD41は東西・南北方向の溝である。SD14~SD41のうち, SD33・SD34・SD38は方位を真北から西へ 4° ~ 10° 振るが, それ以外の溝は真北から東へ 5° ~ 10° 振る。溝は幅0.7m, 深さは0.2m, 断面はU字形を呈する。これらの溝と第1検出面の溝SD2~SD10は, 水田耕作に伴う湿気や地下水を抜くための溝であろう⁽²⁾。SK12~SK14は調査区域東北隅の白砂(第32層)上面



第6図 第1検出面の遺構

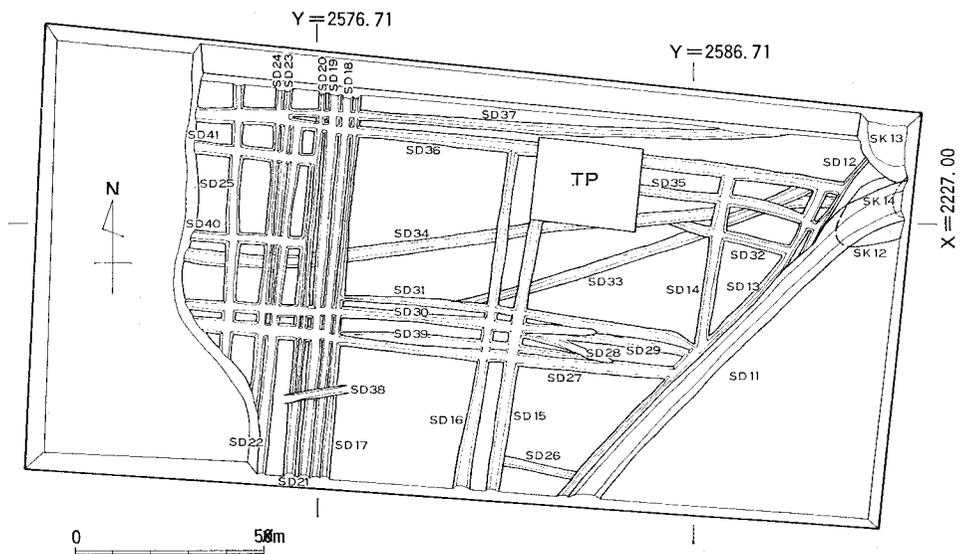
で検出した遺構である。土坑の深さは、SK12が0.8m、SK13・SK14は約1.8mである。埋土は黒色土と白砂の互層で、互いの切り合いは認められない。SD12～SD42は室町前期以後、SK12～SK14は平安後期頃である。

縄文時代の遺構 足跡と小川と立木および倒木等を検出した(図版3・4)。足跡としては、第12層上面と第15層上面で検出した足跡列、第15層上面と第20層上面で検出した足跡群がある。第12層上面の足跡列は、6mの間に1列に並ぶ12個の足跡からなる(図版4-1)。足跡の大きさは表面では長さ22cm、幅14cm、深さは約8cmで、底面では長さ22cm、幅10cmである。5本の指を確認でき、第1指は第3指より前に出ている、人間の足跡と推定できる。歩幅は50～60cmである。一方、足跡群は無数の足跡からなっていて個々の足跡を確認できないもので、人間以外の動物の足跡の可能性もある(図版3-1)。

小川は第15層上面で検出したもので(図版3-1)、立木と倒木は第15～21層で検出できた。第17～19層出土の倒木は斜面の傾斜に直交して倒れているものが多く、第21～23層は傾斜に平行して倒れているものが多い(図版3-2)。

4 遺物

出土した遺物は、縄文時代の土器・石器・土製品・石製品、弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、中国製陶磁器、中・近世陶器、鉄製品、瓦などで、総量はコンテナに54箱である。それ以外に、コンテナ約253箱分3.8tの土を水洗篩別して動植



第7図 第2検出面の遺構

物遺体を採取し、約70本の材を試料化した。植物遺体については次節で述べることにする。

(1) 縄文時代と弥生時代の遺物(図版5・6, 第8・9図)

縄文前期の土器 前期の土器は数点であるが、すべて大歳山式である(I 6)。

縄文中期の土器 中期末の土器が主体で、ほかに少量の船元Ⅲ式(I 7), 船元Ⅳ式(I 8), 里木Ⅱ式(I 9)が出土している。I 10~I 18は中期末の土器である。I 13は口縁直下に口縁部文様帯をもつ深鉢, I 10~I 12は口縁下に無文帯もしくは縄文帯がきて、その下に眼鏡状の文様帯がくる深鉢, I 14・I 15は把手状山形口縁をもつ胴のくびれた鉢である。I 16は器面が丁寧に磨かれた浅鉢である。以上が中期末の基本的なセットと考えうる。そのほか他の遺跡から搬入されたと思われる土器がある。I 17は台付深鉢の台の部分で、中部・東海地方西部に類例がある〔小玉ほか70 p. 60〕。I 18は微隆起線で曲線的な文様を描いた深鉢で、中部・東海地方西部の山ノ神式に類例がある〔紅村ほか71 p. 49〕。したがって中期末のこの一群の土器は山ノ神式と併行し、加曾利EⅢ式頃と想定できる。

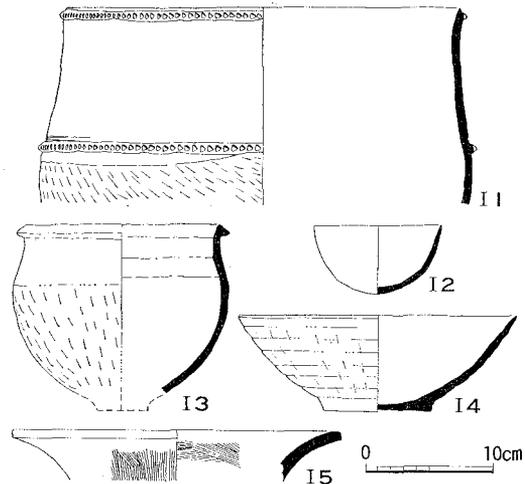
縄文後期の土器 後期初頭の中津式が数点出土しただけである。有文深鉢は口縁部が肥厚しないという特徴がある(I 19・I 20)。

縄文晩期の土器 層位によって3時期に分けることができる。第20層からは滋賀里Ⅲが、第15・16層からは滋賀里Ⅳ・Ⅴが、第12・14層からは滋賀里Ⅴの新しい様相の土器が出土している。I 21~I 23は滋賀里Ⅲで、I 1, I 24~I 28が滋賀里Ⅳ・Ⅴである。I 2~I 4とI 29~I 31は滋賀里Ⅴの新しい様相のもので、深鉢の凸帯は△形で、V字形の刻みを施すものと施さないものがある。

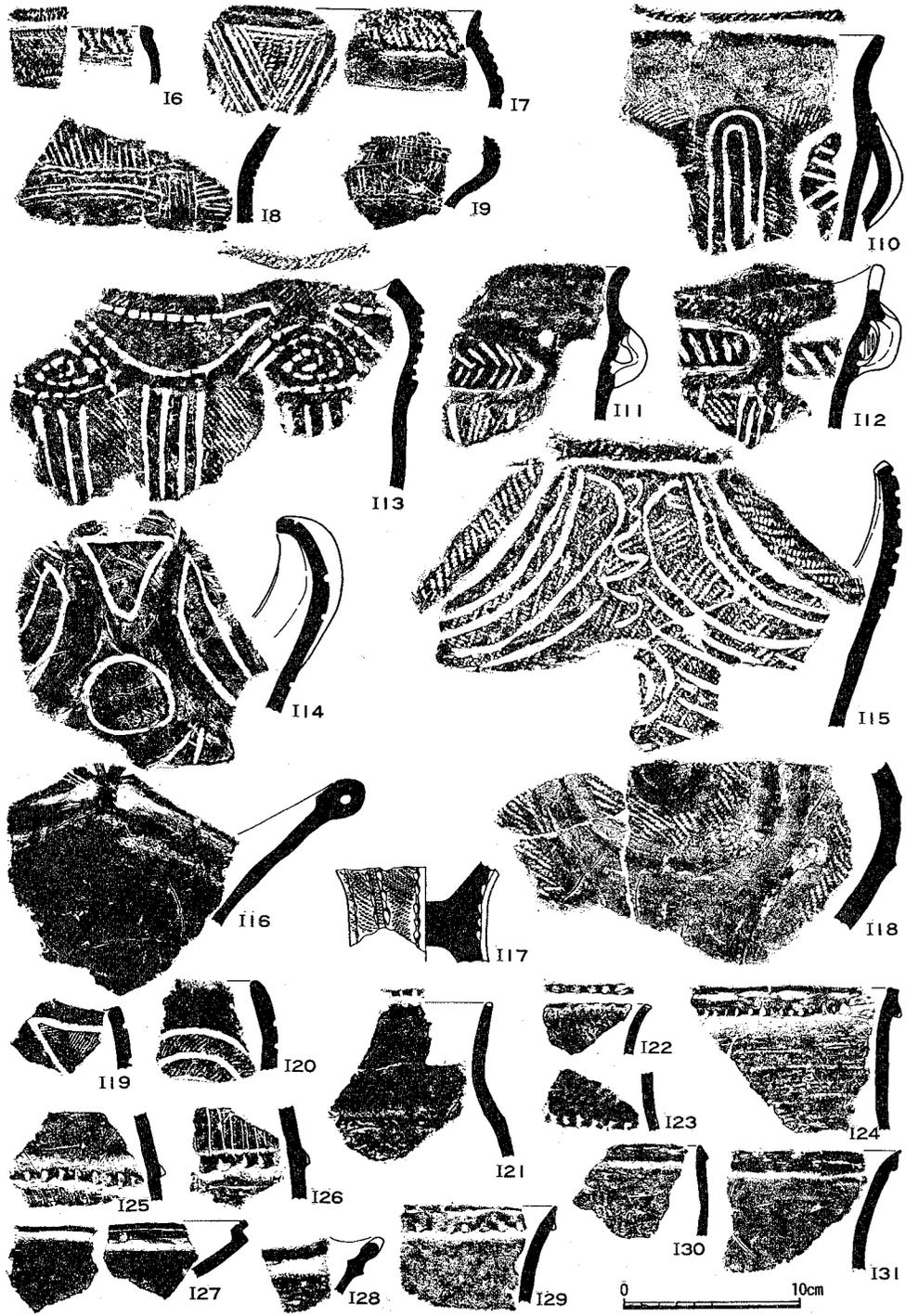
弥生前期の土器 第10層から出土した壺1点である(I 5)。

土製品 第10層から1点出土した。不整円形の粘土板の両脇を一部凹ませたもので、厚さは1.2cm、表面には刺突を施し、裏面には指圧痕が残る(図版6-I 64)。

石器 石鏃、磨製石斧、切目石錘、石皿、磨り石、敲き石が出土した(図版6)。石鏃はサヌカイト製の無茎石鏃(I 67~I 69)である。磨製



第8図 縄文土器と弥生土器



第9圖 繩文土器

石斧は、定角式(I 70)と乳棒状(I 71)のものがある。切目石錘は、河原石の長辺両端に磨り切って溝を作ったもので、重さ25g~65gのものが多い(I 72・I 73)。

石製品 石製垂飾具が2点出土している(図版6)。I 65は隅丸長方形で片面に溝があり、茶色の滑石製。I 66は楕円形を呈し、砂岩製である。2点とも両面穿孔である。

(2) 平安時代以後の遺物(図版7, 第10図)

平安時代以後の遺物は、層位や遺構別にまとまる資料がないため、種類別に分けて記述する。

土師器 I 32~I 41が皿, I 42が羽釜である。色調はI 32~I 36・I 38・I 40~I 42が淡褐色, I 37・I 39が灰白色である。口縁部形態はI 32がつくりの良い「て」字状, I 38とI 39がつくりが粗雑で厚手の「て」字状, I 33~I 36は2段撫で端部外反である。I 37とI 40は口縁部に1段の撫で, 端部に面取りを施すが, I 40はI 37より扁平である。I 41は型入れの製品で, 表面に多量の雲母が付着する。I 32とI 42は10世紀, I 33~I 36・I 38・I 39は11世紀頃で, 平安時代の遺物である。I 37とI 40は, 口縁端部に面取りを施すものとしては末期的な特徴をもち, 14世紀初め頃であろう。I 41は江戸時代の製品である。

須恵器 I 43は甕, I 44~I 46は壺, I 47は椀, I 48は鉢である。胎土はI 43・I 48が黑色粒を含み, I 44~I 47は少量の長石と石英粒を含む。すべて平安時代の製品であり, I 43~I 47が9~10世紀, I 48が11世紀頃にあたる。

緑釉陶器 I 49は付け高台の稜椀, I 50が切り高台の椀である。I 51とI 52は大型で器壁が厚く壺の底部であろう。胎土はI 49・I 51・I 52が須恵質, I 50が土師質である。I 52のみは胎土に砂粒が多い。色調はI 49が明緑色, I 50は淡緑色, I 51は黄緑色, I 52は濃緑色の部分と淡緑色の部分がある。I 51・I 52は内面に釉を施さない。I 49~I 51は平安京周辺の製品である。

灰釉陶器 I 53は段皿, I 54~I 56は椀である。I 53とI 56は胎土と色調が猿投山古窯址群の製品に酷似し, 黒笹78号窯式に類例がある。I 54とI 55はそれより年代が降り, 尾北古窯址群の製品の可能性がある。

白磁 I 57は壺または水注の口縁部である。胎土に少量の砂粒を含み, みかけの釉調は淡青色を呈する。

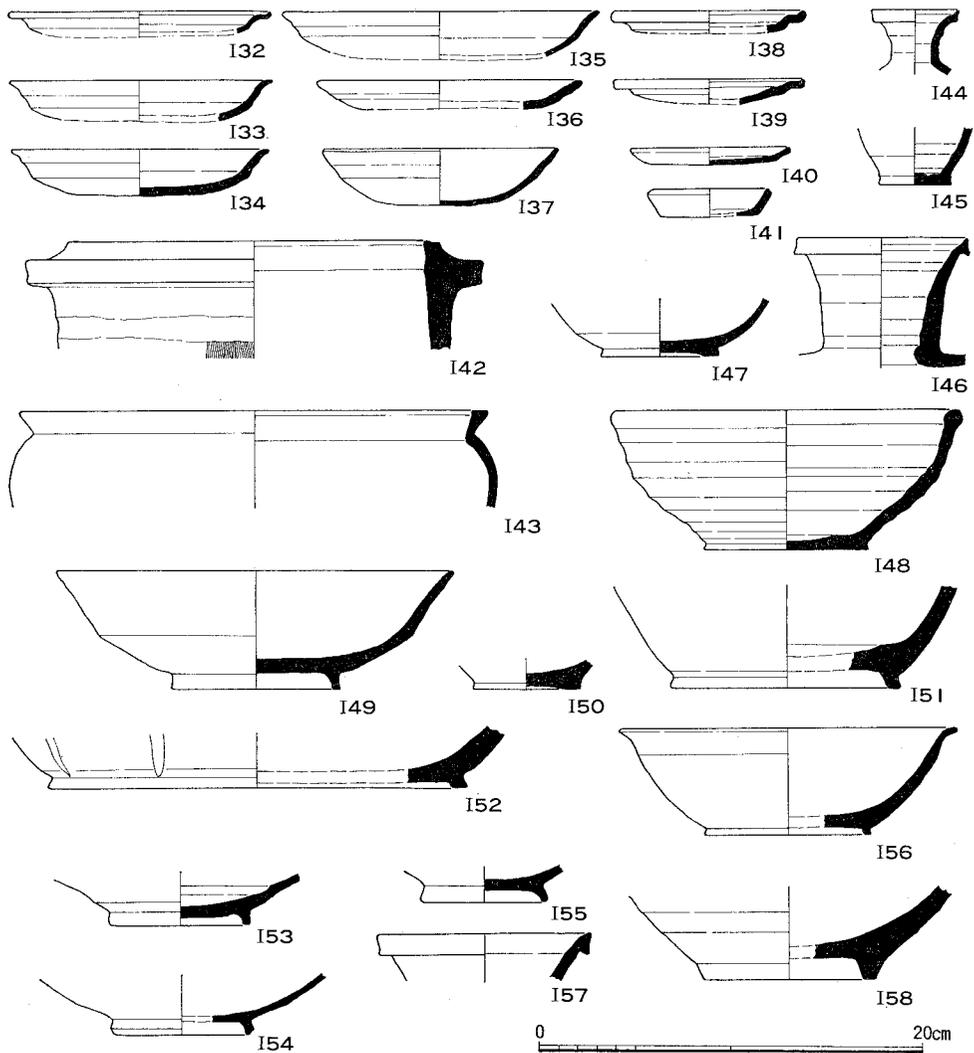
唐津 I 58は鉢。胎土は赤褐色で少量の砂粒を含む。色調は外面が茶褐色, 内面に灰白色の文様を施し, みかけの釉調は淡赤褐色である。

軒瓦 I 60は複弁八葉蓮華文軒丸瓦で外区に珠文を施す平安前期の瓦である(図版7)。

I 59は平安中期の『小乃』銘単弁八葉蓮華文軒丸瓦で、I 61は平安中期の単弁八葉蓮華文軒丸瓦である〔平安博物館編77〕。I 62は平安後期の唐草文軒平瓦で、BE 33区出土の瓦に同範がある〔京大埋文研77図版41〕。I 63は宝相華文軒平瓦で平安後期の瓦である。

5 植物遺体

植物遺体は、花粉、木質物、種実類にわけて分析、調査を行った。本節は昭和54年8月31日に提出された各担当者の報告をもとに筆者が要約し作成したものである。



第10図 土師器，須恵器，緑釉陶器，灰釉陶器，陶磁器

(1) 花粉分析

花粉は3地点で採取したが(第3図 P₁~P₃), 分析は P₂・P₃ 地点について行った。堆積層中の樹木(風媒)花粉数は、泥炭質土層では平均約3万個/ccであり、青灰色粘質土層(第21層)は0.1万個/ccと少ない。これは厳密に考察を行う時に問題になるであろう。また第14層、第17層は約5.5万個/ccと多い。

第12層から第24層までで、最も多出している花粉はアカガシ亜属である。ついでヒノキ科型、エノキ型、スギ、トチノキが多い。それに対して、二次林性樹種であるマツ属、コナラ属、シデ属などは少なく、草本花粉も樹木花粉と比べて著しく少ない。したがって、調査区域付近の微高地には、カシ類を主要樹種とし、スギ、ヒノキ、モミ等の針葉樹、エノキ、ムクノキ等の暖地性落葉樹を含む照葉樹林の極相林が成立していたであろう。ただし1年生草本であるヒユ属、アカザ属が各層よりわずかに出現しているので、これらの生育しうる裸地やゴミ捨場等のように、土壤がしばしば攪乱を受けやすい環境もあったであろう。一方、トチノキの花粉は各層から高頻度出土しており、堆積の全期間にわたり分布していたと推察される。オニグルミ属は第15層からのみ多く出ているので、この層が堆積した短い期間にだけ分布していたと思われる。

京都市深泥池の花粉分析結果によると、後氷期の京都盆地の植生は①ナラの時代、②エノキの時代、③カシの時代、④マツの時代と移り変ってきている。第12層から第24層までは、このカシの時代の堆積物である。ただし P₃ 地点の第24層はエノキとナラ類が多く、エノキの時代からカシの時代への移行期のものの可能性もある。

気候は、イスノキ属やナギ属の花粉の存在からみて、現在より幾分暖かく、年較差の少ない海洋性気候であったと考えられる。

(2) 種実類

種実類については各層10か所の地点で試料の採取を行った(第3図 N₁~N₁₀)。第17層で全地点の調査を行い平面分布を考察し、垂直分布の調査は N₁ と N₄ の2か所で行った。

平面分布 トチ、イチイガシ等分散能力の低い種子は集中して分布し、一方飛翼を持ち分散能力の高いイタヤカエデは、ほぼ一様に分布している。また水湿地の植物の種実も集中して分布している。これらの事実から次の事が推測できる。この堆積物は河川により運搬されてきたものではなく、林床がそのまま砂で被われたような堆積物である。第12層、第20層上面などでの足跡や、各泥炭質土層中の立木や倒木の存在もこの推測を支持している。したがって、トチノキ、イチイガシ、キハダ等は種実類の集中している付近に生育し

ていたと考えてよく、トチノキ、カエデ等の落葉広葉樹とイチイガシが、少なくとも河畔において混交して生育していたと思われる(第11図)。

垂直分布 水平分布で述べたことから判るように、種実の採集地点周囲のわずかな範囲の植生を示す。林床がそのまま保存されたような堆積物では、とりわけこの傾向が顕著である。したがって、種実の垂直的な変化から、すぐに植生や気候の変遷を論ずるのは困難である。しかし、少なくとも次のような傾向がある。

第15層から第24層までは、ほとんど変化はなく、トチノキ、イタヤカエデ、ムクノキ等の落葉樹林とイチイガシが混交する温暖多湿な林であった。しかし、第16層より上は、ヒノキ、モミが増加するようで、この事は気候の乾燥化を示している可能性がある。以上のほかに、N₄の第15層より *Oryza Sativa* (イネ)のモミガラが数片得られている。

(3) 木質物

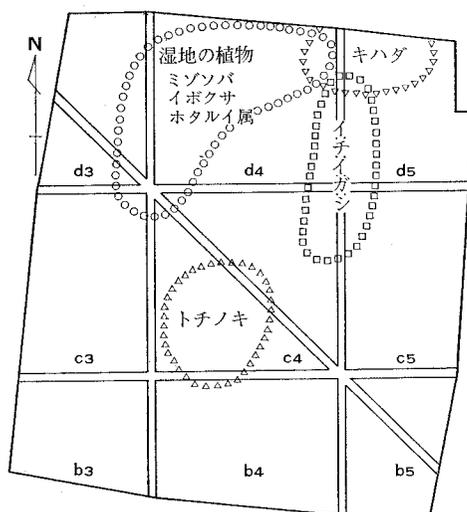
出土した材については、埋没時の状況あるいは埋没前の森林の様子を復原するために、実測図を作成し一部をサンプルとして採取した。埋没林の大まかな内容を把握するため、予備的な観察を行い、12点について同定することができた。残りのサンプルは、京都大学木材研究所でプレパラートにして検鏡中である。

常緑ガシ、トチノキ、カヤを同定しえたのみであるが、この結果から第12層～第20層の森林が基本的にカシ林であったこと、トチノキの存在から河辺林であったと知ることができた。また注目されるのは、縄文前期以後の遺跡から出土する木炭には、二次林的要素といえるクリ、コナラを含むことが多いが、ここでは1点も見られなかったことである。少なくとも遺跡周辺の森林は人為的森林破壊の影響を強く受けていないものと予想される。

6 そのほかの調査

植物遺体の調査のほか、脊椎動物遺体の検出、地質学的調査、¹⁴C年代の測定を行った。地質学的調査の成果は第2節層位と堆積でふれたので、その他の調査について述べる。

脊椎動物遺体の検出は、1.0 mm のふるいで水洗し残ったものを過酸化水素水で処理し、



第11図 種実類による植生復原(1/400)

乾燥したものを原試料とした。約3.8tの土を処理したが、1点の脊椎動物の骨や歯も見られなかった。この原因として化学的な問題があろう。地下水の移動の多い所では、リン酸カルシウムが保存されにくい。ここではすでにこれが溶解してしまったのではないかと考えられる。

^{14}C 年代測定値は、以下の8点である。

第15層出土の材が、 $2005 \pm 16\text{BP}$ (Ksu-304)、第15・16層の土が $2350 \pm 25\text{BP}$ (Ksu-286)、第19層の土が $2630 \pm 60\text{BP}$ (Ksu-287)、第20層出土の材が $2750 \pm 20\text{BP}$ (Ksu-282)と $2770 \pm 40\text{BP}$ (Ksu-284)、第20層の土が $2770 \pm 40\text{BP}$ (Ksu-288)、第21層出土の材が $2490 \pm 20\text{BP}$ (Ksu-299)と $2770 \pm 40\text{BP}$ (Ksu-283)である。

7 小 結

今回の調査は縄文時代の低湿地遺跡の調査として、当時の環境を復原することを目的として行った。現在も整理中であり、その成果を正式な報告書として昭和55年度に刊行する予定である。したがって、本節では今後の見通しを述べるにとどめる。

出土遺物については、縄文中期末の土器が、BE32区から出土した同時期の土器[中村74a・75]よりやや古い様相を示し、中期末の土器を細分できる可能性がある。また縄文晩期の凸帯文土器も層位によって細分でき、今後さらに編年的検討を行うつもりである。

植物遺体は、それぞれの分析対象によって、結果から推測できる植生の広がりや異なっており、また同定できる属や科が違うため、多種類の試料を比較検討すべきである。そして、その上で復原された当時の環境と、縄文人の経済活動との関係を考察してゆく必要があると考えている。

本文を執筆するにあたり、第2節は石田志朗、竹村恵二、飯田義正、第4節の花粉は中堀謙二、種実類は粉川昭平、南木睦彦、木質物は西田正規、第5節の脊椎動物は岡崎美彦、石田克、 ^{14}C 年代測定は山田治諸氏の報告を使用した。ただし、筆者が要約した部分もある。また、亀井節夫京都大学構内遺跡調査会長に、種々の調査の依頼からその調整を含め、調査を指導して頂いた。ここに感謝するしだいである。

〔注〕

- (1) 座標値が整数値でないのは新座標に変換したためである(第1章2参照)。
- (2) 同様の溝は藤原宮跡などでも多数出土している。

第3章 京都大学本部構内AW28区の発掘調査

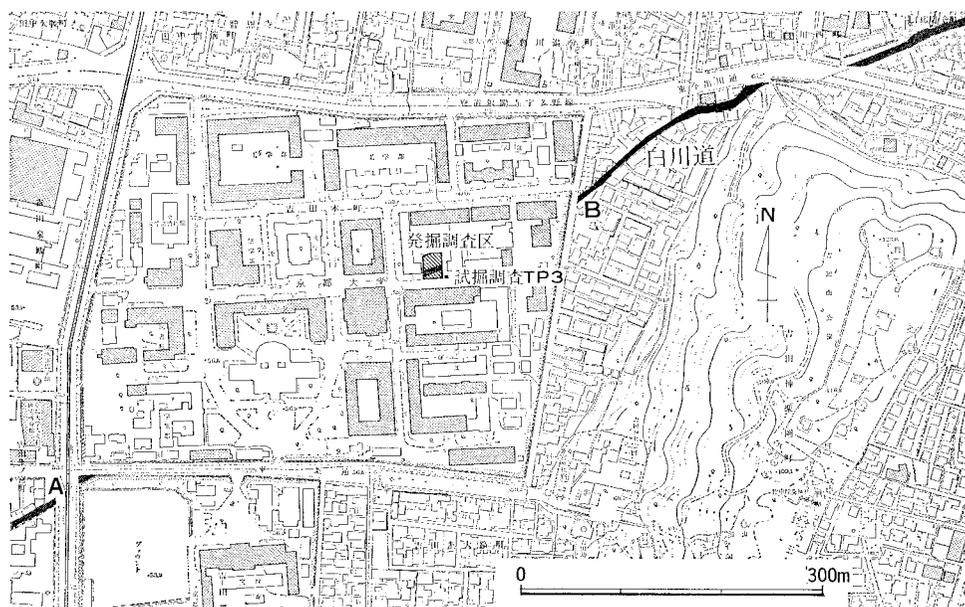
岡田保良 吉野治雄

1 調査に至る経過

昭和53年、工学部イオン工学実験施設および電気工学科研究室等の新営が計画されたため、同年7月、その予定地すなわち本部構内電気系教室の敷地内に、4ヶ所の試掘坑を設けて、遺跡確認のための試掘調査を行った。そのうち1ヶ所の試掘坑TP3(第12図)において、中世末頃の遺物を伴う古道の路面を検出した〔京大埋文研79〕。

この試掘調査の結果、建物新営予定地の発掘調査を2期に分けて実施することになり、昭和53年度中に、イオン工学実験施設にあてられる敷地の調査を完了し、その他の建物予定地については、昭和55年度に発掘調査を行うことになった。なお、調査に先立って、解体された電気系教室建物は、明治35年に増築された部分で、この敷地を含めて、本部構内全体は明治20年に第三高等中学校の用地となり、後に京都大学開設の地となって現在に至っている。

以下の報告は、その第1期分の発掘調査の成果をまとめたものである。調査面積は480m²、昭和54年1月16日に発掘を開始し、同年3月末日に現場作業を終了している。



第12図 調査区の位置

2 層位

調査地は、北東から南西にかけて緩く降る白川水系の沖積地上に立地する。現地表の標高は、東北部で60.2m、西南部で59.8mをはかる。

層位の状況は、後述する近世の道路遺構SF1をはさんで、北と南でかなり異った堆積を示す(図版8-1~3, 第13図)。すなわち、北半では基本的に、上から表土(第1層)、暗灰色土(第2層)、黒褐色砂質土(第8層)、茶褐色砂質土(第9層)、暗茶褐色土(第10層)、淡茶褐色土(第11層)、灰黄色砂質土(第12層)となる。一方、南半では、表土、暗灰色土以下、黄灰色細砂(第3層)、明灰色粘質土(第4層)、暗灰色粘質土(第5層)、黄褐色土(第6層)、灰褐色土(第7層)となって第12層に至る。ただし、溝SD1と道SF1との間では、第5層を除去するとただちに第12層が現われ、この上面において、室町前期の土坑や江戸中~後期の多数の野壺を検出している。

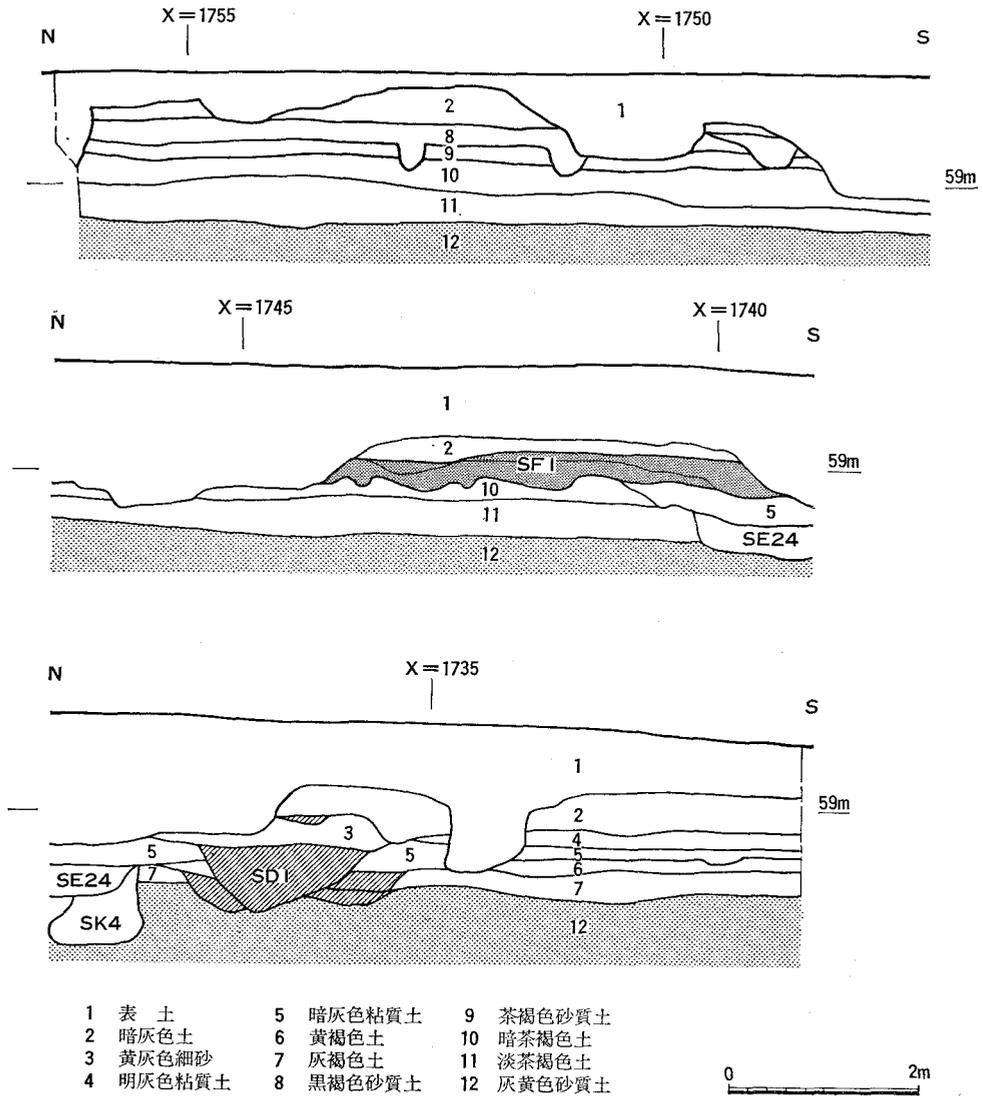
第1層は、第三高等中学校が創設される明治20年以降の整地層または攪乱を受けた土層で、X=1735ライン付近は、排水管理設による攪乱、X=1737~1740 および X=1744~1748 それぞれに沿う攪乱は、旧建物基礎のぬき跡である。

第2層は、明治20年頃まで耕作されていた畑土、第3層は、第4層上面から掘りこまれた溝SD1を埋める砂礫の直上に帯状に堆積し、南へ下る小さな段を形成する細砂で、遺物はほとんどない。第4層は粘質に富む水田耕土である。第5層は第4層ほど粘質ではないが同様の水田耕土で、これら2層からは、江戸後期の陶磁器が多く出土する。

第6層は、腐食質をほとんど含まず、整地のために盛られたとみなしうる土層で、ごくわずかに陶磁器を包含する。第7層は、室町後期を主とし、近世陶磁器若干を包含する。第6・7層ともに、溝SD1南側の一隅にのみ検出できるにすぎないため、未だ年代を定めるには至っていない。なお、東壁に沿うサブトレンチの南端において、第7層の下位にうすい氾濫砂礫層を介して、SF1と同様の路面の堆積の一端を確認している。これが昭和53年度の試掘で検出した遺構に続くものであることはまちがいない。

第8層からは、室町前期以前の土師器がわずかに出土しているが、第9層以下からは遺物が出土していない。

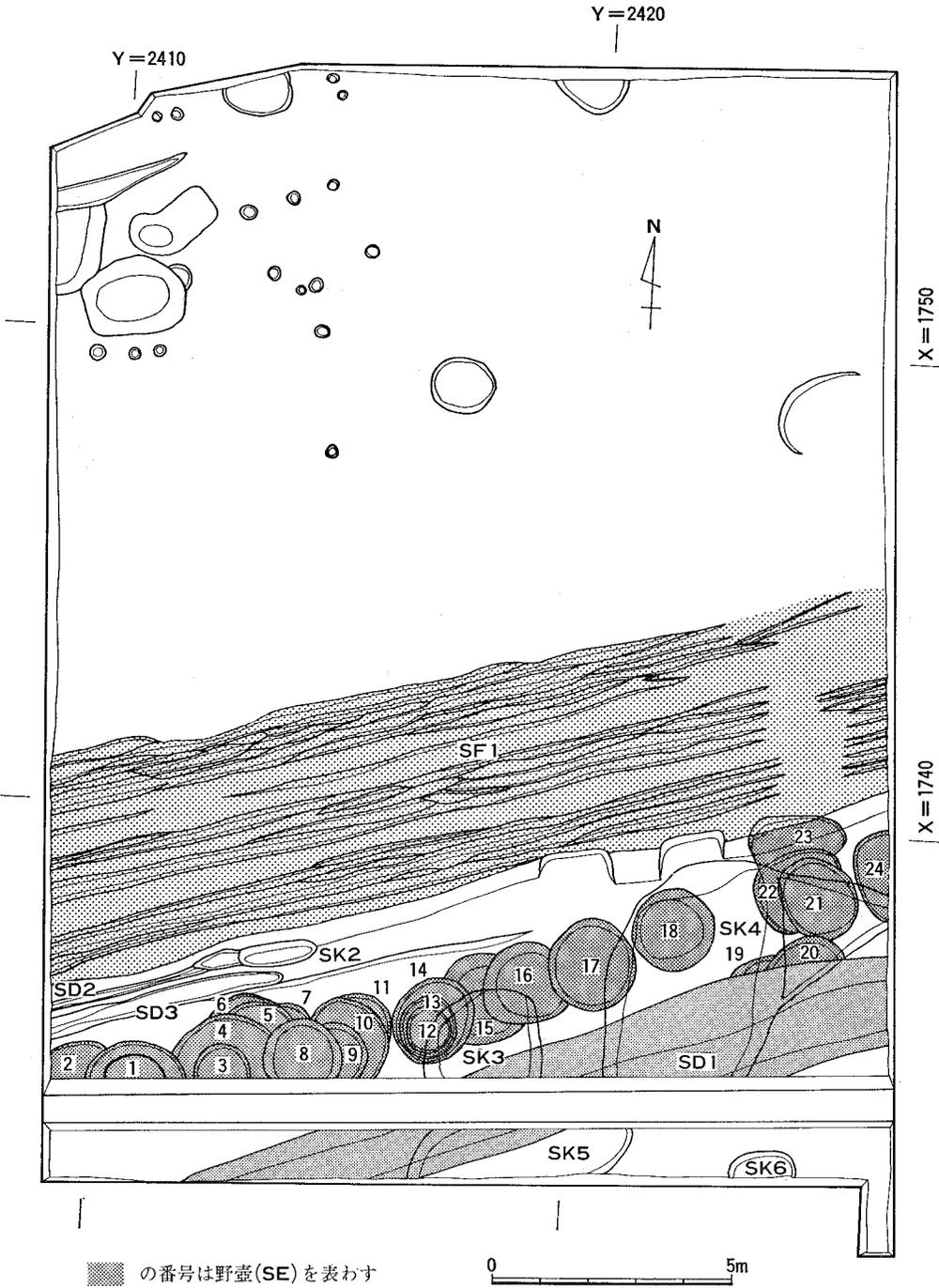
ここで道SF1と層位との関係をもてみると、この路面は、第10層まで削平地業が行われてはじめて形成されたものであり、その南路肩には第5層がかぶる。さらに、第4層が耕作される時期と併行して、一部第5層上面にまで及んで、路面上に土砂の堆積が継続したと考えている。



第13図 東壁の層位

3 遺構

江戸後期の遺構群として、近世の白川道 SF 1, 溝 SD 1～SD 3, 野壺 SE 1～SE24, 土坑 SK 2 があり、室町前期頃の遺構として、土坑 SK 3～SK 6 がある(図版 9-1・2, 第14図)。これらのほかに、野壺 SE 1 の一部を壊して掘られ、夥しい陶磁器片を投棄した明治期の土坑 SK 1 がある。なお、調査区北半にみられる不定形の大小の凹地は、いずれも人為的な痕跡をみとめがたい。以下、白川道を中心に各遺構の概略を記す。



第14図 おもな遺構

道 SF1 は、第12図の地点Aから地点Bに至る通称「白川道」の一部である。この道は、元来北に高く南に低い緩い傾斜のある土地を切り通し、道の北側には高さ1m程度の崖面を伴い、南側は更に削平して落差0.5m前後の肩部を造り出すように普請されている。その当初、道幅は約4.5mで、その上面には少なくとも9対以上の錯綜した轍が刻まれている(図版10-2)。1対の間隔は平均して1.2m程度とみなしうる。ただし、これら多数の轍は、道の両端と中央の3筋に沿って集中しており、中央の轍は、往還兼用となることもあるらしい。

轍跡には砂礫が堅く詰まり、更にその上に薄く幾重にも面をなして土砂が堆積し、その厚さは0.2~0.3mに達する(図版10-1)。ある時期には、路面上に小礫を一面に撒いてつき固めるといふ舗装に類する面も認めている。また、この道がはじめて普請された後、南側には暗灰色の耕土(第5層)が盛られるが、路面は次第にこの耕土の上にかぶさるように南へ拡がり、廃絶直前には幅6m近くになっていた。ただし、後述する野壺の切り合い関係からみて、第5層の耕土が盛られる以前にも、道は時とともに南へ拡がるか、ずれていく傾向があったようである。

この道が廃絶されるのは、第三高等中学校の用地がこの地をとりこんだ時点と考えるのが最も有力であるが、それについては、文久年間に設置されたという尾張徳川藩京屋敷が⁽¹⁾囲いこんだ範囲を考慮する必要がある。また、はじめて普請された時期については、轍など道SF1から直接出土した遺物はわずかな細片のみで、年代を定めるには至らないが、後述する溝SD1下層や、野壺群の推定年代から推して、17~18世紀頃としたい。ただし、調査区の東南隅第12層上面で、SF1に先行する路面をわずかに確認しており、昭和55年度に予定している東側隣接地の発掘調査をまって、新旧2つの道について再考することになるろう。

溝 道SF1の南側に平行して、東北東から西南西に流れる溝SD1がある。明瞭な掘りこみは、第5層上面からであるが(溝SD1上層、第13図)、底面の北側にも南側にも、第5層より下位に流路の痕跡があり(溝SD1下層)、道普請が行われた頃にはすでにこの流路があった可能性が大きい。下層からは、洪武通宝1点(第16図II37)が出土しており、初期の流路が、渡来銭の流通が禁止される寛文10(1670)年前後を大きく降ることは考えにくい。また上層からは大量の陶磁器片に混って、褐色のガラス片や文久3(1863)年初鑄の文久永宝(第16図II43)が出土しており、かつ明治期の貨幣が出土していないことから、この溝が埋まったのは明治維新の前後とするのが妥当であろう。その後、溝SD1は第3層で覆わ

れるが、その上面には、ごく小規模ではあるが幅0.6m、深さ0.15m程度の流路が、まったく同じ位置に存在する。

溝SD2・SD3は、ともに道SF1の路肩に接して設けられていた小溝で、次に述べる野壺群と同時に、ある時期に削平を受けたらしい。

野壺 SE1のみ第4層上面で検出しており、他のSE2～SE24はすべて第5層の下、第12層上面で検出した。SE1は、径2.2mの円形掘形に、漆喰で径1.2mの底と壁を築く。SE2～SE24では、漆喰をまったく用いず、代わりに木組の壁をもっていた痕跡をとどめる例が多い。みな円形で、その直径は1.2mから1.9mまであって一定していない。多数の野壺が同じ場所で何度も作り直されているが、北にずらして作り直すということがまったくない。また、道SF1にかかる野壺はSE23を除いてほかになく、さらに、SE19・SE20の2例以外に溝SD1にかかる野壺もない。これらのことは、野壺群の配置が、つねに道SF1と溝SD1とに制約され、かつ道は、野壺群をわずかずつでも南へ押しやるように路面の拡がりを続けたとみるべきであろう。

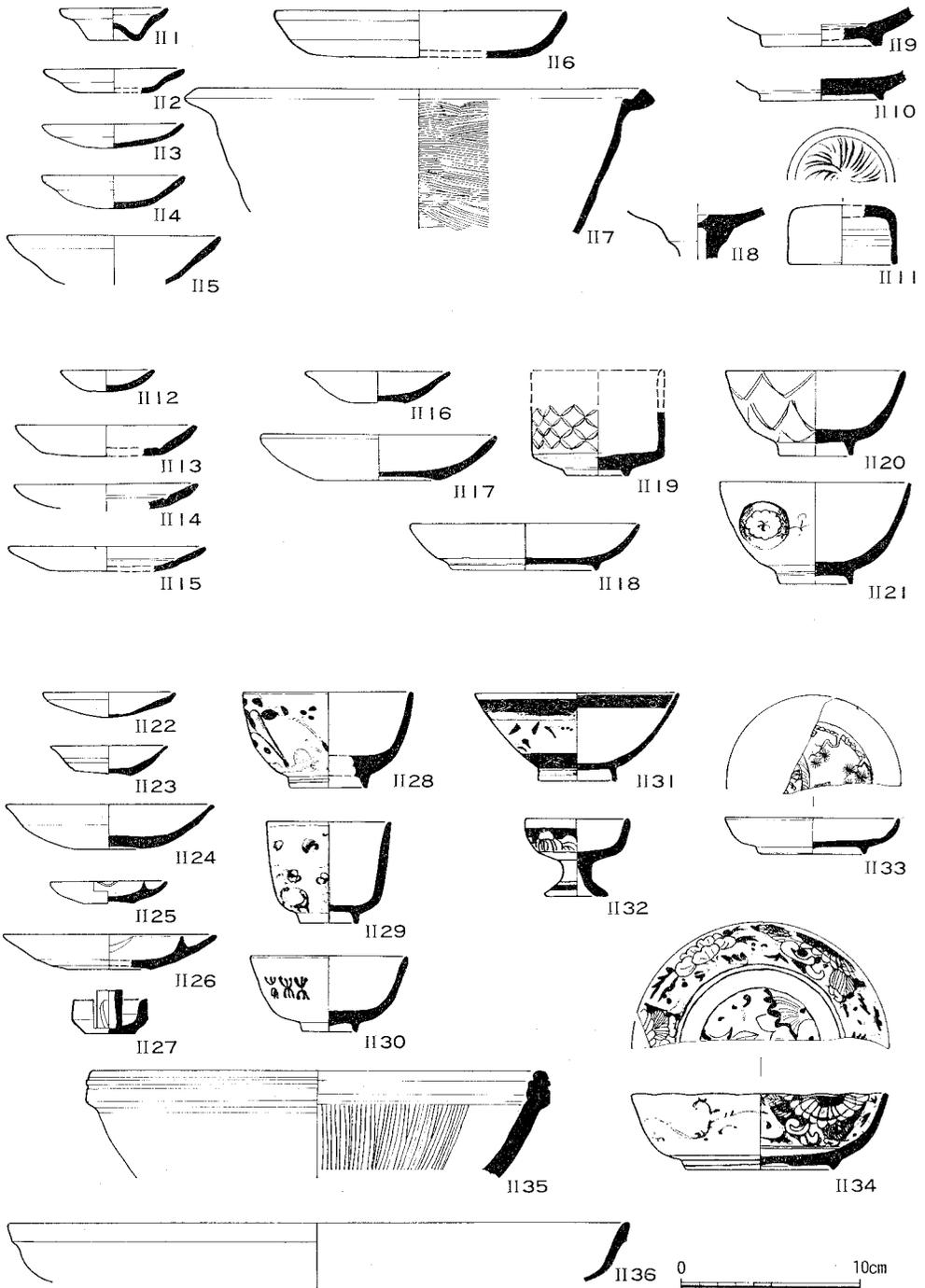
これら23基の野壺群の埋土からは、陶磁器の細片が少量出土しただけで、その年代を定めることはむづかしいが、SE3から古い時期の寛永通宝が出土している(第16図II38)。道SF1が普請された時期あるいは溝SD1下層の年代を示唆するようである。

土坑 第2層上面でSK1、第12層上面でSK2～SK6を検出した。SK2は溝SD2の延長上にある落ちこみで、遺物はほとんどないが、道SF1の初期に併行する頃の遺構であろう。SK3～SK6は、白川道とは直接関係のない室町前期の遺構群である。SK3は、上部に集石を有する土坑で、深さ1.7m、東西幅2.5mをはかる(図版11-1・2)。他の土坑に比べて瓦を多く出土しており、埋めるときに意図的に瓦礫を投棄したものであろうか。SK4は深さ2.6mに達する大きな落ちこみで、壁はほぼ垂直に立ちあがる(図版11-3)。SK5も同様の形状で、深さ2.0m。SK4と連なる可能性が強いが、SK3との切りあい関係は確認できなかった。これらが長く連なることになれば、非常時に備えた仮設的な堀となる可能性がある。次回の調査をまって再考したい。

4 遺物

近世後半の遺物を中心に、整理箱56ばい分が出土した。ここでは、室町前期以前の土器を出土したSK3～SK6、2層に分層できる江戸中期以降の溝SD1上・下各層出土の主要遺物を中心にその概略を記す(図版12、第15・16図)。

土坑SK3～SK6 これらの土坑のうち、SK3から比較的まとまって瓦が出土して



第15圖 土師器，瓦器，陶磁器

いるほかは、出土する土器の構成は互によく似ている。II 1はSK 3, II 9はSK 5から、II 2～II 8, II 10・II 11はSK 4から出土した。

II 1～II 6は土師器皿。II 1・II 5が乳白色, II 2は赤褐色, II 3・II 4・II 6は淡褐色を呈する。II 7は瓦器土鍋。短く厚い口縁部をもち、内面には横位の刷毛口をとどめる。II 8は土師器高杯の軸上端部で、杯部との継ぎ目を撫でつけた痕がのこる。これら8点のうち、土師器皿II 6は、体部外面に1段の撫でを施し、口縁端部を面取りぎみに撫でるといふ、より古い特徴をもつが、他はみな室町前期頃の製品とみなしうる。

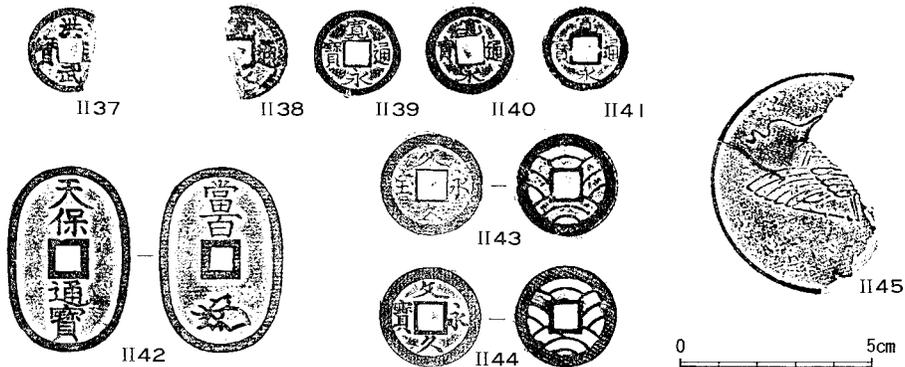
II 9は明緑色の釉がかかるやや軟質の緑釉椀, II 10は低く外反する高台をもつ灰釉椀または皿である。上記の土器群とは年代を大きく異にするが、土坑群が掘られた頃には、より古い時期の包含層があったものと考えている。

II 11は、内面露胎の青白磁で、上面に放射状の彫文を有する。梅瓶の蓋となるものであろうか。

溝SD1下層 II 12～II 15は土師器皿。II 13・II 14は口径10cm, II 15は11cmでいずれも見込み周縁に圈線を刻みこむ。II 16・II 17は灯明に用いられた京焼の皿で、口径は各々8.1cmと12.3cm。外面から底部にかけては施釉されない。

II 18～II 21は、伊万里焼染付。このうちII 18～II 20の3点は、釉がかなり剥落している。この層から出土する染付にはこうした例が多い。

溝SD1上層 II 22は土師器小皿。口縁外面に撫でを施し、つくりはよい。II 23～II 26は、京焼の灯明皿。2型式各々大小を掲げたが、II 25・II 26のような欠きこみをもつ輪状の突起を有する例は、下層になく、この上層に多く出土する。II 27は、中央に灯芯を通す筒状の突起を有する鉄釉灯明皿である。



第16図 銭貨、和鏡

II 28～II 34は染付。出土する器種は多様で、高足杯II 32には赤絵が施されている。

II 35は備前焼すり鉢。表面は赤褐色で、卸し目は8条単位で密に重ねて施される。

II 36は土師質の無釉陶器。器高に比して、口径は24.5cmと大きい。この器種は少なからず小片で出土しているが、火にかけた痕跡をもつ例が多い。

このSD 1上層からは、14箱ほどの陶磁器類を出土しているが、II 36のような用途がよく判らない陶器や灯明皿II 25～II 27は、下層ではまったくみられない資料である。

そのほか、溝SD 1やその周辺からは、洪武通宝1点、寛永通宝5点、天保通宝1点、文久永宝2点、不明2点の計11点の銭貨を採集している(第16図)。寛永通宝5点のうち、野壺SE 3出土の1点(II 38)は径2.4cm、II 39～II 41は2.3cmの径である。また、II 45は羽根の浮彫のある白銅製の鏡である。溝SD 1上層から出土した。

II 46(図版12)は、明治時代の土坑SK 1から出土したチャート製の火打石である。ほかにも8点採集している。

5 小結

今回の調査による主要な成果は、埋没していた白川道を、明確な道路遺構として発掘したことである。しかもこの遺構自体は、昨夏の試掘調査によって推定していた位置から、北へ10mばかりはなれて検出したものである。試掘を終えた時点で、路面が近世初頭を降る時期のものではないことに一つの問題点を指摘しておいたが〔京大埋文研79〕、江戸時代には、今回発見の道SF 1が新道として普請しなおされていたことが判明したわけである。なお、試掘時に検出した旧道の延長は、調査区の東南隅をわずかにかすめて通じているようであるが、その路面の標高は、SF 1より約1m低い。この旧道の上面を、洪水によると考えられる砂礫層が覆っていることと、より高い位置にSF 1を普請していることから、旧道を作り替える要因としては、たび重なる水害を避ける目的を考慮せねばならない。

さて、この白川道の普請と災害に関して、近世初頭の文献に興味深い記載がある。吉田神社の神官吉田兼見の日記『兼見卿記』と、同社内神竜院に住した兼見の弟梵舜が書き綴った『舜日記』に、身近な記事として「山中路」すなわち白川道のことや水害のことが散見される。⁽²⁾

まず天正3(1575)年2月、織田信長が吉田、白川等の郷民たちに命じて「山中路六百間分」を普請させている(兼見卿記)。このとき道幅は「廣三間」とした。ところが天正6年5月、「屋敷之内・少路以下無正躰、浄土寺之者於山中路流死、白川在家廿間計流損」(兼見卿記)という大洪水があり、信長の輩下がこの年の9月に山中路の改修を命じている。降

って慶長13年4月にも「神宮寺乾方之土井、昨日之大雨崩、路次已下散々損了」(舜旧記)という水害があった。

これらの記事以外にも、水害の記録は毎年のように書きとめられており、当時「山中路」もしばしば被害をこうむっている。

天正3年には、確かに新道が普請されているが、これを今回の遺構SF1にあてることはできない。むしろ東南隅でわずかに確認できた旧道の方がそれにあたる可能性がよい。ただ旧道の廃絶と新道の普請の年代が同じころになるのかという点については、次年度の調査の課題にしたい。

なおこの白川道の歴史は、決して信長の時代に始まるのではなく、『京都の歴史1』や『大津市史1』では、平安京成立以前から近江と山城盆地とを結ぶ主要路の一つにあげている。しかし現在のところ、発掘の上からその徴証は得ていない。

また、白川道SF1の廃絶に関して、明治維新前後の絵図・地図類を検討してみると⁽³⁾、今回の調査範囲は、尾張藩邸の東方にはずれる可能性がよく、したがって第三高等学校が創設される頃までは道路として機能していたと考えるべきであろう。

〔注〕

- (1) 『京都大学建築八十年のあゆみ 京都大学歴史的建造物調査報告』〔京都大学工学部建築学教室建築史研究室編77〕では、旧尾張藩邸跡地が、現京大本部構内に相当するとの指摘がある。
- (2) 『史料纂集』『兼見卿記一』(元亀1年6月～天正9年9月)と同『舜旧記一～三』(天正11年1月～慶長17年12月)による。
- (3) 名古屋蓬左文庫蔵「尾張藩吉田屋敷之絵図」、慶応4年2月刊「改正京町御絵図細見大成」、および「上京元三十四組新市街計画道路之図」(『京都府百年の資料第7巻』所収の明治22年9月臨時府会資料)などによる。

第4章 京都大学吉田キャンパスの試掘調査

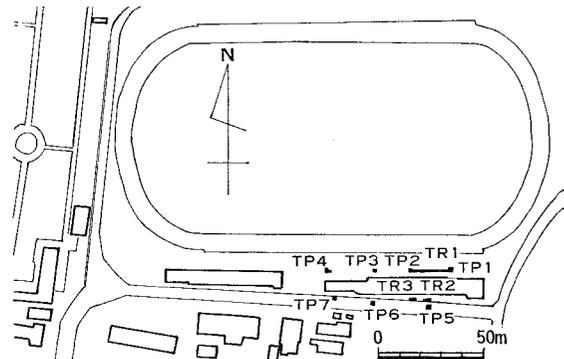
岡田保良 清水芳裕 吉野治雄

1 北白川合宿研修所新営予定地BH37区

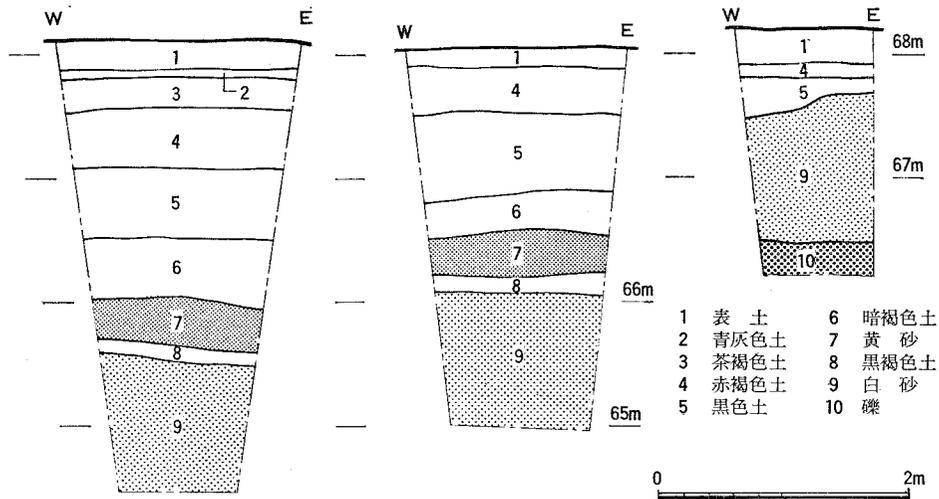
建物予定地は農学部グラウンドの南側で、現在体育クラブ部室のある場所である。当地は北白川扇状地の末端に位置しており、東から西へかなり急に下がる地形を示す。これを削平して造成したグラウンド部分と、削平を受けなかった道路部分とに分けて、 $2\text{m} \times 2\text{m}$ の試掘坑を合計7ヶ所設け(TP1~7)、TP1とTP2とを幅1mのトレンチ(TR1)で結んだ。また、これとは別に幅1mのトレンチを2ヶ所設けた(TR2・3、第17図)。

層位はどの試掘坑、トレンチでもほぼ同様で、10層に大別できる(図版13-1・2、第18図)。第1層は表土である。削平を受けたグラウンド部分では平坦であるが、道路部分の試掘坑では約1mの比高差がある。第2層以下の各層は、地形の傾斜に沿って東から西へ順次下がる。第2層は青灰色土で、近世以後の耕土であろう。第3層は茶褐色土、第4層は赤褐色土で、どちらも主として室町時代の遺物を包含する。第2・3層はTP1~3、TR1~3では削平を受けているため検出できなかった。第5層は黒色土で、主として平安時代の遺物を包含するが、縄文土器も混入している。第5層はさらに2~3層に細分できるが、遺物は最上層に多い。TP5では第5層の上面で径0.6m、深さ0.3mの円形の土坑を検出した。土坑からは平安後期の土師器皿が出土した。第6層は暗褐色土で、TP3・4のみで検出した。第7層は黄砂、第8層は黒褐色土、第9層は白砂、第10層は礫である。第7層以下では遺物の出土をみない。TP1では第7・8層を検出できなかった。黄砂上面の標高は最高67.7m(TP5)、最低66.0m(TP4)、白砂上面の標高は最高67.7m(TP1)、最低65.5m(TP4)を測る。また、礫上面の標高はTP1のみで確認し、66.4mである。

遺物は主として第3層から第5層にかけて出土した(第19図)。III1は第5層から出土した平安前期の須恵器杯蓋である。口径16cmを測り、天井部は平らで受け部はやや外反する。第5層からはこのほか平安後期の土師器皿や縄文後



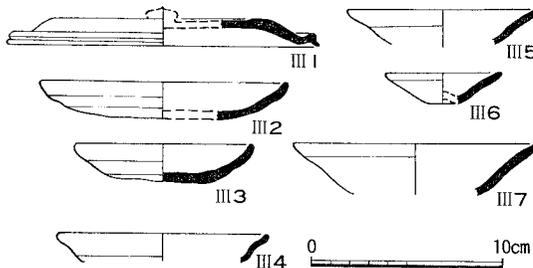
第17図 試掘坑、トレンチの位置



第18図 TP4 (左), TP3 (中), TP1 (右)の層位

期の深鉢が出土した。Ⅲ 2・Ⅲ 3はTP 5の土坑から出土した平安後期の土師器皿である。口径はそれぞれ13cm, 9.5cmで、どちらも口縁部外面に2段の横撫でを施す。Ⅲ 4～Ⅲ 7は第3層および第4層から出土した土師器皿である。Ⅲ 4は口径11cmで、口縁部が指押えにより外反する。Ⅲ 5・Ⅲ 6はそれぞれ口径10cm, 6cmで灰白色を呈し、Ⅲ 6はいわゆるヘソ皿である。Ⅲ 7は口径13cmで淡明褐色を呈し、口縁部が少し外反する。Ⅲ 5にくらべやや厚手で大型になり胎土も少し粗い。Ⅲ 4～Ⅲ 6は室町前期、Ⅲ 7はこれより少し新しい特徴を示す。第3層および第4層からはこのほか、須恵質大平鉢、口縁端部が上下に拡張する備前すり鉢、瓦器羽釜・鍋、白磁碗、青磁碗、石鍋等が出土した。

まとめ 予定地の南西約50mのBG36区では、昭和47年に農学部ガラス温室予定地の発掘調査が行われ、平安後期～鎌倉初頭の瓦溜を検出した〔京大埋文研78b〕。今回の試掘地点は農学部グランド造成時の削平で遺跡が大きく破壊されていることが危ぶまれたが、



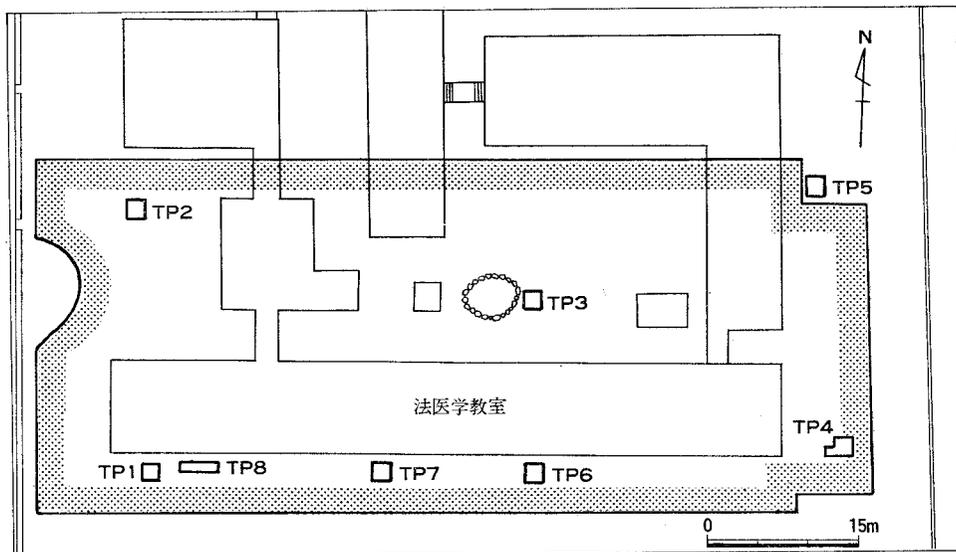
第19図 出土遺物

調査の結果、遺物包含層の遺存状態は良好で、またBG36区の層位とも対応することがわかった。このことから、瓦溜形成前後の遺跡が予定地内に拡がる可能性が考えられ、これをさらに広い範囲で確認することが今後の調査の課題である。(吉野)

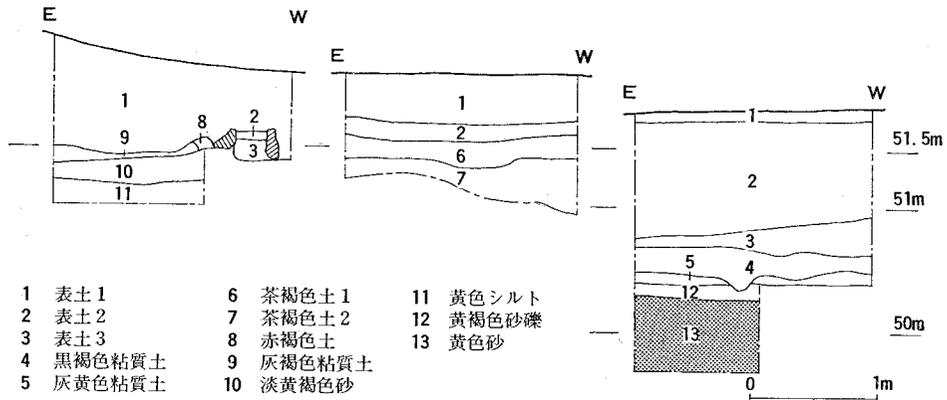
2 医学部総合解剖センター新営予定地AP19区

予定地は現在の法医学教室を含む 2776m² である。この範囲内の西端部に 2ヶ所(TP 1・2)、東端部に 2ヶ所(TP 4・5)、その間に 4ヶ所(TP 3・6~8)の計 8 個の試掘坑を設けて、遺物包含層の堆積状況および出土遺物等を確認した(TP 1~7は 2m×2m、TP 8は 4m×1m、第20図)。なお TP 4では、列石の一部を検出したため、さらに西へ 1m 拡張した。現地形は標高約 52m で東から西へ緩やかに傾斜する。全体的な堆積状況は次のとおりである。厚さ約 0.5m の表土の下に攪乱を受けた茶褐色土(TP 7第 2 層)があり、続いて平安後期から室町時代にかけての遺物を含む茶褐色土および黄色粘土混茶褐色土が堆積する。この層序は TP 3・6・7 で明瞭であるが、西端部の TP 1・2・8 と東端部の TP 4・5 とではまったく異っており、この範囲内に 3 種の堆積状況を認めることができた(図版 13-3、第 21 図)。

層位と遺構 TP 1 では地表下約 1.0m まで表土(第 1~3 層)で、これに続く黒褐色粘質土(第 4 層)、灰黄色粘質土(第 5 層)では近世以降の陶磁器類を中心に出土し、黄褐色砂礫層(第 12 層)以下は遺物を含まない。TP 2 では地表下約 0.7m までの表土層の状況は TP 1 のそれとほぼ同様である。TP 1 の灰黄色粘質土に対応するものと考えられる灰白色土の薄い層をはさんで赤褐色土、黄褐色砂質土、黄褐色砂礫、茶褐色礫の各層が続く。赤褐色土層からは室町前期の土師器がまとまって出土する(第 22 図 III 11・III 16)。TP 3 では 10~15cm の薄い表土下に土師器と少量の近世陶磁器を含む茶褐色土が約 0.5m 堆積し、平安後期か



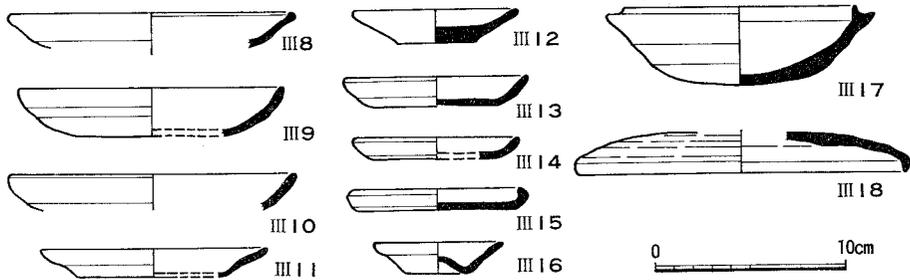
第20図 試掘坑の位置 (枠内は昭和54年度発掘調査範囲)



第21図 TP4(左), TP7(中), TP1(右)の層位

ら室町前期の土師器皿を中心に出土する。以下に続く黄色粘土と白灰色砂礫層以下は無遺物層である。TP4は東山通りに面する約1mの高まりの傾斜部分に設定した。この表土下には灰褐色粘質土、淡黄褐色土、黄色シルトの各層が続く(第21図)。また一部赤褐色土層が存在し、平安後期の土師器を出土する。第10層上面には列石が検出された。この遺構は花崗岩の切石を内側に面をそろえて南北方向に2列平行に並ぶものであり、さらに連続する。溝内には黒褐色土が堆積していることからごく最近の遺構であることが推定できた。TP4から北へ約10mのTP5では層序関係は大きく異なる。表土下には若干の遺物を含む近世以降の耕土があり、地表下1m付近の細砂・中砂からは磨滅した縄文土器2片が出土した。これらは砂の堆積過程で東北方面からの流れに伴って運ばれたものと考えられる。TP7はTP3・6とほぼ同様の層序を示す。なお茶褐色土(第7層)直下には直径5~10cmの礫が東半部一面にあり、さらに東へのびる。遺構の一部と考えられるので原状のまま埋戻した。TP8はTP1と同様の層序を示す。以上の調査からTP1とTP2・8, TP3とTP6・7, TP4とTP5ではほぼ対応する層序関係を示すことが明らかになった。このことから、東西に大きな層序の変化があり、特にTP1・2・8とTP3・6・7との間には表土下の各層位に明瞭な断絶が認められた。

遺物 III8~III16は土師器, III17・III18は須恵器である。III8・III10はTP6, III9・III12・III14・III15はTP3, III11・III16はTP2, III13・III17はTP7, III18はTP8から出土した(第22図)。III8は体部下半に削り, 上半部には撫でが施され, つまみ上げの口縁端部をもつ皿である。9世紀中葉の製品とみる。III9は外面に2段撫でをもち口縁端部を丸くおさめた平安後期の皿である。III10・III13・III14は体部に1段撫で, 口縁端部に面取りがなされてい



第22図 出土遺物

る。III15は平底で体部がほぼ直角に立ち上がり、口縁部に面取りをもつ受皿である。III12は糸切底で灰褐色を呈する。体部内外面に丁寧な撫でを施し口縁端部を丸くおさめる。III10・III12～III15は鎌倉前葉のもので、III10とIII14はこの時期の皿の大小のセットをなす。III11は体部が肥厚しながら外反し、1段撫でを施す。III16は体部がやや外反ぎみに立ち上がり底部中央が上方へ突出するヘソ皿で灰白色を呈する。III11とIII16は室町前期の皿のセットをなす。III17は須恵器杯で、体部下半から底部にかけて篋削りの痕跡をとどめ、上半部には横撫でを施す。胎土は砂粒が多く、焼成はよくない。6世紀末の時期にあたる。III18は須恵器の杯蓋で、暗灰色を呈し焼成は良好である。8世紀のものと考えられる。

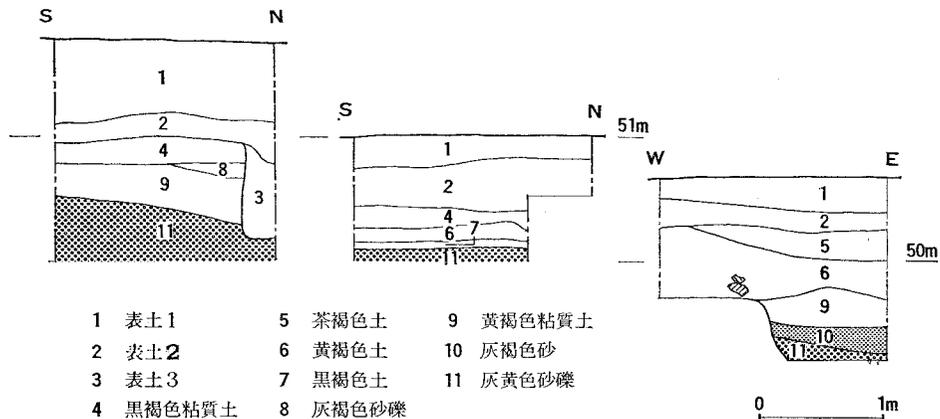
以上の試掘結果に基づいて、昭和54年7月24日から同年12月28日予定地の発掘調査を行った(第20図)。

平安後期から近世にわたる時期の井戸、土器溜、溝、集石、柵列等の遺構を検出し、調査区中央部は土取り跡を室町前期に大規模に整地したものであることが判った。また、TP2だけに現れた室町前期の土師器を出土した赤褐色土層は、この西北部に限って分布するものである。またTP4の列石はほぼ真北方向に連続するものであるが、その南端では現代の土管に連結していること、溝内全体に表土が埋積していることからこの遺構は少なくとも明治以降の建物に伴うものと考えられる。TP7第7層直下の礫溜は、約2m×1.5mの楕円形をした浅い土坑上部に集積したもので、その下部には茶褐色土が続き鎌倉後半から室町中期にわたる遺物を出土するものであった。遺物としては平安後期から室町中期にかけての土師器を中心として、後期旧石器時代のサイドスクレーパー(第6章参照)、縄文土器、石錘、弥生土器、古墳時代および奈良時代の須恵器、中世陶器、輸入磁器、瓦類、近世陶磁器等を得た。現在、整理作業にかかっており、調査の詳細は昭和55年度年報において報告する予定である。(清水)

3 医学部構内電気管理設予定地AL18区

電気管理設予定地に沿って3ヶ所に試掘坑(2m×2m)を設けて、試掘調査を行った(図版1-68a~c)。TP1では最近の工事に伴うと思われる南北方向の掘り込みが約1.5mまで達しており、バラスやレンガを含む。攪乱を受けていない部分では、約0.5mの表土下に茶褐色土、黄褐色土、黄色粘質土の各層が続く。茶褐色土層と黄褐色土層からは、土師器、陶磁器の細片が出土し、それらは室町時代から江戸時代にわたるものである。また、黄色粘質土層上面では長径約10~30cmの石7個が列をなして検出され、これはほぼ北へ向かって連続していくものと思われるが、時代および性格については不明である(図版13-4)。TP2では地表下約0.8mまで表土が堆積しており、近世およびそれ以降の陶磁器を出土する。第4層の黒褐色粘質土層からは土師器の細片が出土するが、以下に続く各層からは遺物が出土しない。TP3では礫混り黒褐色土と暗褐色土からなる厚さ約0.5mの表土の下に少量の土師器、陶磁器を含む黒褐色粘質土、黄褐色土の各層が続く。以下遺物を含まない灰黄色砂礫となる。これらのうち、TP2とTP3の黒褐色粘質土は連続するものであり、また基盤の砂礫層はTP2とTP3で緩やかに下がり、TP1に至って急激に下がっていることが判る。

以上3ヶ所の試掘坑の調査の結果、少量の土師器および陶磁器を出土するTP2とTP3で、黒褐色粘質土の広がり確認できたが、それより上層では後世の攪乱が激しく及んでおり、地点によって層序関係は異っている。TP1の第6層(黄褐色土層)は後世の攪乱を受けているが、石列について北方向への連続を追うことによって、その時期および性格を明らかにできる可能性があり、検出状況のまま保存した。(清水)

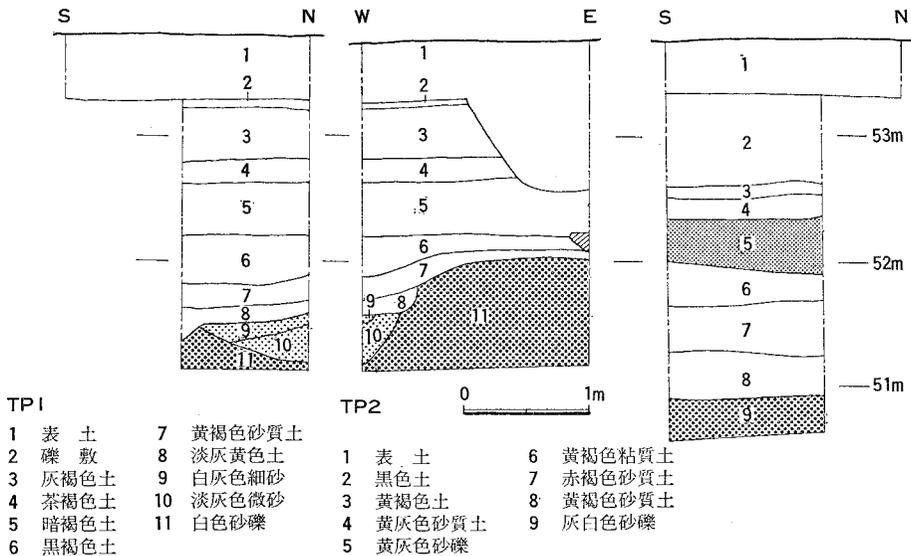


第23図 TP2(左), TP3(中), TP1(右)の層位

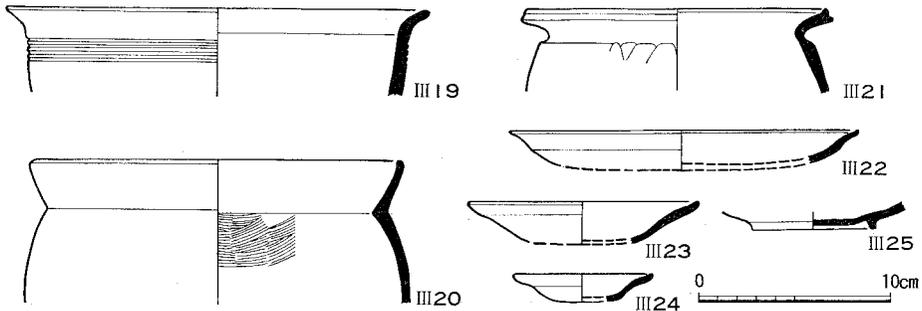
4 教養部電気管理設予定地AM24区

層位と遺構 予定地は教養部E号館の南で、2ヶ所の試掘坑を設けて堆積層序と遺構・遺物との関係を調査した(図版1-69a・b)。2ヶ所の試掘坑は10mほどの間隔であるにもかかわらず土層の堆積は非常に異っている(第24図)。TP1では表土(第1層)直下に直径5cm前後の河原石がびっしりと敷きつめられており(第2層)、その下に厚い耕土(第3層)が堆積する。礫敷は試掘坑全面に及んでおり、さらに広がるはずであるがその年代、性格とも判然としない。第3層は江戸後期以降の堆積である。第4層はやや粘質の茶褐色土で室町中期の土師器を出土する(第25図Ⅲ23・Ⅲ24)。第5・6層は暗褐色から黒褐色に漸移的に変化する層で平安前・中期の土師器、黒色土器をかなり包含する(Ⅲ20~Ⅲ22・Ⅲ25)。第7層以下はほとんど遺物を含まない砂質土または砂礫であるが、第7層中より畿内第I様式(新)の弥生土器の甕口縁部1点を採集している(Ⅲ19)。

TP2では第2層の近世以降の耕土中より室町中期の土器を採取したほかは、より古い時代の遺物を得ていない。第3層以下では遺物はまったく出土しないが、第6・7層の粘質に富む土層が上下の砂礫層にはさまれて堆積するという状況はTP1では見られない。現在までの京大構内遺跡の調査結果からみて、第4層以下は弥生中期までの堆積とみなしうるので、TP1第7層はTP2第4層に対応すると考えている。つまり平安前期までこの地は東から西に落ち込む段を有する地形であったと推測されるのである。このことはTP1



第24図 TP1(左・中), TP2(右)の層位



第25図 TP1出土の土器

第8層の堆積が東北へ高くなるという観察とも符合している。なお、TP2第6・7層は縄文～弥生前期の土器を出土する可能性のある土層である。

遺物 近世～近代の陶磁器類のほか、室町中期と平安前・中期の土器がまとめて出土した。第25図の7点はすべてTP1から出土したもので、III23・III24は第4層、III20～III22・III25が第5・6層、III19が第7層から出土した。III23・III24はやや厚手の白っぽい焼成の土師器で、口縁部外面に1段の撫でを施して体部を外反させるという共通の成形技法をみとめ、ある時期の大小の規格を示す資料で15世紀後半にあてている。III22は明るい黄褐色を呈する土師器皿で、口縁部は1段の撫でと端部にかえりをもたせる。III25は高台をもつ土師器杯。III20は黒色土器甕で橙黄色の外面には篋削りの痕跡をとどめ、内面には横位または斜位の刷毛目がみとめられる。III21は土師器甕で赤橙色を呈し、内面には全面に粗い横撫で、体部外面には縦位の篋削りが施される。III20～III22・III25は9世紀ないしは10世紀の資料である。III19の弥生土器は焼成良好でくすんだ灰赤色を呈する甕で、内面には撫で調整がなされる。口縁部は短く外反し、その下方に4条の篋描き沈線を施すもので、畿内第I様式(新)に通有の甕である。

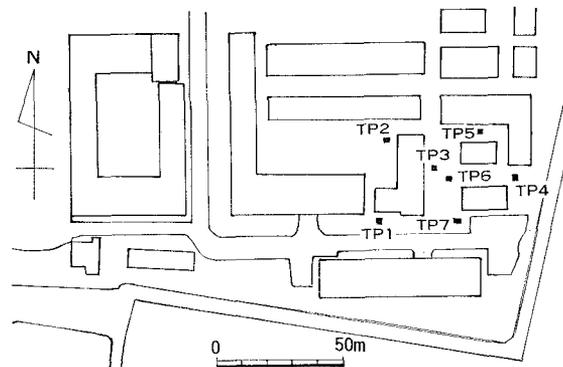
まとめ 今回の調査地点のすぐ西方では、昭和51年の管路工事に立ち合った折り、平安後期の瓦溜を確認し(図版1-15)、12～13世紀にかけての福勝院関係の遺跡が存在する可能性が指摘されていた。ところが今回のTP1における土層はこの地に平安前・中期と室町時代の遺跡が存在することを示唆するものであった。ことに平安前・中期の良好な包含層を確認できたことは貴重である。またそれ以前に東から西へ落ちる段が存在したことの発見も、今後構内の地形復原を考察していく上で重要な視点を与えるものである。ともかくこの付近が、福勝院比定地とされる可能性に加えて、構内遺跡を理解する上で新たな状況を提示してくれた点で、貴重な成果を得たといえよう。(岡田)

5 工学部機械系校舎新営予定地AT29区

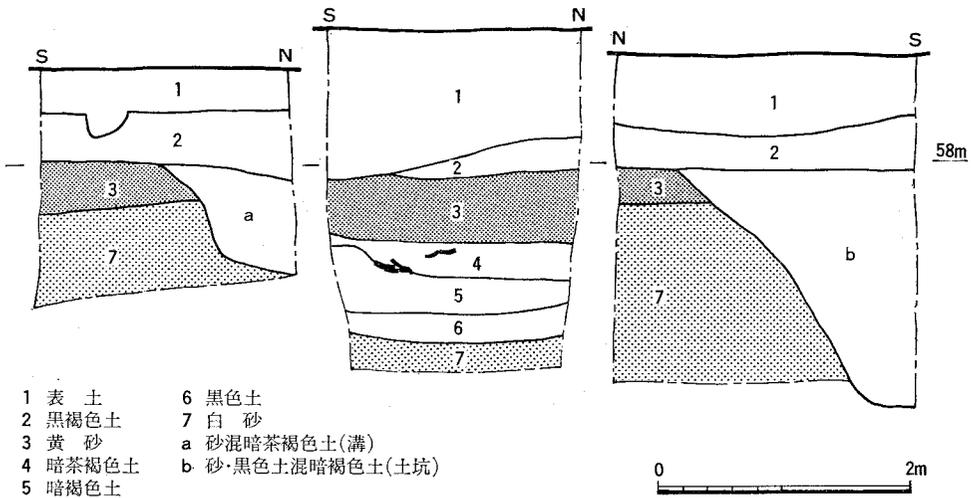
予定地は本部構内の東南隅にあたる。2 m × 2 mの試掘坑を合計7ヶ所設定した(TP1～7, 第26図)。このうちTP3は表土直下で旧建物の基礎にあたり発掘を中止した。

層位はTP4を除き、どの試掘坑でもほぼ同様である(第27図)。地表から地山の砂層までの間に7層を検出した。第1層は表土である。第2層は黒褐色土で、鎌倉～室町時代の遺物を含む。第3層は黄砂である。上面は標高58m前後で、どの試掘坑においても大差なく、第2層堆積以前に削平された可能性がある。第3層上面では遺構を検出した。TP2では幅約2.5m、深さ0.8mの南北に走る溝(第27図左)を検出した。埋土中に鎌倉～室町時代の遺物を少量含み、また、埋土上面には瓦を含む集石が認められた。TP6では深さ約2mの土坑(図版14-1, 第27図右)を検出した。埋土は第2層とほとんど区別できないが、砂や黒色土が混る点で異なる。鎌倉時代の土師器皿や富寿神宝(818年初鑄)が出土した。このほかTP1・4・7でも土坑や浅い溝を検出した。第4～6層はTP4のみに認められる。第4層は暗茶褐色土で、縄文晩期の土器と弥生土器とが出土した(図版14-3)。第5層は黒色土、第6層は暗褐色土、第7層は白砂で、第7層上面のレベルにはかなり変化がある。TP1では、第6層と第7層との間に厚さ約10cmの淡茶褐色土の堆積がある。第5層以下では遺物の出土をみない。

遺物は第1・2・4層と、第3層上面で検出した遺構とから出土した(第28図)。Ⅲ26はTP4第4層出土の縄文晩期深鉢で、口縁部に刻み目を施した凸帯をもつ。これに伴って弥生土器が出土したが、試掘坑壁面出土のため大部分を埋めもどしたので特徴は明らかでない。TP4ではこのほかに第3層を切る土坑からも弥生土器が出土した(Ⅲ27)。胴部上半に19条の篋描沈線を施す小型壺で、胎土にかなりの砂粒を含み淡褐色を呈する。京都大学北部構内BE29区でも黄砂を切る方形周溝墓から弥生中期の壺が出土しており〔京大埋文研79〕、半截竹管や櫛を施文具としているが、Ⅲ27は篋描の平行直線文を主としており、弥生前期でも新しい特徴を示すものであろう。Ⅲ28はTP1土坑出土の須恵質鉢である。高台の形からみて、平安時代であろう



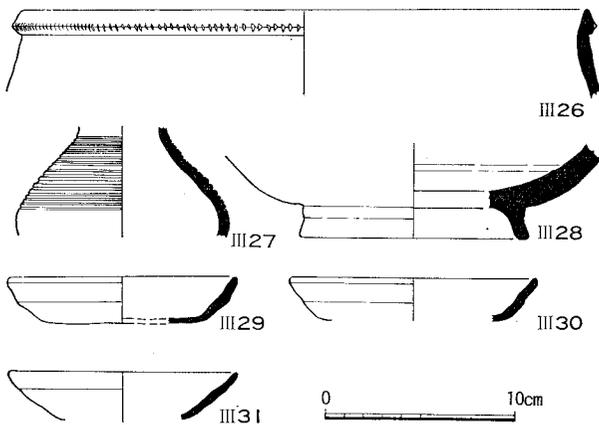
第26図 試掘坑の位置



第27図 TP2(左), TP4(中), TP6(右)の層位

が、その産地は不明である。Ⅲ29・Ⅲ30は鎌倉時代の土師器皿で、口縁部に1段の横撫でを施し端部を面取りする。Ⅲ29はTP6土坑から、Ⅲ30はTP6第2層から出土した。Ⅲ31は室町前期の土師器皿で、灰白色を呈する。TP2第2層から出土した。このほか、TP2第2層から楕円形の瓦当面をもつ複弁八葉蓮華文軒丸瓦が出土している。

まとめ 京都大学本部構内では、昭和51年にAZ28区の立合調査で、黄砂下の黒色土から縄文土器の細片が出土したほかは縄文土器と弥生土器の出土をみなかったが、今回の試掘調査で、黄砂下に縄文晩期の土器と弥生土器とが共伴する良好な遺物包含層を検出したのは重要な成果である。また平安時代以後については、北部構内から本部構内東北部に



第28図 出土遺物

かけて吉田寺が比定されており〔杉山54〕、教養部構内南部付近が吉田社旧地に比定されている〔福山77〕。当試掘地点に関しては具体的な文献からの裏づけはないが、溝や土坑等の遺構や、遺物包含層を検出しており、文献上からの空白を埋めるべく、今後の調査に期待したいところである。 (吉野)

第5章 和歌山県瀬戸遺跡の試掘調査

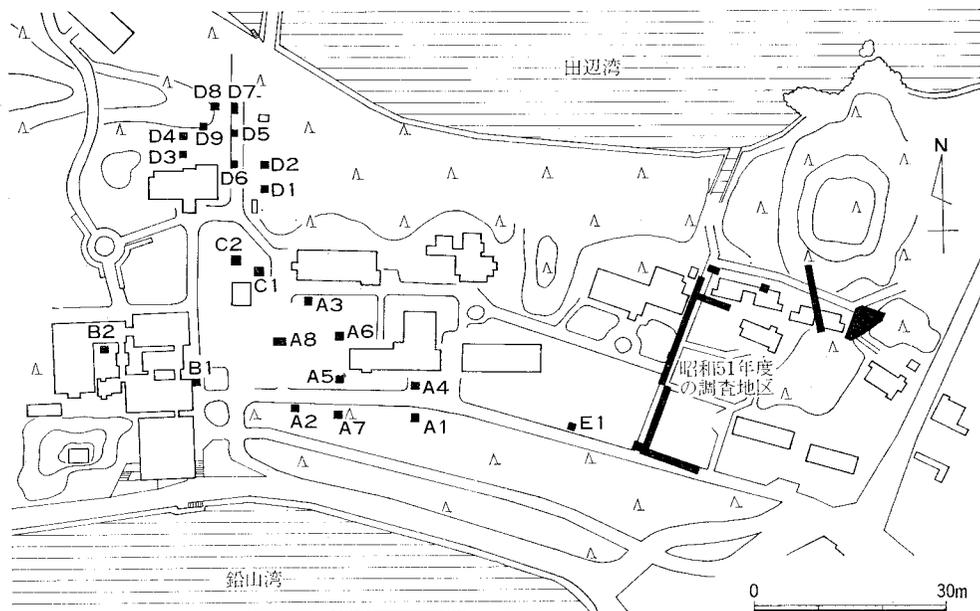
泉 拓良ほか

1 遺跡の概要と調査の経過

瀬戸遺跡は、和歌山県西牟婁郡白浜町にあり、現在は京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所の構内にある。白浜町の温泉街から北西に突き出た岬の先端に位置し、東と西には丘陵が迫り、南と北は海に接する砂州上に遺跡は立地している。遺跡の周辺には川がないが、東端の山際には、御殿井戸と呼ばれる井戸があり、現在の水面は地表下2mである(図版15-1)。昭和51年度に職員宿舎新営工事に伴って、この遺跡の発掘調査を行い、縄文晩期の埋葬人骨1体と古墳時代の箱式石棺と古墳とを発見した(第29図)〔京大調査会77, 京大埋文研78a〕。

瀬戸臨海実験所の将来計画が作成され、実験研究棟、水族館、学生寄宿舍の3棟が新営される予定となり、その予定地について本年度試掘調査を実施することになった。

調査地を各地域ごとにA～E区の5ヶ所に分けて、試掘坑には各区ごとの通し番号を付した(第29図)。調査にあたっては、遺跡と微地形との関係を明らかにするため、できる



第29図 試掘坑の位置

だけ深く掘り、海成層を確認するように努力し、砂堆の粒度分析を行うことにした。

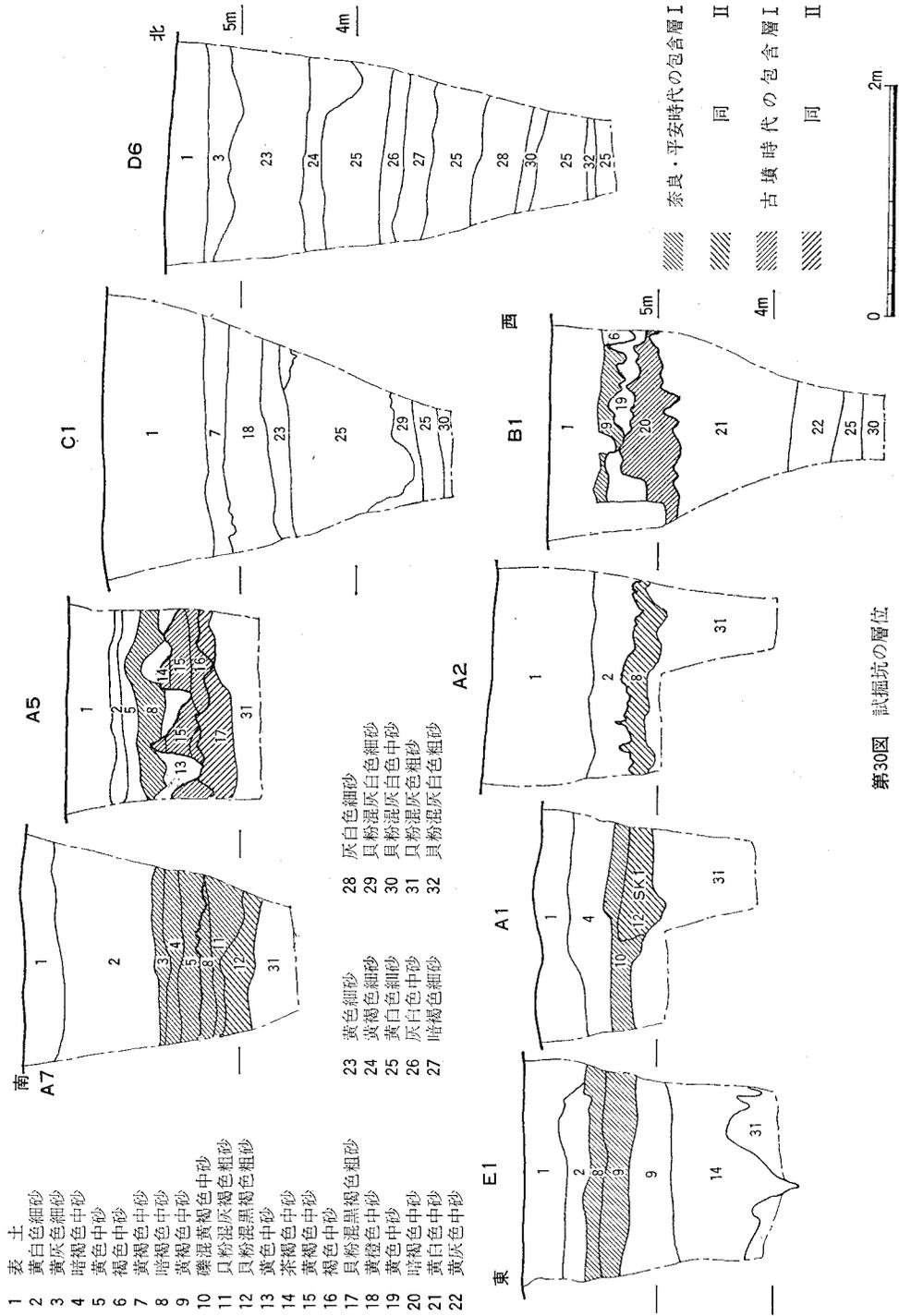
2 層位と遺構

今回の調査地は実験所の西半部で、地表面は標高5.5~7.0mである。試掘坑A2とA7付近がもっとも高く、周囲は緩やかに低くなるが、A2、A7、A1の南は急な傾斜である。またD7は、西の丘陵から延びる尾根状起伏の末端に位置し、やや高くなっている。層位は各地域や試掘坑ごとに細部において異っている。しかし、全体的にみると、南北方向の層位には大きな差を認めうるが、東西に並ぶ試掘坑は類似しているものが多い(第30図)。

まず、試掘坑A7、A5、C1、D6の層位で、調査地全域の南北方向の堆積をみる(第30図上)。A7では表土の下に粒子の細かい黄白色細砂が厚く堆積しており、その下の黄灰色細砂層と暗褐色中砂層には、パミスとスコリアが含まれている(図版15-2)。第4~12層は奈良・平安時代の遺物を包含する層で、第12層貝粉混黒褐色粗砂は、その下の貝粉混灰色粗砂が土壌化したものであろう。A5は、今回の調査で遺物が最も多く出土した試掘坑である。第14・15層上面と第17層上面には侵蝕を受けた痕跡がある(図版15-3)。第8層が奈良・平安時代の遺物を包含し、第14~17層は古墳時代の遺物を包含していた。第17層はA7の第12層と同様に、下位の第31層が土壌化したものであろう。A7とA5はよく似た層序であったが、C1とD6はそれらとはまったく異なる。C1の表土直下の黄褐色中砂層、黄橙色中砂層以外は、ほとんど粒子の細かい細砂層である(図版16-1)。この細砂層の間層として、貝粉の混った砂(第27~30層)が入る。

次に、試掘坑E1、A1、A2、B1の層位で、調査地南部での東西方向の堆積をみる(第30図下)。E1、A1、A2の層位は類似しており、標高5.0~5.5mに奈良・平安時代の包含層がほぼ水平にみられる。A1とA2ではこの包含層の下に、現在の海岸の砂によく似た貝粉の混った灰色粗砂が厚く堆積しているが、E1ではこれらの間に、貝粉の混らない層が介在する。一方、B1の層位は、上部がA5の層位と類似するが、下部はC1の細砂層を主体とする層位に類似しており、B1付近が南部と北部との堆積状況の変わりめと考えうる。

検出した遺構は、試掘坑A1の第10層中で検出した土坑SK1と、D7の黄色細砂上面で検出した縄文晩期の貝ブロックSX1である(図版16-2)。SK1の検出した部分は、南北0.5m、東西1.0mで、遺構は試掘坑の外へ延びている。深さは約0.3m、奈良後期ごろの完形の土師器杯(第32図IV5)と製塩土器(IV29)などの破片が出土した。SX1は3つの



第30図 試掘坑の層位

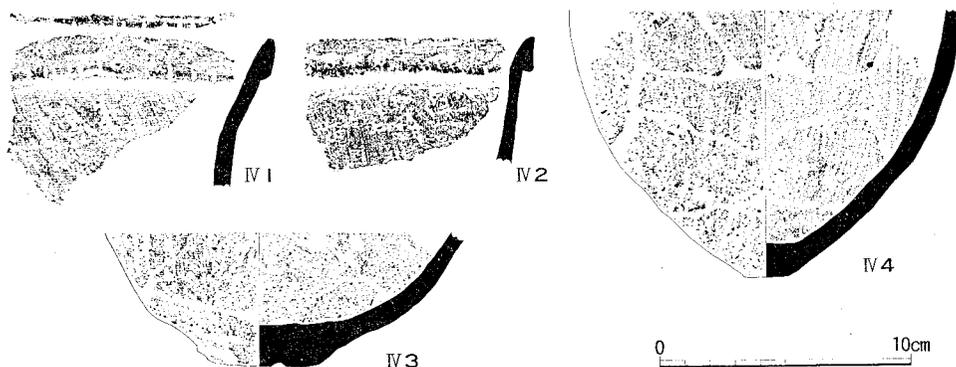
貝ブロックからなるが、それぞれに差は認められず、小型の巻貝が主体であった。

3 遺物

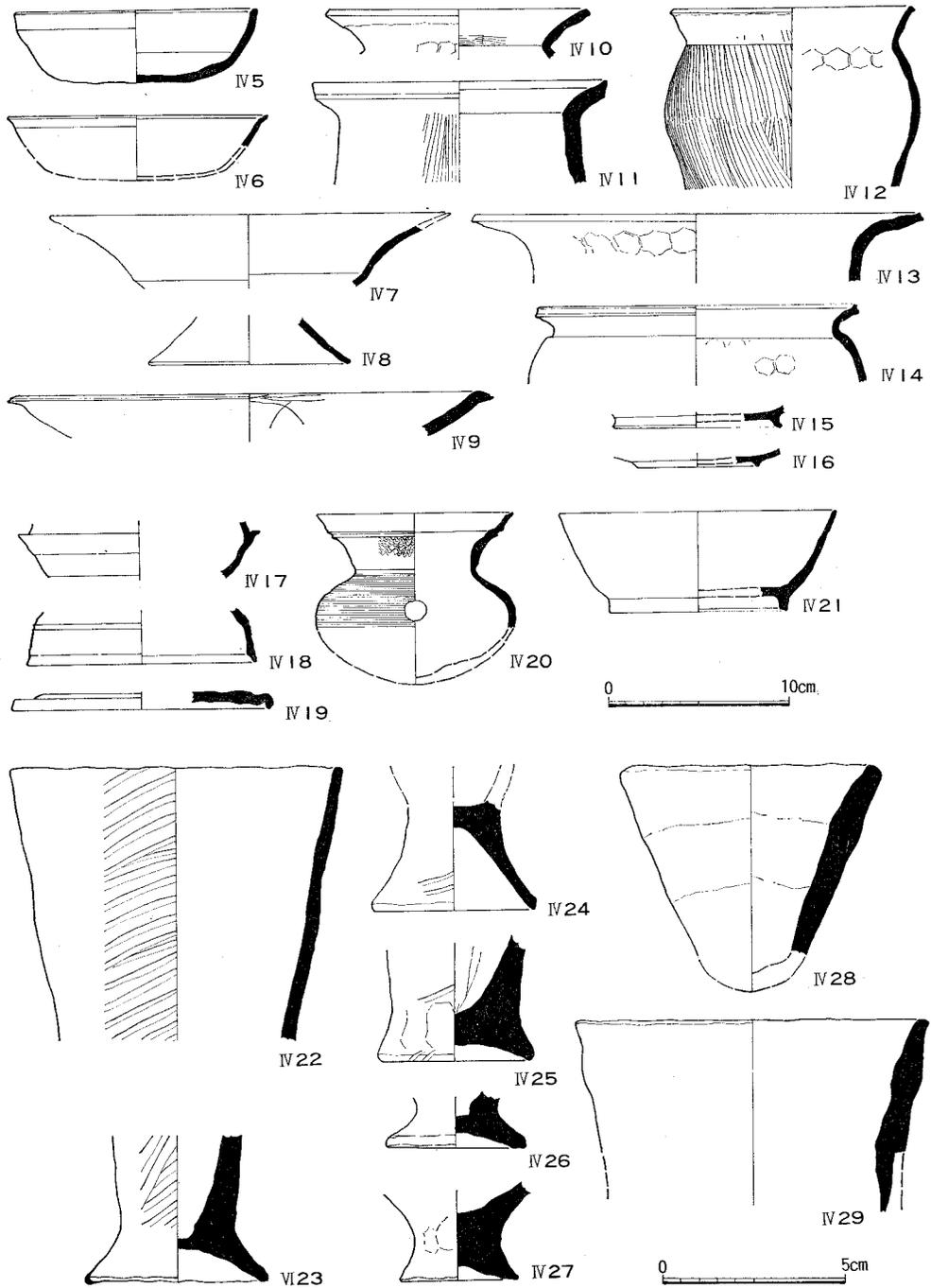
出土した遺物は整理箱に9箱で、平安時代の土器と、弥生後期～平安時代の製塩土器が主である。

縄文土器 出土した土器はすべて晩期の凸帯文土器である(第31図)。IV 1・IV 2は口縁内面を指で押え、外反気味に口縁端部を薄くした土器で、凸帯の断面形は△形で、刻みはV字形である。同様の土器は昭和51年度の調査でも出土している〔京大調査会77図版51〕。凸帯や口縁部の形態からみて、凸帯文土器としては後出のものであろう(第2章④参照)。IV 3・IV 4は、凸帯文土器の底部で、丸底を呈するもの(IV 4)と、丸底に粘土紐を貼り付けて平底状にしたもの(IV 3)とがある。IV 3・IV 4とも外面は粗い篋削りで、IV 3は内面条痕調整である。畿内では断面△形の凸帯をもつ土器が丸底になる例はごく少ないが、IV 4とIV 1は胎土や焼きや調整方法などに類似点が多く、これらの底部はIV 1・IV 2と同時期のものであろう。IV 2は試掘坑D 7のSX 1上面から出土した。

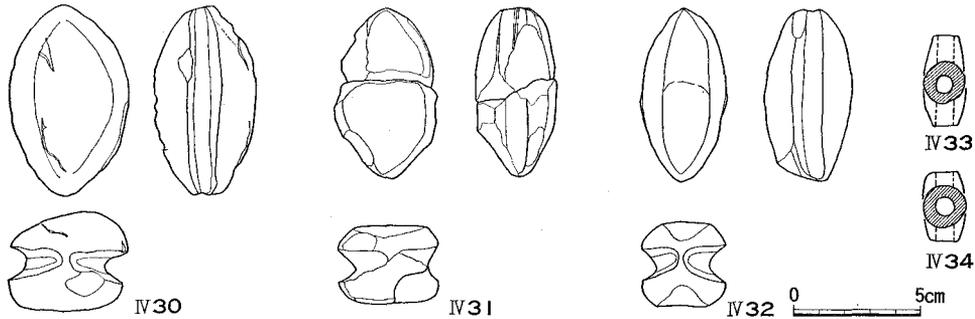
土師器・黒色土器 土師器では、杯、高杯、甕が出土した(第32図)。杯IV 5は、口縁端部内面に狭い面があり、内外両面ともに撫でによる仕上げで、底部には指押え痕が残る。平城宮出土資料における分類の杯Cにあたり、平城宮第IV期に比定できる〔奈文研76〕。試掘坑A 1のSK 1から製塩土器IV 29とともに出土した。IV 6は杯Aで、口縁端部で強く外反し、撫でによる仕上げをもつ土器。9世紀のものであろう。高杯IV 7は強く外反する長い口縁部をもつ土器。緻密な胎土と丁寧な篋磨き仕上げとが特徴である。IV 8は高杯の脚部で、胎土と調整方法がIV 7と類似する。4世紀後葉を中心とした年代に比定できる。IV 9は、口縁端部内面に水平方向の暗文、その下にらせん状の暗文のある破片で、9世紀ご



第31図 縄文土器



第32図 土師器, 黒色土器, 須恵器, 製塩土器



第33図 土 錘

ろと思われる。甕IV10・IV12は、「く」字形の口縁部と粗雑な面取りをした口縁端部とを特徴とする。一方、甕IV14は短い口縁部と鋭い口縁端部とをもつ。また、IV11・IV13のように円筒形の体部をもつ甕もある。やや硬質で粗い刷毛仕上げをもつIV11と、軟質で撫で仕上げをもつIV13とに分れる。IV11・IV13・IV14は、周辺の遺跡では田辺市北沖代遺跡(第34図)、また尼崎市金楽寺貝塚[尼崎市教委76]に類例がある。10世紀ごろと考えられる。

黒色土器は、すべて内面にのみ炭素の吸着があるA類で、椀の底部が主である(第32図)。そのほか、薄手で口縁内面に1本の沈線を持つ破片が少量出土している。小さい三角形の高台をもつIV16と、やや外方へひろく台形の高台をもつIV15との2種類がある。田辺市北沖代遺跡から出土した土器が比較資料となり、10~11世紀ごろの年代に比定できる。

須恵器 杯、杯蓋、腺が出土した。IV17は立ち上りをもつ杯、IV18は口縁端部内面に狭い面がある杯蓋で、両者とも6世紀中葉に比定できる。IV21は高台付の杯、IV19は受部近くに段のある杯蓋で、両者とも奈良後期に比定できる。IV20は小型甕の破片で、短く外反して上へ広がる口頸部に、櫛描波状文を密に施している。5世紀後葉である。

そのほか、A1から緑釉陶器の細片1点、D6から削り出し輪高台をもち、施釉のみられない緑釉陶器1点、C1から見込みに『寿』の銘のあるくらわんか茶椀が1点出土している。

製塩土器 出土した製塩土器は、脚台をもつI類、薄手で丸底のII類、厚手で丸底のIII類に大別できる(第32図)。

I類は、さらにIa・Ib・Ic類に細分できる。Ia類(IV24)は、脚高3.0cmで他のI類と比べて高い脚台をもち、外面に叩き目がある。目良式B類[近藤64]、脚台I式[広瀬78]に対応する。Ib類(IV22・IV23・IV25・IV26)は、脚高1.5cm前後で、外面に叩き目、内面に丁寧な撫で仕上げを施すのが普通である。また内底面に篋状工具による調整痕を残す例(IV25)も多い。なお、底径では、5.0cm前後の土器(IV23)と同4.0cm前後のもの(IV25・IV

26)との2種に、形態では、脚台部と体部の境がくびれる土器(IV23・IV26)と直線的なもの(IV25)の2種にそれぞれ分類できる。本類は目良式土器B類の典型をなす土器であり、脚台Ⅱ式に対応する。Ic類(IV27)は、底径がIb類より小さく、脚高は1.5cm前後で、叩き目の有無が不明である。森浩一・白石太一郎によるC類に対応する[森・白石68]。Ⅱ類は、器壁の厚さが0.2cm前後の丸底土器で、指押えによる丁寧な仕上げをもつ。目良式土器A類、丸底Ⅰ式のそれぞれに対応する。試掘坑E1で少量出土しただけである。

Ⅲ類(IV28・IV29)は、器壁の厚さ0.8cm前後で、指押えによる粗い仕上げをもつ。口径7.0cm前後の土器(IV28)と同10.0cm前後の土器(IV29)にわかれ、両者は器高も口径に比例した差異がある。本類は、森・白石によるE類・G類と丸底Ⅲ式のそれぞれに対応すると考えられる。

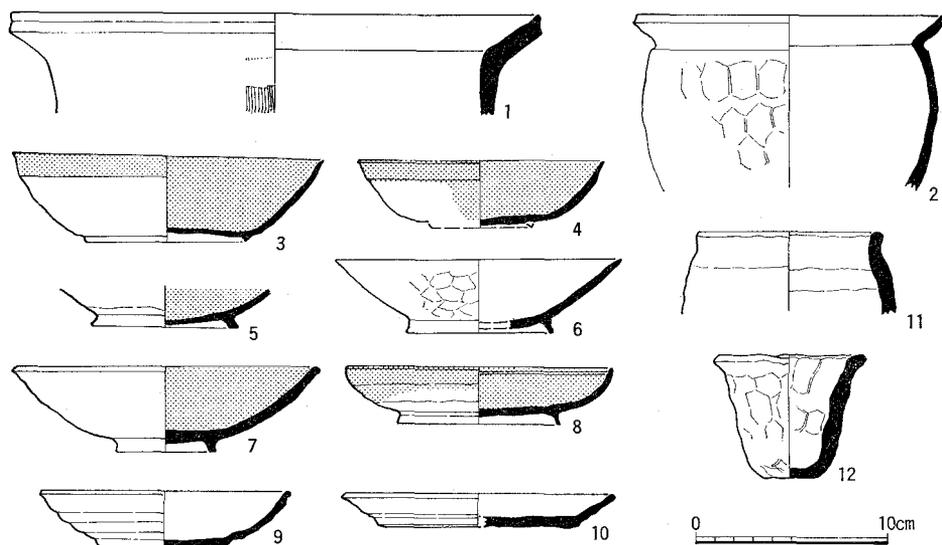
以上のⅠ・Ⅱ・Ⅲ類のうちⅠ類とⅢ類については層位的に分離できた。共伴した土師器・黒色土器からみて、Ⅰ類が4世紀後葉、Ⅲ類が9世紀にそれぞれ年代の一点をおくといえる。Ⅱ類については他の遺跡での検証から5世紀後葉を中心とした時期と考える。

土錘 紡錘形有溝土錘(IV30～IV32)と管状土錘(IV33・IV34)がある(第33図)。IV30～IV32の溝は型押しで作られており、また、IV33・IV34の孔も心棒を使って作っている。IV30は重さ131g、IV32は70g、IV33は8g、IV34は7gである。出土層位からみて、IV30～IV32は10世紀を中心とする年代に比定でき、IV33・IV34は近世まで下る可能性が強い。

4 小結

瀬戸遺跡の今回の調査で出土した歴史時代の遺物は、田辺市北沖代遺跡から出土した遺物(第34図)とほぼ同時期の資料である。第34図1・2は土師器の甕、3・4は小さい三角高台をもつ大小の黒色土器椀、5～8はやや外へひらく台形の高台をもつ椀と皿、6は土師器、そのほかは黒色土器である。7・8は3・4と比べて器壁が厚い。9・10は横撫でによって体部の凹凸が著しい土師器の皿で、口縁はやや外反し、器壁は約0.3cmと厚い。11・12は製塩土器で、11では口縁部が外反して、口縁端部を面取りする特徴がある。瀬戸遺跡には第34図9・10の土師器皿と、11の形態をとる製塩土器はない。畿内の編年から類推すると、器壁の薄い黒色土器は10世紀ごろに、器壁の厚い黒色土器と9・10の土師器皿は11世紀ごろにあたる。したがって瀬戸遺跡の今回の調査地域は11世紀ごろ放棄された可能性が強い。

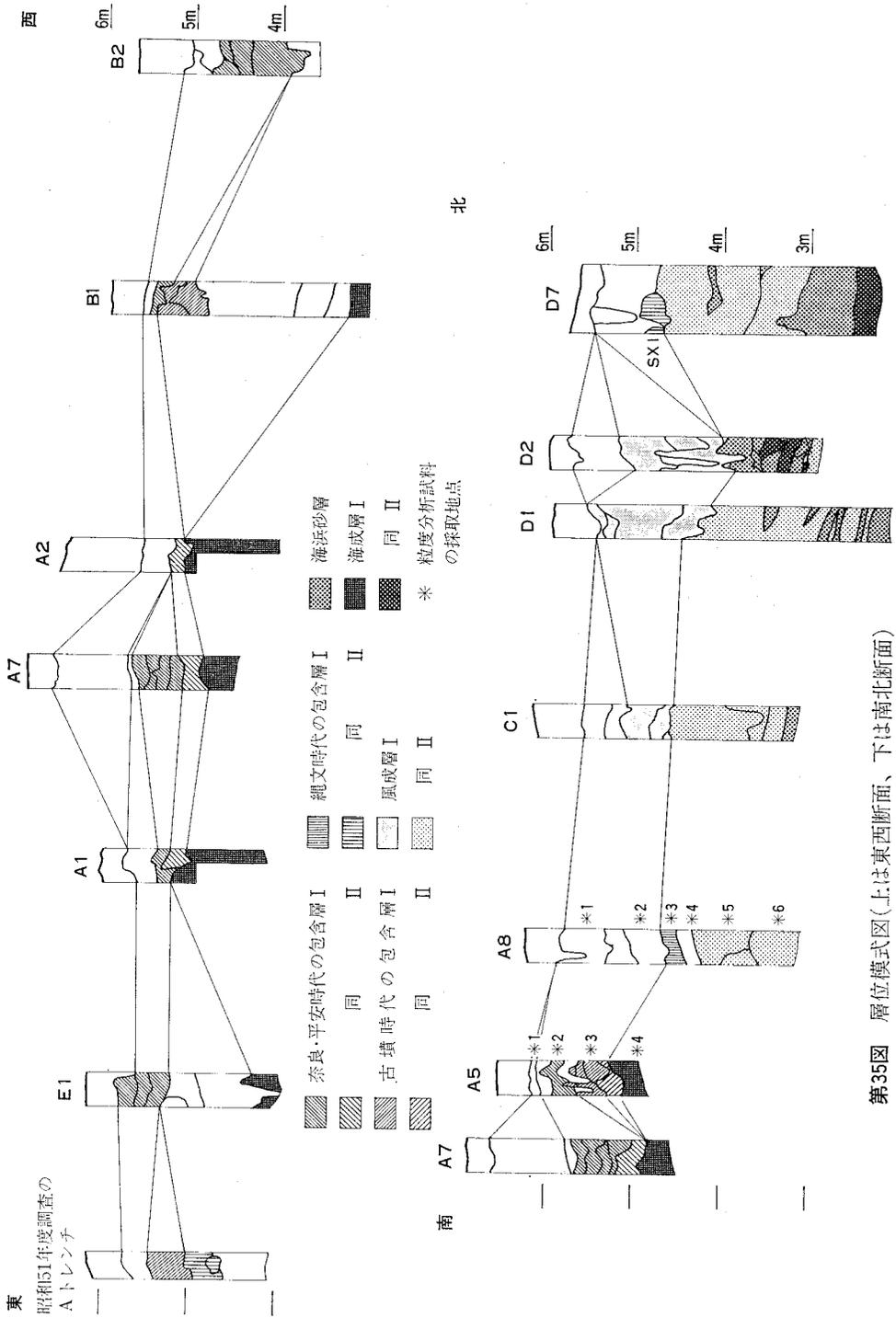
今回の調査のテーマのひとつであった砂堆形成についての調査として、試掘坑A5・A8で粒度分析を行った。第36図は、その分析結果であるが、縦軸は砂粒の大きさを表わし、上へ行くほど細くなり、横軸は砂粒のそろいかたを表わし、右へ行くほど不ぞろいにな



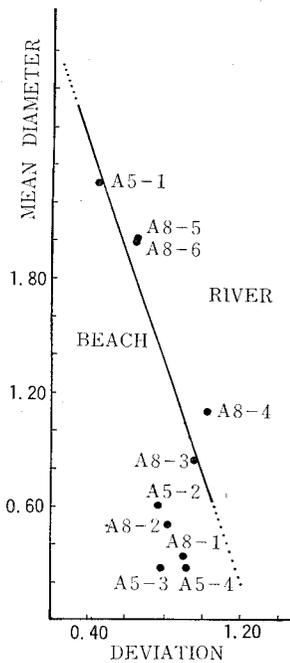
第34図 北沖代遺跡出土の土器

る。図中の斜めに引いた直線より右上のものは川砂であり、左下のものは海砂であることが判っている[Moiola & Weiser 68]。これに従うと、今回採取した砂のうち3点は川砂になるが、川砂としては粒子がそろっており、海浜があまり発達していないために生じた海砂であろう。この図から採取試料は、A5-1, A8-6, A8-5の第1群と、A8-4, A8-3の第2群, A8-2, A8-1, A5-2, A5-3, A5-4の第3群に分けられる。第1群は粒子が細かく、風成砂と考えられ、一方、第3群は貝粉が混入するものが多く、現在の海岸の砂とよく似ていることから、海成砂、もしくは、その再堆積層と考えてよい。第2群は第3群の再堆積層と考えられるだろう。南に位置するA5では、表土のすぐ下が、風成層であるが、A5-1からA5-5の順で下に行くにしたがって砂が粗くなるという特徴がある(第35・36図)。一方、それとは逆に、A5の北西にあるA8では、地表付近に粗い砂があり、A8-1からA8-6の順で下へ行くほど粒子が細くなる。各時代の遺物包含層と海成砂、風成砂の関係を見ると、海成砂が高い所に、古墳時代以後の遺跡が立地していることが判る(第35図)。また縄文時代の包含層は、海成砂が高い所になく、逆に風成層Ⅱの直上にみられ、遺跡の立地もしくは遺存状況が異っている。このように砂堆の性質と包含層の相互関係を明らかにすることによって、遺跡の全貌が判りかけたといえよう。

製塩土器について、瀬戸遺跡のⅠ類製塩土器では、Ⅰb類が圧倒的多数をしめ、Ⅰa類とⅠc類はごくまれである。これは、周辺遺跡、たとえば、白浜町江津良遺跡(巽・大原72),



第35図 層位模式図(上は東西断面、下は南北断面)



第36図 粒径中央値と淘汰度の相関図(地点と層位は第35図参照)

田辺市古目良遺跡〔近藤64〕でのあり方と一致する。また、Ⅲ類製塩土器については、周辺遺跡では、白浜町串ヶ峯遺跡、同藤島遺跡〔巽・大原72〕、田辺市北沖代遺跡〔安川78〕に類例があり、遺跡ごとに若干の差異が認められる。和泉・紀伊の製塩土器が、Ⅰ類・Ⅱ類・Ⅲ類の順に変遷したことはほぼ実証されており、さらに、Ⅰ類やⅢ類の型式細分についても、先学において編年の考察がみられる。

製塩土器Ⅰ類とⅢ類の細分は、A区においては層位的に確認できる可能性があり、製塩土器の編年研究を、本格的調査における我々の課題としたい。

なお、層位と縄文土器を家根祥多、土師器・黒色土器・製塩土器を藤原喜信、須恵器・土錘を花谷浩、粒度分析を竹村恵二の諸氏が担当し、その報告を受けて泉が本文を執筆した。

資料をみせていただいた和歌山県立風土記の丘資料館、

田辺市北沖代遺跡の出土資料の発表を許された巽三郎氏と南紀考古同好会に感謝の意を表するしだいである。

第6章 京都大学構内出土の旧石器

原 充

京都大学構内には、縄文時代から歴史時代にわたる各時代の遺跡が存在し、発掘調査が行われるたびに多くの遺構、遺物が検出されてきたが、旧石器時代に属するものは、ほとんどなかった。しかし本年度の医学部構内の調査において、旧石器時代のもと思われる石器が出土したので、以前に出土し簡単に紹介されていたもの〔中村74a〕とあわせ、ここに紹介したい。なお記述中の上下左右は、実測図中の上下左右に対応する。

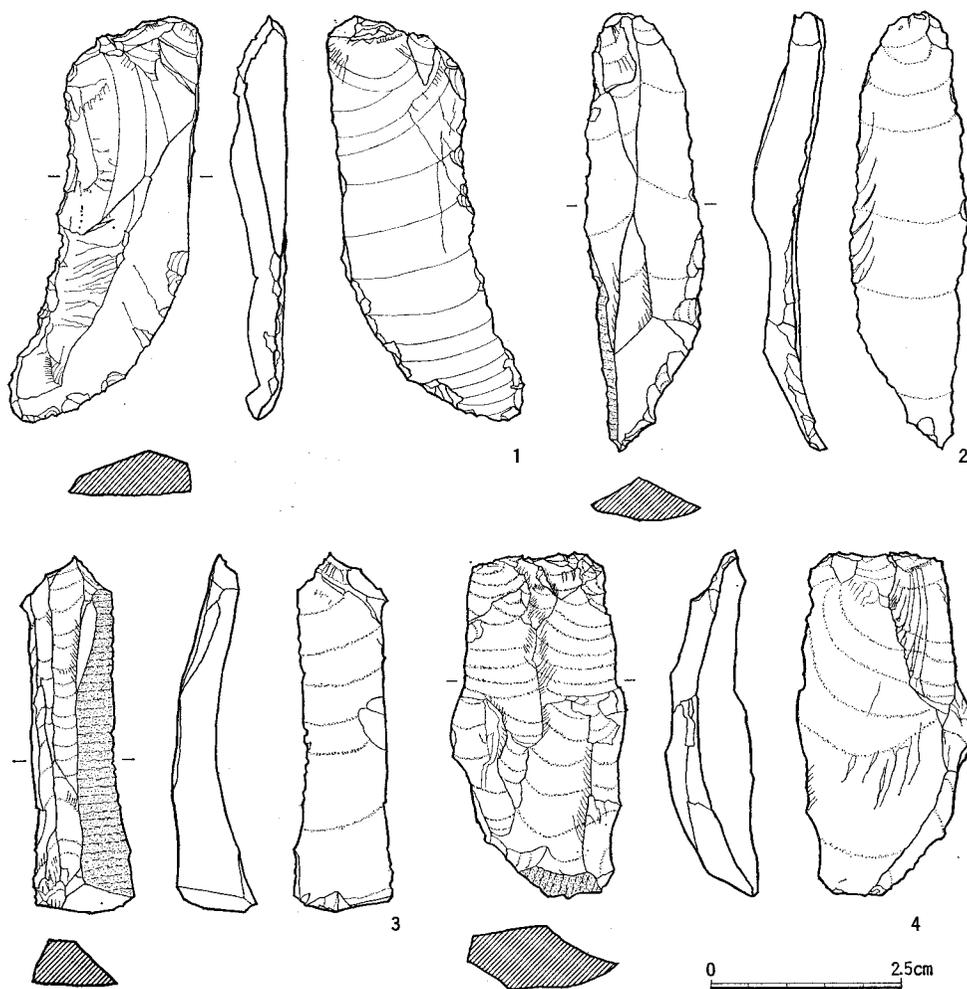
1は本年度出土したもので、出土地点はA P19区S D10淡褐色礫混土である。彎曲した縦長剥片を用いた削器と考えられ、石材は赤褐色のチャートを用いている。全長5.5cm、最大幅1.8cm、最大厚0.7cmを計る。背面は、3つの大きな剥離痕からなるが、左側の2つの打撃方向は主要剥離面の打撃方向とほぼ直交する。また上端には打面縁調整と思われる剥離痕が存在する。左側縁全体にわたって調整を施し刃部を作り出しているが、調整は縁辺部に限られている。腹面は全体が主要剥離面であり、リング・フィッシャーは認められるが、打瘤のふくらみはほとんどない。

2・3・4が既に紹介されているもので、石材はすべてサヌカイトである。

2は使用痕のある縦長剥片である。全長6.0cm、最大幅1.6cm、最大厚0.7cmを計り、全体にかなり風化が進んでいる。一見したところナイフ形石器のようであるが、両側縁の剥離痕は、ナイフ形石器特有のブランディングと認めるには微弱かつ不規則であって、使用痕と考えられる。背面の剥離は主要剥離面と同方向の打撃によってなされている。上端には、小さな打面がある。また、下端左側には自然面を残している。

3は縦長剥片で、全長4.9cm、最大幅1.4cm、最大厚1.0cmを計る。下端に打面を持ち、そこからの打撃による剥離痕が背面中央と左側にあることから、両設打面を持つ石核から剥離されたと考えられるが、背面から腹面に向けての打撃によって剥片が切断されており、上設打面は失われている。また、上設打面からの剥離は、下設打面からの剥離に先行する。背面左下の剥離は、階段状剥離であり、右側には大きな自然面が残っている。

4も縦長剥片であり、全長4.7cm、最大幅2.3cm、最大厚1.1cmを計る。この剥片は2・3に比べて稜が鋭く、各剥離面にはリングがよく残っている。背面下端に自然面が残る、そこを打面とした剥離痕が腹面右下にある。背面の剥離痕すべてが、上設打面への打



第37図 京都大学構内出土の旧石器

撃によるものである。腹面右上の剥離痕は主要剥離面を切っているので、本剥片は石核として使用されたと考えられる。

これらの縦長剥片はみな他の時代の遺物とまじって出土したものである上、数もごく少ないので、詳細な議論はできない。瀬戸内海沿岸における縦長剥片の編年的位置については、ナイフ形石器に先行するという鎌木義昌の説〔鎌木・高橋65〕があるが、確定的なものではなく、疑問が提出されている〔柳田77〕。そして、近年急速に調査研究が進んだ二上山北麓地域においては、縦長剥片と瀬戸内技法が共存することが確認されている〔佐藤79〕。

第7章 北白川上層式土器の細分

——京都大学教養部構内A O 24区出土の縄文土器を中心に——

泉 拓良

昭和47年11月、京都大学教養部図書館新営工事の時に、地表下約3mの地点から縄文土器が出土した(図版1-7)。この発見は、北部構内での縄文中期石棒の発見とともに、京都大学構内遺跡発掘調査の端緒となった。京都市文化財保護課の指導によって、工事を一時中断し、教養部人文地理学教授藤岡謙二郎が壁面の清掃と実測をおこなった。その成果の一部は発表されている[藤岡73・78]。工事のときに発見された資料は教養部に保管されていたが昭和53年に、藤岡教授の退官によって、当センターに移管された。その資料は、北白川上層式に属する土器であったが、同じ北白川扇状地に立地する北白川小倉町遺跡や京大植物園遺跡(図版1-11)出土の北白川上層式と若干異っていた。したがって、本章でその資料を紹介し、併せて北白川扇状地から出土した北白川上層式土器を3群にわけて考察を加えようとするものである。

1 教養部構内A O 24区出土の縄文土器

保管している土器は、総破片数106点、うち器種を同定できたものは27個体、ほかに器種不明の底部2個体がある(第38図)。層位は不明であるが一時期の資料で、北白川上層式にあたる。器形で深鉢、鉢、浅鉢に大別し、文様で細分をおこなった。

深鉢A類(V1) 頸部が強く外反する深鉢で、口縁部は内側に短く折れ曲がり、外面に文様を施す。波状口縁を呈し、波頂部に円形浮文があって、竹管状工具でその上端を刺突している。口縁部のそのほかの部分には、口縁と平行に2本の沈線を描き、縄文を施す。口縁部と頸部の内・外面とも調整は磨きである。V10は3本歯の櫛による条線を施した胴部の破片で、内面の調整は丁寧な撫である。V11は弧状の沈線によって区画した中に縄文を施す破片で、内面の調整は丁寧な撫である。両点とも本類の胴部の可能性がある。

深鉢B類(V7) 胴上部がくびれ、頸部が強く外反する深鉢で、口縁部は外側へ段状に肥厚するが、文様は内面に施す。波状口縁をなし、波頂部は2ないし3である。口縁部内面に口縁と平行に沈線を施し、縄文を充填している。波頂部下で沈線が弧状になり、波頂部を強調している。頸部と胴部とを1本の沈線で区分し、胴部には縄文を施す。調整は頸部内・外面とも磨きで、胴部内面が撫である。胴部外面に煤が付着している。

深鉢C類(V3) あまりくびれない胴部に、弱く外反する頸部がつく深鉢。口縁は水

平口縁で、端部は撫でによって外反気味に尖っている。口縁部文様帯がないという特徴がある。口頸部と胴部とを1本の沈線で区分し、頸部には4本以上の沈線束で鋸歯文を描き、胴部には左下りの垂下沈線を全面に施す。調整は内・外面とも粗い撫でである。

深鉢D類(V4) 胴のくびれない朝顔形の深鉢。水平口縁で、内面に1本の沈線を口縁と平行に描き、口縁との間に縄文を充填している。外面には、口縁と平行に7本の沈線を描き、縄文をその上に施文する。内・外面とも調整は磨きで、外面の磨きは縄文の一部を消している。

深鉢E類(V12) 破片のため器形の詳細は不明な大型の深鉢。頸部と胴部とを1本の沈線で区分し、胴部には同一原体による羽状縄文を施す。内面の調整は粗い撫で、深鉢A類、同B類、鉢A類とは区別できたので本類として独立させた。

深鉢F類(V13) 篋状工具による数条からなる条線束を器面全体に施す深鉢。口径はかなり大きく、器壁は0.3cmと薄い。外面に煤が付着している。

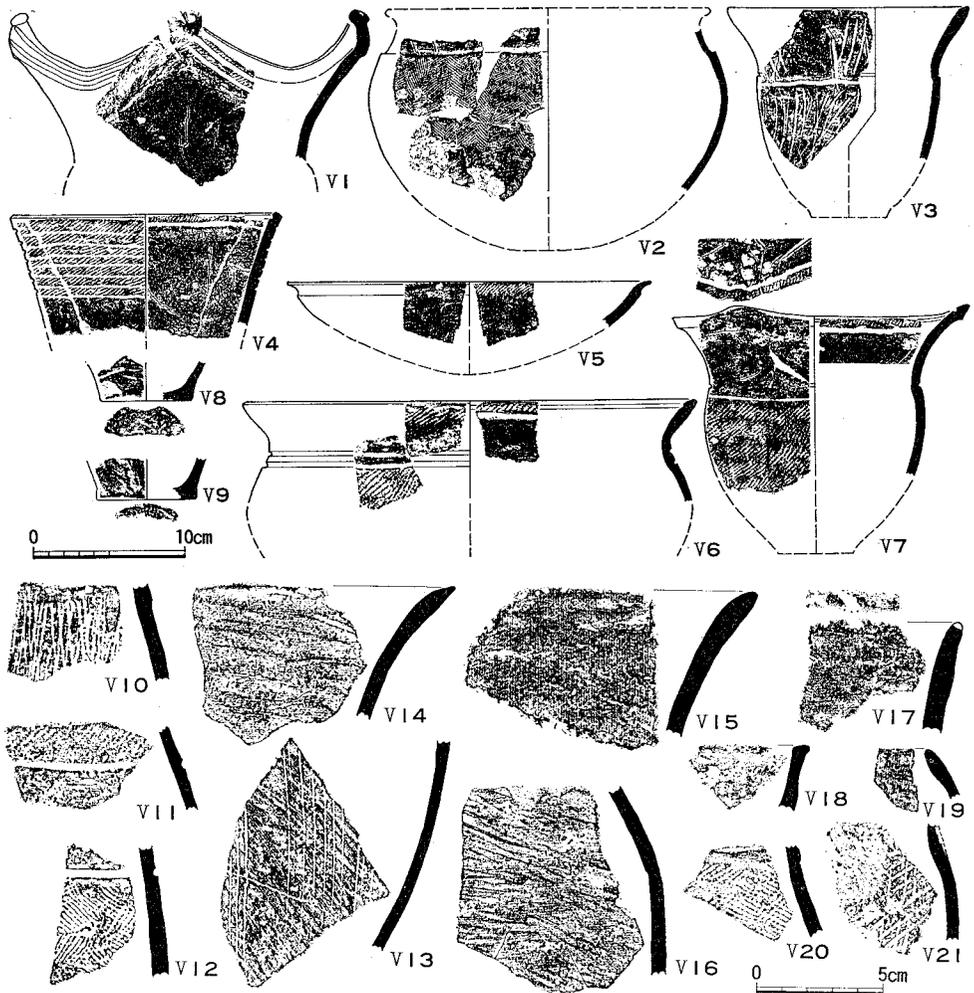
深鉢G類(V14~V17) 粗製の無文深鉢を一括した。口頸部が外反する深鉢(V14~V16)と垂直に近いもの(V17)とがある。外反する深鉢の口縁端部は、口縁内面の撫でによって外反気味で尖ったものになっている。一方、垂直に近いものは、口縁端部を丸く収め刻みを施している。V18・V19は粗製無文の土器であるが、口径が小さく、鉢になると思われる破片である。この類の調整には、巻目条痕(V16)、原体不明の条痕(V14)、撫で(V15・V17・V19)がある。V18は調整が粗い磨きで、粗製の範疇に入れるか問題が残る。

鉢A類(V2・V6) 丸底で半球形に近い胴部に、外反する口頸部のつく鉢。胴部に同一原体による羽状縄文を施す土器(V2)と、斜行縄文を施すもの(V6)とがあり、調整は両点とも内・外面磨きである。胴部と頸部との境を、V2は段、V6は2本の沈線で区分している。V6の口縁部内面には、口縁と平行な沈線があり、口縁との間に縄文が充填されている。V20はこの類の胴部である。

鉢B類(V21) 鉢A類と同様と思われる器形で、胴部に斜格子文を描く鉢。内面は鉢A類と同様に丁寧に磨かれている。

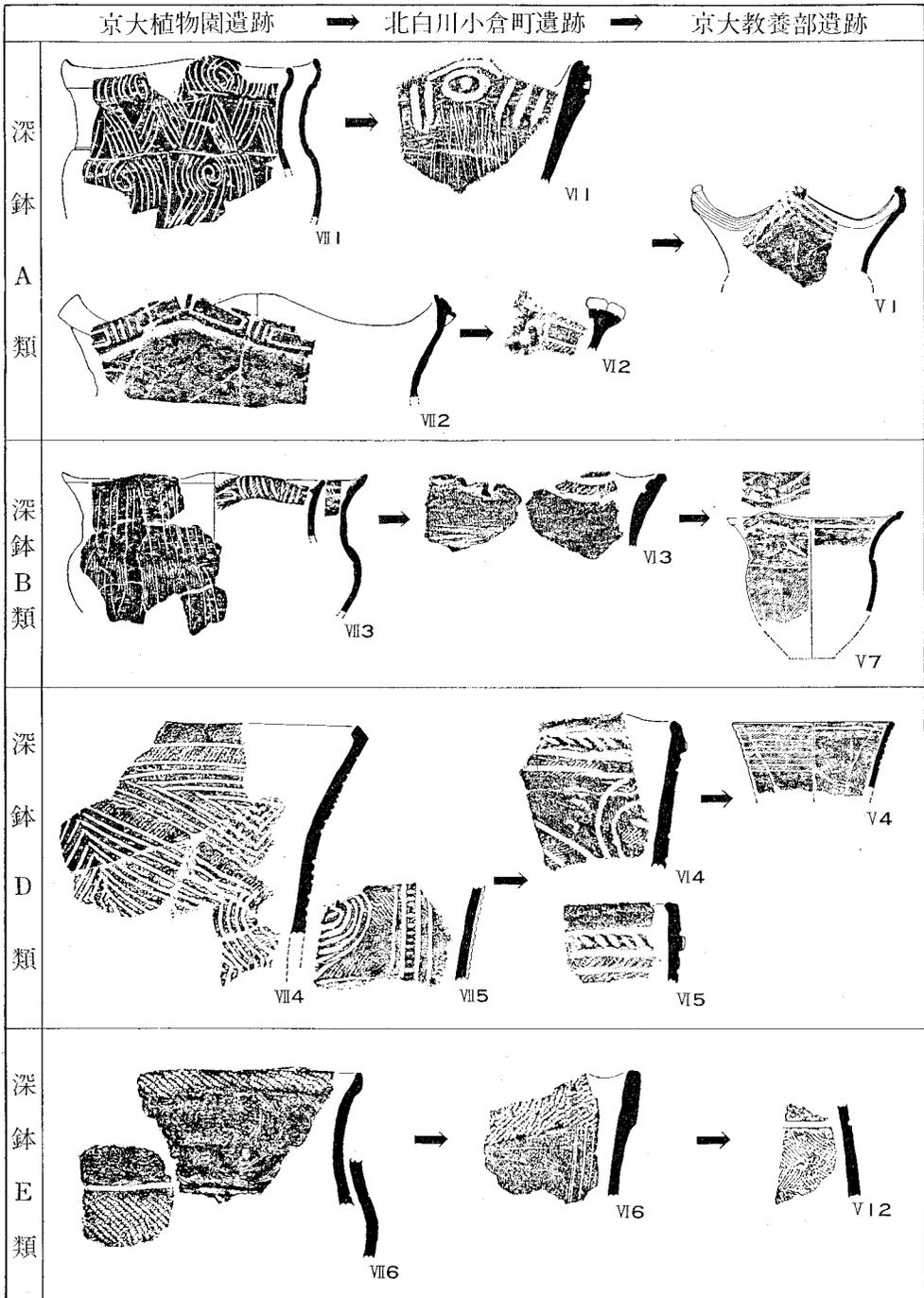
浅鉢(V5) V5は指押えで凹線状になった口縁部をもつ浅鉢。口縁内面に縄文を施し、内・外面とも調整は磨きである。

底部(V8・V9) V8は直径6cmで、中央がわずかに凹む。外側の約1cmの部分だけが磨滅している。調整は内・外面とも粗い撫でである。V9は直径6.6cmで、調整は内外とも粗い撫で。2点とも深鉢G類の底部である可能性が高い。

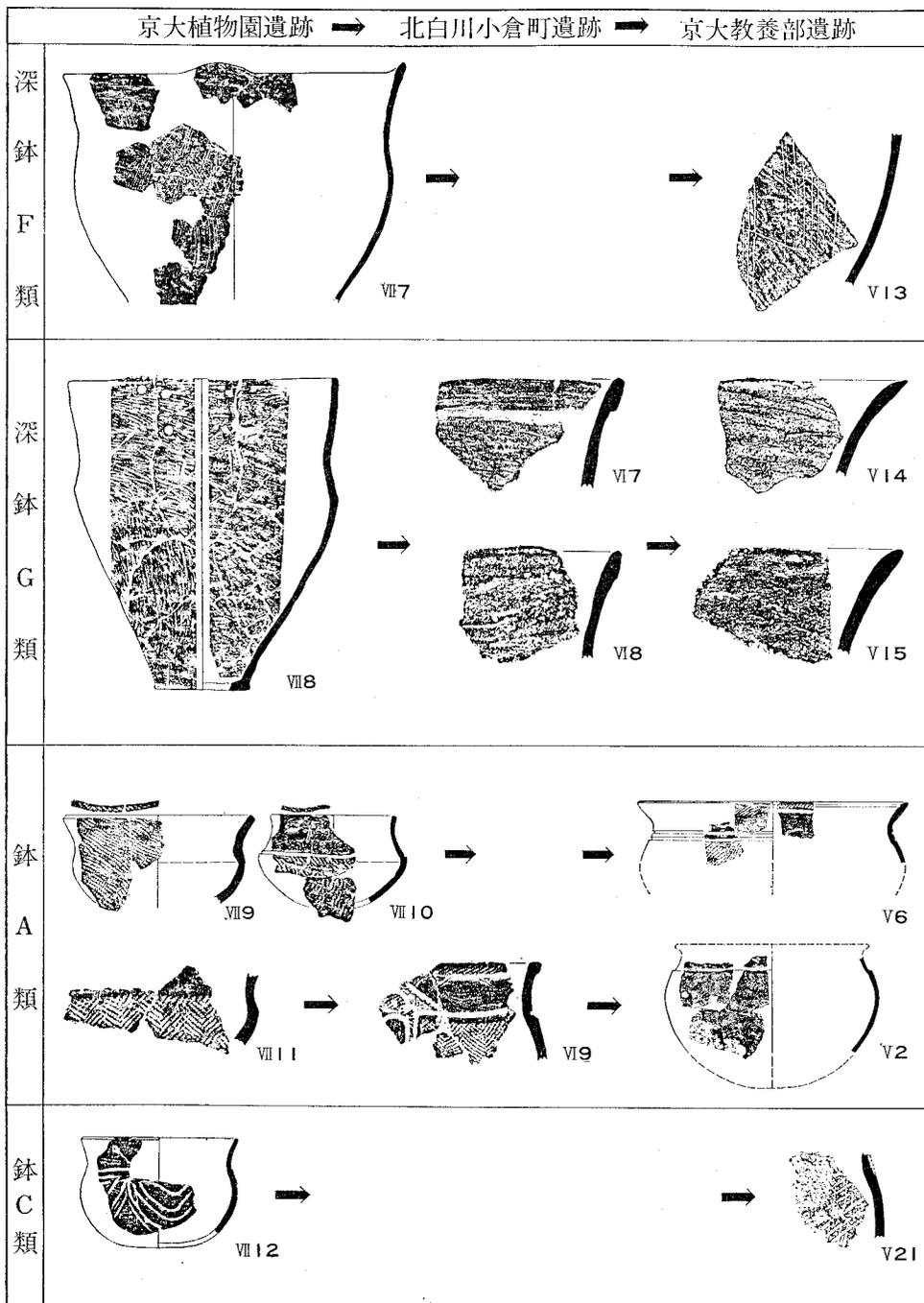


第38図 京都大学教養部構内AO24区出土の縄文土器

次に土器の細部と技法を検討する。縄文のある破片は10片で、そのすべてが2段右捻りの $L \begin{Bmatrix} R \\ R \end{Bmatrix}$ である。捻紐が施文された時の幅には、0.8 cm 前後のもの、1.5 cm 前後のものがある。これは、指1本で転がした時と2本で転がした場合と考える。同一原体を縦方向と横方向に転がして羽状縄文を作る時は、指1本で転がしている。この羽状縄文には二通りの施文方法があり、V2ではまず間隔をあけて縦に長く施文し、その間を横方向に数段転がして羽状縄文を作っているが、V20ではほぼ同じ長さずつ縦と横交互に施文して羽状縄文を作っている。磨き調整のある破片は13片で、そのほとんどが幅約0.3 cmの原体を用いている。器壁の厚さはほとんど0.5~0.6 cmであるが、深鉢F類のV13だけ0.3 cm



第39図 北白川上層式土器



の変遷 (VII 1~VII 12は〔中村74b〕より引用, 縮尺: 復原実測図1/8, ほか1/4)

と極めて薄い。

ここで分類が可能であった土器は27個体で、深鉢A類3点、深鉢B類1点、深鉢C類2点、深鉢D類1点、深鉢E類1点、深鉢F類1点、深鉢G類10点、鉢A類羽状縄文土器3点、鉢A類斜行縄文土器2点、鉢B類1点、浅鉢2点であった。以上の分類をもとに、北白川扇状地のほかの遺跡との比較を次節でおこなう。

2 北白川扇状地の北白川上層式土器

北白川扇状地で、縄文後期北白川上層式土器が出土した遺跡は、本遺跡を含め5遺跡である。本遺跡を除いた4遺跡は、異った内容を持つ2群に分けることができる。北白川小倉町遺跡〔梅原35〕と北白川別当町遺跡〔横山・佐原60〕が1群をなし、京大植物園遺跡〔中村74b〕と北白川上終町遺跡〔梅原35〕が別の1群である。ここで、北白川小倉町遺跡と京大植物園遺跡から出土した北白川上層式を両者の代表として、前節の分類に従って分類と考察を試みる(第39図)。

深鉢A類 京大植物園遺跡には、頸部の外側に粘土紐を貼り付け、波状の幅の広い口縁部を作り、波頂部に渦巻文を配してその間を弧状文で埋め、頸部と胴部に数条の斜線文を主として描くVII1と、断面T字型の口縁部に、磨消縄文を施した長方形区画文を連ねたVII2とがある。両者とも頸部は比較的直立している。またVII1の口縁部と胴部の文様は堀之内I式に類似している。一方、北白川小倉町遺跡からは、頸部との境が明瞭でないやや肥厚した口縁部に、同心円文と斜線文を施したVI1と、断面T字形の口縁部に、磨消縄文のある長方形区画文を描き、波頂部に刺突のある8字状の浮文をもつVI2とが出土している。頸部は京大植物園遺跡のものよりやや外反する。

深鉢B類 両遺跡とも出土例はA類と比べて少ない。京大植物園遺跡のVII3は、内面が肥厚して頸部との間に段をなす口縁部で、そこに2本の平行沈線を施し、縄文を転がしている。北白川小倉町遺跡のVI3は口縁部が肥厚せず、2本の平行沈線を施して、沈線の間で縄文を転がしている。

深鉢D類 京大植物園遺跡には、短く内折する口縁部をもち、胴部に多重三角形文や渦巻文などを施すVII4や、刻みのある隆線が垂下するVII5がある。北白川小倉町遺跡のVI4は、やや内折した口縁部をもち、2本の沈線で囲まれた磨消縄文帯で、三角形文や渦巻文を描き、口縁部に刻みのある隆線が巡る土器である。VI4と同様の文様構成で沈線が3本以上と思われるVI5も出土している。

深鉢E類 京大植物園遺跡出土のVII6や北白川小倉町遺跡のVI6も口縁部が外側へ肥

厚する土器である。

深鉢F類 京大植物園遺跡のVII7も教養部構内AO24区のV13と同様に薄手である。

深鉢G類 京大植物園遺跡のVII8は、ほぼ直立した口頸部にやや膨らんだ胴のつく深鉢で、口縁端部を丸く収めている。調整は内外とも巻貝条痕である。この類は変化に富んでいるが、口縁部の形はVII8に類似したものが主体をなす。ただし調整は、巻貝条痕、二枚貝条痕、捺痕、撫で、刷毛目など多様である。北白川小倉町遺跡のVI7とVI8は、やや外反した頸部に肥厚した口縁部がつき、調整はVI7が条痕、VI8が撫でである。

鉢A類 京大植物園遺跡出土のVII9・VII10、北白川小倉町遺跡のVI9とも口縁部はほとんど直立し、内面に文様をもつものはない。胴部に羽状縄文を施す土器は、京大植物園遺跡ではVII11の1片のみとごくわずかであるが、北白川小倉町遺跡ではこの類に属する2点が2点とも羽状縄文である。またVI9は口縁部が肥厚する特徴がある。

鉢B類 京大植物園遺跡出土のVII12は、鉢A類と同様の器形で、胴部に曲線的な沈線文が施されている。

以上のように、京大植物園遺跡と北白川小倉町遺跡、教養部構内AO24区の出土土器は、基本的には同一の器種の組合せからなっている。しかし、個々の土器には変化を認めることができ、次節で3遺跡の年代比較をおこなうこととする。

3 北白川上層式土器の細分

第1節と第2節の分類をもとに、京大植物園遺跡出土の土器を第1群土器、北白川小倉町遺跡出土の土器を第2群土器、教養部構内AO24区(以下京大教養部遺跡とする)出土の土器を第3群土器と呼ぶことにする。第1群、第2群、第3群土器の器種の組合せはみなほぼ同じであるが、それぞれの器種ごとに、文様や器形に若干の違いが認められる。それらの遺跡は同じ扇状地上にあり、この違いを年代差として差し支えあるまい。以下、第1群、第2群、第3群の土器を比較する(第39図)。

深鉢A類で、口縁部が肥厚するものは第3群にはなく、口縁部に円形ないし8字状浮文をもつものは第2群と第3群土器にある。口頸部の立ち上りかたをみると、第1群が垂直に近いのに対して、第3群は強く外反し、第2群はその中間である。深鉢B類は、内面が肥厚し口頸部があまり外反しない第1群土器と、強く外反し文様が磨消縄文帯である第3群土器とに分れる。深鉢D類は東日本系の土器で、第1群が堀之内I式、第2群が堀之内II式、第3群土器が堀之内II式～加曾利B I式にあたり、年代差が明確である。鉢A類も深鉢A・B類と同様に、口頸部の立ち上りが、第1群は垂直に近く、第3群は強く外反す

る。第3群のこの類には、口縁内面に縄文帯がくるものもある(第38図V6)。また、第2群の鉢A類は口縁部が外へ肥厚する特徴があり、深鉢G類と同じく他の群の土器と区別できる。深鉢G類は、口縁部の形態で区別できる。第1群の土器は素縁で端部を丸く収めているが、第2群の土器は口縁部が肥厚するものが多く、第3群の土器は内面の撫でによって、外反気味に薄く仕上げているものが多い。

縄文の撚りにも変化が認められる。第1群土器は実見した縄文をもつ土器38点のうち、RL16点、LR22点であった。ただし、38点中には堀之内I式系の土器が10点あり、そのすべてがLRであったので、実見した土器が片寄ったと考え、RLとLRはほぼ同量ではないかと思う。第2群土器は38点のうち、RL8点、LR30点であり、第3群土器は10点すべてがLRである。したがって撚りの方向でも、第1群から第2群を経て、第3群へと徐々にLRの撚りが増加したといえる。⁽¹⁾

以上のように、北白川上層式は3群に分けることが可能であり、第1群→第2群→第3群の順序に変化したと考えられる。変化の方向は、口縁部文様帯の縮少と、文様の簡略化であり、縦方向の文様から横方向の文様への転換である。また、口頸部の外反に伴い口縁外面の文様が見えにくくなるためか、断面T字形もしくは内折L字形口縁が増加し、口縁内面に文様を施す土器も多くなると理解できる。

以上3群の土器は、第1群が縄手I式にあたり〔藤井・原田71〕、第3群が桑飼下式の主体となる土器群にあたる〔渡辺ほか75〕。第2群土器は純粋に出土した資料は少ないが、東大阪市縄手遺跡や舞鶴市桑飼下遺跡に散見できる。したがって、北白川上層式の三分は、近畿地方全域に広げることが可能と思われるが、桑飼下遺跡第4群深鉢D類、および大阪府岬町淡輪遺跡出土の櫛描文注口土器⁽²⁾は北白川扇状地では未発見であり、今後の検討を要する課題である。北白川小倉町遺跡と京大教養部遺跡出土土器は、標準資料としては量が少なく、前述の問題とあわせて、厳密な型式の設定は今後の調査・研究にゆだねるべきであろう。なお、本稿の製図は清水芳裕氏によるもので、感謝の意を表するしだいである。

〔注〕

- (1) 一方、京都市一乗寺向畑遺跡北地点の土器(一乗寺K式)は20点のうち、RL15点、LR5点、同南地点の土器(元住吉山I式)は8点のうち、RL2点、LR6点である。
- (2) 大阪府泉北考古資料館の所蔵品である。最近出版された概要にはこの型式のものはみあたらない〔大野79〕。

第8章 平安時代鴨東白河の景観復原

岡田保良

1 はじめに

平安京の周辺域では、北白川廃寺や法観寺の例をあげるまでもなく、遷都の以前からすでに、主に渡来系の氏族が定着し、邸館を構え、社寺を建て、墳墓を営んでいた。新都造営の後には都人の多くが、京域内にのみとどまらず、別業や社寺建立の地、時には葬送の地を洛外に求めて京の内外を行き交った。とくに、鴨川をこえて白川流域から東山山麓にかけては、そうした動きが顕著で、江戸時代の古跡図『中古京師内外地図』(『故実叢書』所収)には、京内に劣らぬ密度で鴨東の古跡が描かれるほどであった。同図には注記として「嘗延暦年遷都今地以降、京外白川之地、離宮仙宮皇后御所国母御殿三公公卿殿上人百司諸家等之殿第館亭家宅山庄別業及寺社廟堂院舎等、大以宮構此白川以北都城、故古記並称京白川」として「白川以北」の繁栄を述べている。

しかし、「京白川」という並称は、六勝寺をはじめ、院政期における鴨東の市街地化以降のことで、それまでは葬地と共存する地域であり、『栄華物語』の言を借りれば「天狗ありなどいひし所」というのがむしろ鴨東の土地柄に対する当時の一般的な見方であったかもしれない。とはいえ、六勝寺に先行する数多くの社寺や別業が営まれていたことにちがいはない〔宇野79〕。

鴨東六勝寺を中心とする街区形成については、西田直二郎・福山敏男・杉山信三各氏らの詳密な諸研究〔西田25、福山68、杉山62〕や具体的な発掘調査の成果と、拙稿において復原を試みた街路形態〔岡田79〕を合せて、岡崎から神楽岡西麓にかけての地域景観を、近似的に推定することはほぼ可能である。一方、神楽岡周辺から東山山麓にかけても、奈良時代にまで遡りうる遺跡を含めて、平安時代を通じて営まれた多数の古跡が存在する。ところが、明瞭な基壇の発掘された北白川廃寺ですら、史料の内に現われる寺院の中の何れに比定しうるのか未だに議論の中にあり〔角田70a・田中76〕、ほかに杉山氏による吉田寺、東光寺、円覚寺に関する個別的な論及〔杉山54・55a・55b〕をみる以外、往時の景観を復原するにあたって、江戸時代の地誌類の域をほとんど脱していないのが現状である。平安京域内における考古学的調査が推進される一方で、周辺地域では遺跡に即した調査・研究が全く立ち遅れているといわざるをえない。

本稿は、未だ漠とした平安時代の鴨東地域の中でも、白川あるいは北白川と呼ばれる地

域をまず限定し、その地域の景観を構成する主な歴史的要素について、現時点における可能な限りの知見を整理することによって、平安京をとりまく地域景観の復原に迫ろうとするものである。

2 白川と北白川

「白川」とは、元来川そのものに付された呼称であるが、平安時代にはしばしばその流れに沿う地域を表わすときに用いられる。その範囲はきわめてひろく、前出の『中古京師内外地図』の注記には、北は神楽岡の北から南は九条辺までを総称して白川というとし、南北大小の称があると記す。

史上、最も早く白川の名が現われるのは、貞観14(872)年に亡くなった藤原良房にまつわる記事においてであり、それは、彼が白川沿いの土地に別業を営み、白河殿と通称されたことによる。彼は白川の地に縁が深いらしく、まず斉衡3(846)年に彼の室潔姫が亡くなって「神楽岡白川地」をえらんで葬地となし、自身の葬地も「愛宕郡白川辺」であった。⁽¹⁾ 各々を称して愛宕墓・後愛宕墓という。彼の娘明子は文徳天皇の妃となり、薨じて白川で北を限る地に葬られた。延喜式にみえる白河陵がそれである。⁽²⁾

ところで、白川の呼称を現在あるとおりに、神楽岡と東山との間を南行する流路のみに限ってよいであろうか。すでに大白川・小白川を別の流路とする説もある〔横尾ほか77〕。これに関しては、前出の白河陵の四至を定めた延喜諸陵式の記載を見のがせない。つまり、陵の北は白川で限り、西を源氏墓の北で限るといふ。源氏墓とは先の愛宕墓のことで、神楽岡にあった。⁽³⁾ 北を限るといふ以上、この白川はほぼ東西方向に流れるはずで、神楽岡の東方を南流する白川だけでは白河陵の兆域の四至を説明できないことに気づく。大小の呼び分けは別としても、少なくとも、神楽岡の北方を西流ないしは西南流するもうひとつの白川を想定しなければならない。事実、北白川から荒神口にかけて、白川道に沿う水流が最近まで存在していたし、かつては、白川の谷口からそのまま西流して一乗寺川の旧流路に合する流れもあったという地理学上の指摘もある〔藤岡78〕。

北白川の名については、後高倉院の葬地に関する杉山氏の考察に詳しいが〔杉山57〕、それによれば、北白川の初見は元永1(1118)年の『中右記』の記事にあり、すでに法勝寺一帯が白河と呼ばれていた頃で、それ以降ならば、北白川といえはほぼ今の北白川を指すとみてさしつかえない。ただし、『日本紀略』康保2(965)年4月27日の条に、故右大臣顯忠を「南白川東山辺」に葬るとあり、その頃に北白川という呼称がなかったとはいえない。神楽岡東の白川の末は分流してさらに南流する「小川」があったというが、本流は三条大

路末の北に沿って鴨川に合したらしい。南白川をどの辺におくか判然としませんが、結局は、院政期以前において、白川と称する地域は、北を神楽岡北辺、南を三条末あたり、東は東山山麓一帯と理解してよいであろう。ただし、神楽岡の山上付近から西麓にかけての現在「吉田」と呼ぶ一帯も、元久1(1204)年10月15日に供養された「中山新堂」に、『百鍊抄』では「白川」を冠して呼んでいるし、吉田社近傍にあったはずの中御門家の第宅を舞台とする『太平記』中の「八歳宮御歌事」の段に「御坐アル白河ハ」という件があって、時には白川ということもあったようであるが、11世紀代以前の確実な記録は実見していない。

また、旧郷名でいえば、愛宕郡上栗田・下栗田両郷を合せた範囲がほぼ白川の地にあたるようである〔林屋・村井・森谷編79〕。このことを考慮にいれつつ、史上、白川の地に現われる主な社寺、別業などの景観要素を、院政期以前について整理してみる。

3 白川の地の展開——院政期以前——

史上に現われる主な古跡を年代順に追うと、坂上田村麿の栗田別業が最も早い例としてあり、以後⁽⁴⁾9世紀代には良房の白河院、基経の栗田山庄、氏宗の山庄が営まれ、このうち後二者は、それぞれ円覚寺(880)年、円成寺(889)年と、平安京郊外でいち早く成立する寺院の例となる。これよりさき、貞観5(863)年に、藤原関雄の私邸「東山家」が道場となり定額に預かって禅林寺の名を賜わっている。この事情を『三代実録』についてみると、「夫僧買_レ俗家_レ者。律令之所_レ制。私立_レ道場_レ者。格式之所_レ禁也」と私寺の建立は当時禁制であったが、「夫普天之下莫_レ不_レ王地_レ。所作之功德。皆悉資_レ国王大臣_レ。此則聖教之所_レ明。非_レ凡愚之私造_レ。」(9月6日の条)と、禁を犯すことを正当化したうえで定額寺となっている。円覚・円成両寺ともに定額に預かっているが、これらも同様な背景が考えられ、私寺建立の流行の先鞭をつけたものとして注目される。元慶2(878)年には陽成天皇の母高子が東光寺を建立し、これは少したって延喜5(905)年に定額に預っている。

定額寺といっても私寺的な性格のつよい上記のような寺院のほか、奈良朝以来この地を本貫とする栗田氏が栗田寺を構えていた。応天門の変があって良房がはじめて摂政になった貞観8(866)年、栗田確雄が玄蕃頭に任じられているが、従五位下まで昇った栗田氏は彼を最後とする〔角田70a〕。この栗田寺は、延喜式内蔵寮に掲げる15ヶ寺のうちに東名寺の別称として記載がある〔杉山53〕。

葬送の関係では、さきの潔姫・良房・明子の後、元慶4(880)年に清和天皇が円覚寺に崩じて、上栗田山に葬られている。

10世紀にはいと、吉田神社が朝廷の祭るところとなり(986年)、二季祭が始まる。

吉田寺に重閣講堂を構えて、天台座主良源が舍利会を催すのが貞元2(977)年、円覚寺がその前年に地震で顛倒しており、吉田寺の結構も、同様な罹災後の再建であったかもしれない。これを必ずしも神楽岡吉田寺の創建とみる必要はないように思える。

永祚1(989)年、摂政兼家が吉田社の近くに卒都婆を供養し、講演を行わせている。⁽⁵⁾これが貞元の舍利会が行われた吉田寺に付随するものと考えられている〔杉山54〕。

円仁の開基と伝える浄土寺が史上にあらわれるのもこの頃である。⁽⁶⁾『真如堂縁起』は、正暦3(992)年に東三条院詮子の離宮地に真如堂の前身を建立したと伝える。長保2(1000)年には、「白川寺」が『権記』にみえるが、いずれの寺のことか明らかでない。

東光寺の藤原高子を母とする陽成天皇は、天暦3(949)年に崩じ、冷泉院から円覚寺に遺骸を移された後、「神楽岡東地」に葬られている。⁽⁷⁾東光寺はこの前年に焼亡している。⁽⁸⁾

寛弘8(1011)年、冷泉天皇は「桜本寺前野」で火葬に付されたが、これがかなり格式ばった葬礼であったらしく、長元9(1036)年の後一条天皇の葬礼は寛弘の先例にならったという。⁽⁹⁾場所も「浄土寺西原、神楽岡東面」とし、遺骨は浄土寺に安置されたのち、母上東門院彰子が葬地に伽藍を建立した菩提樹院を墓所として移され、この院を桜本と号した。⁽¹⁰⁾⁽¹¹⁾

10世紀から11世紀にかけては、藤原氏が隆盛をきわめた時代で、承平3(933)年に亡くなった中納言兼輔の「あはたの家」(後撰集)、大納言在衡が安和2(969)年に尚齒会を催したことで知られる「粟田山庄」⁽¹²⁾、長徳1(995)年に亡くなった関白道兼の別称の由来となった「粟田殿」(栄華物語)につづき、頼通は、宇治平等院とならんで、白河院、白河第、白河殿などと呼ばれる別業を営む。これらが同一なのか複数を意味するのか明らかでないが、承保2(1075)年に法勝寺の造立が始められた地は頼通累代の別業であった。⁽¹³⁾

法勝寺創建以後、「白川」のさす地域は院家の御堂や御所が薨を連ねる一帯に限るのがふつうになる。

4 神楽岡周辺の景観

神楽岡を中心に、以上に挙げた社寺、別業、陵墓がどのように当時の景観を構成したのか、議論のあるところを整理しつつ想起してみたい。便宜的に、神楽岡を中心に、北、東と南、西麓から神楽岡・黒谷の小山(栗原岡)にかけて中山とよばれた一帯との3つの地域に分けて考える。

神楽岡北　　ほぼ今の北白川と呼ばれる一帯をみる。白川の分流がいく筋か西へ或いは西南へ流れ、東へ次第に標高を高くする景勝地であったと想像できる。『拾芥抄』に「神

楽岡北」として安和尚齒会が行われた在衛の山庄を「東明寺」として載せ、かつ「栗田」と貼註する。東明寺は東名寺すなわち栗田寺のことらしい。かつての栗田氏の氏寺が、退転の過程でその立地にひかれた貴族の手にわたり、風流人の集うことになったのであろう。遺跡が明らかになっている北白川廃寺をこれにあてる説が有力である〔角田70a〕。

栗田寺に近くあったとされる円覚寺は、9世紀後葉に山庄が寺院化したもので、しかもそこは栗田氏との縁が深く、奈良時代から開けていた土地であったはずである。北白川一帯の遺跡の中で、京都大学北部構内東半にみられる状況は、この円覚寺の推移ときわめて符合する。その地は、奈良時代の確実な遺跡の上層から、平安前・中期の瓦がまとまって出土するうえ(第1章参照)、寺院の廃棄を想起させる平安末から鎌倉時代にかけての瓦溜が報告されている〔京大埋文研78b〕。後者については史上、保元の乱のうちに「為義ノ山庄北白川円覚寺」が火をかけられ、後に為義や義朝の墓所となる(保元物語・平家物語)というから問題はない。すると、『本朝無題詩』の「東山有寺曰円覚寺 寺東有天満宮祠云」という記事から推して、『愛宕郡村志』の「舊と白川の西字久保田宮にありし」という天神社に関する記述が事実⁽¹⁴⁾となる。

神楽岡東と南 谷口から南流し、三条末の北で西行して鴨川に注ぐ、ほぼ現在の白川の流域にあたる。その東岸に沿って北から浄土寺、如意寺(如意輪寺)、円成寺、禅林寺と連なり、西岸神楽岡の東面には、西流するもうひとつの白川に面する白河陵を最北として、その南西に源氏愛宕墓、さらに後愛宕墓、陽成陵、後一条陵と菩提樹院があり、冷泉陵も近くにあったであろう。清和天皇が火葬に付された上栗田山は他の例からみて、やはり白川の西岸であろうが、火葬塚として比定されている黒谷山内の位置には疑問がある。天皇と栗田院との縁を考えれば、上栗田山を神楽岡のことと考えることも否定しきれない。

白川が西へわん曲する西岸に面して、頼通の白河別業があり、のち法勝寺となったが、さらにその北方、岡の麓には東光寺があった。杉山氏は西は尊勝寺、南は法勝寺、北は栗原岡、東は白川にまで及ぶ広大な寺域を想定している〔杉山55a〕。現在の岡崎神社は、もと東光寺の境内社であったという〔角田70b〕。

神楽岡西と中山 吉田と呼ばれる一帯である。院政期以前では、吉田社と吉田寺が知られる。吉田社が、応仁の兵火の後、現在地に位置を移していることと、中山の地名が現在全く消滅していることが、両者の比定地を見きわめることを困難にしている。

『京都坊目誌』にのせる永徳4(1384)年の将軍義満の寄進状に、吉田社領の四至が定められていて、東は神楽岡山の西、南は近衛末、西は河原、北は土御門末を限るとする。こ

れを事実とすれば、当時の近衛末は今の近衛通りより南にずれるようで〔岡田79〕、そこからほぼ250mほど北までの間となり、福山敏男氏はこれに江戸時代の地誌類にのせる比定地を考慮して、現在の京都大学教養部構内南半を旧社地にあてている〔福山77〕。

吉田寺について、杉山氏は中山吉田寺と神楽岡吉田寺との2寺が存在したとする。中山には、12世紀以降多くの仏堂や別業が構えられるが、それ以前のものとしては、吉備大臣が建立したとの古い伝承をもち、吉田寺とも号した「中山ノ観音堂」⁽¹⁵⁾以外にはみあたらない。『薩戒記』を著わした中山定親は、彼の祖中山忠親の旧跡の廟所を「此地者在。真如堂西去。観音堂長。二町餘畝」と記していて、「近衛坂南善正寺西」という『山城名勝志』の推定地に大きな誤りはないようである。この位置では、決して「神楽岡西吉田社北」⁽¹⁶⁾にはなりえない。したがって神楽岡吉田寺は別寺とすることに異論はない。

杉山氏はさらに『権記』にいう「吉田社北三丁内有葬送之處」を神楽岡吉田寺にあてる。しかし、この記事は不浄の範囲をさしたままで、必ずしも寺地をあてる必要はない。しかも、現在のところ、そのあたりに平安中期の寺院跡を示す考古学的な確証も何ら見あたらない。ところが、もう少し北へはずれると、先に比定を考えていた円覚寺の旧地に行きあたる。当時北白川という呼称がなく、この地を「吉田」と呼んだとすれば、円覚寺と神楽岡吉田寺とを全く重複させて考えることも可能である。

かの寺は元慶4(880)年に創建されて以後、「南北二堂荘。嚴仏像。定。十口僧」⁽¹⁷⁾という官寺であったが、貞元1(976)年6月の大地震で倒壊している。舍利会のために重閣の講堂を建て、神楽岡吉田寺と『日本紀略』に記されるのはその翌年4月のことである。永祚1(989)年の卒都婆供養のとき講演があったというのは、貞元建立の講堂においてではなかったろうか。法勝寺建立以降、皇室や高級貴族の関心事は、専ら南の方へ移ってしまい、この神楽岡吉田寺即ち円覚寺は、源氏の武将に占拠され、やがて保元の乱を迎えることになるのである。

5 むすび

神楽岡をとりまく白川と呼ばれた地は、以上のように、平安時代のごくはじめより、平安京の人々と深いつながりをもって開発された。当初平安京は、平城京とちがって京内に東西両寺以外に寺院の建立を許さず、京外にあっても、私寺の建立を強く制限した。しかし、実質的には私寺であっても、それが官寺あるいは定額寺として容認されるようになり、京郊に私寺の性格のつよい寺院が目立ち始める。同時にこうした土地は、葬地としても意識され、都人の内的側面を強く反映する世界として、平安京と不離の関係にあった。

白川の地をはじめ、京に隣接する地域の理解なくして、平安京とその時代を正しく認識することはできないはずである。平安京の復原についてみれば、京城内のみを復原すれば、全く非宗教的都市ができあがってしまうだろう。それはたしかに計画的に意図されたかもしれないが、平安時代の人々の動向を正しく投影してはいない。京郊の地域形成をも含めて、はじめて平安時代の一大首都が完成するのである。本稿が、平安京研究に一石を投じることができれば幸いである。

〔注〕

- (1) 『文徳実録』 齊衡 3 (856) 年 6 月 25 日の条。
- (2) 『三代実録』 貞観 14 (872) 年 9 月 4 日の条。
- (3) 『三代実録』 天安 2 (858) 年 11 月 26 日の条に「神楽岡冢」としている。
- (4) 『日本後紀』 弘仁 2 (811) 年 夏 5 月 丙辰の条。
- (5) 『日本紀略』 『小右記』 各々 永祚 1 (989) 年 9 月 26 日の条。
- (6) 『日本紀略』 寛和 2 (986) 年 3 月 14 日の条に「藤原暁子於浄土寺為尼」とある。
- (7) 『日本紀略』 天曆 3 (949) 年 9 月 29 日および同 10 月 3 日の条々。
- (8) 『日本紀略』 天曆 2 (948) 年 1 月 17 日の条。
- (9) 『日本紀略』 寛弘 8 (1011) 年 11 月 16 日の条。
- (10) 『左経記』 長元 9 (1036) 年 5 月 19 日の条。
- (11) 『百鍊抄』 長曆 1 (1037) 年 6 月 2 日の条。
- (12) 『日本紀略』 安和 2 (969) 年 3 月 13 日の条。
- (13) 『百鍊抄』 承保 2 (1075) 年 6 月 13 日の条。
- (14) 栗田寺に官窯の瓦が用いられたことを疑問とするむきもあるが〔田中76〕、平安前期においては、禅林寺に関する記録（第3節参照）からも、当時官寺に準じなければ、寺院は存続しえなかったし、東名寺という寺号が与えられて、延喜式の15ヶ寺に列せられたのも同様の意味があるとみなしうるので、瓦について何らこだわる必要はない。
- (15) 『吉記』 養和 1 (1181) 年 9 月 22 日の条。
- (16) 『天台座主記』 良源伝中、貞元 2 (977) 年 4 月 7 日、この地に舍利会を催したとする。
- (17) 『三代実録』 仁和 2 (886) 年 6 月 20 日の条。

参 考 文 献

- 尼崎市教委（尼崎市教育委員会）1976年『尼崎市金楽寺貝塚』（尼崎市文化財調査報告 第11集）
- 石田志朗・中村徹也 1972年『京都大学理学部構内遺跡発掘調査の概要』
- 泉 拓良 1977年「京都大学植物園遺跡」『仏教芸術』115号
- 宇野隆夫 1979年「鴨東の開発——平安京と京近郊」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和53年度』
- 梅原末治 1923年「京都帝国大学農学部敷地ノ石器時代遺跡」『京都府史蹟勝地調査会報告』第5冊
1935年「京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』
第16冊
1936年『撰津阿武山古墓調査報告』（大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告 第7輯）
1938年「北白川廃寺址」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第19冊
- 大野 薫 1979年『淡輪遺跡発掘調査概要 I』
- 岡田保良 1979年「京都大学構内遺跡と京・白河」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和53年度』
- 小野山節・都出比呂志 1973年『高槻市安満遺跡の条里遺構』
- 鎌木義昌・高橋護 1965年「瀬戸内海地方の先土器時代」『日本の考古学 I 先土器時代』
- 川上 貢 1977年「京都大学構内における 史跡の文献的考察」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和
51年度』
- 京都市文化観光局文化財保護課 1979年『京都市遺跡発掘調査基準点 成果表・点の記』
- 京大調査会（京都大学農学部構内遺跡調査会・京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所構内遺跡調査会）
1977年『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和51年度』
- 京大埋文研（京都大学埋蔵文化財研究センター）
1978年 a 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和52年度』
1978年 b 『京都大学埋蔵文化財調査報告第1冊——京大農学部遺跡BG36区——』
1979年『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和53年度』
- 京都大学工学部建築学教室建築史研究室
1977年『京都大学建築八十年のあゆみ 京都大学歴史的建造物調査報告』
- 紅村弘ほか 1971年『岐阜県美濃加茂市神明遺跡発掘報告書』
- 小玉道明ほか 1970年『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』
- 近藤義郎 1964年「古目良遺跡——目良式製塩土器の研究」『田辺文化財』第8号
- 佐藤良二 1979年「二上山北麓における縦長剝片生産技術」『二上山・桜ヶ丘遺跡——第1地点の発掘
調査報告——』（奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告 第38冊）
- 島田貞彦 1924年「京都市北白川町発見の石器時代遺跡」『考古学雑誌』第14巻第5号
- 杉山信三 1953年「延喜式の十五寺について」『日本建築学会研究報告』第21号

- 1954年「吉田寺について」『史迹と美術』242号
- 1955年 a 「東光寺について」『日本建築学会研究報告』第30号
- 1955年 b 「洛東の円覚寺について」『日本建築学会研究報告』第34号
- 1957年「後高倉院の御葬地、北白川について」『史迹と美術』278号
- 1962年『院の御所御堂——院家建築の研究——』（奈良国立文化財研究所学報 第11冊）
- 巽三郎・大原満 1972年『江津良遺跡とその周辺——調査概要——』（熊野路考古 第7号）
- 田中重久 1970年「10世紀の平安京内外の諸寺」『日本歴史』第267号
- 1976年「北白川廃寺址は栗田寺と官寺円覚寺の複合遺跡（上）・（下）」『史迹と美術』267号・268号
- 角田文衛 1970年 a 「北白川廃寺の問題」『日本古文化論攷』
- 1970年 b 「藤原高子の生涯」『王朝の映像』
- 中村徹也 1973年『京都大学農学部総合館周辺埋蔵文化財発掘調査の概要』
- 1974年 a 『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要Ⅰ』
- 1974年 b 『京都大学理学部ノートバイオロン実験装置室新営工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要』
- 1975年『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要Ⅱ』
- 奈文研（奈良国立文化財研究所）
- 1976年『平城宮発掘調査報告Ⅶ』（奈良国立文化財研究所学報 第26冊）
- 西田直二郎 1925年「法勝寺遺址」『京都府史蹟勝地調査会報告』第6冊
- 広瀬和雄 1978年『呷町遺跡群発掘調査概要——小島東遺跡・淡輪遺跡』（大阪府文化財調査概要1977）
- 林屋辰三郎・村井康彦・森谷尅久編 1979年『京都市の地名』（日本歴史地名大系 第27巻）
- 福山敏男 1968年「六勝寺の位置」『日本建築史研究』
- 1977年「室町時代の神社——特に吉田社と齋場所」『日本の美術』第129号
- 藤井直正・原田修 1971年『縄手遺跡1』
- 藤岡謙二郎 1973年「北白川扇状地と教養部構内発見の遺物包含層並びにその先史地理学的意義」『人文』第19集
- 1978年「北白川扇状地と京都大学構内遺跡」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和52年度』
- 平安博物館編 1977年『平安京古瓦図録』
- MOIOLA, R. J. and WEISER, D.
- 1968年“TEXTUAL PARAMETER: AN EVALUATION” Journal Sedimentary Petrology, 38, (1)
- 森浩一・白石太一郎 1968年「紀淡海峡地帯における古代漁業遺跡調査報告」『紀淡・鳴門海峡地帯における考古学調査報告』（同志社大学考古学調査報告 第2冊）
- 安川豊史 1978年「北沖代遺跡」『日本塩業大系 史料編 考古』
- 柳田俊男 1977年「瀬戸内東部及び近畿地方における旧石器時代研究の現状と問題点——特に研究

過程における方法論をめぐって——』『プレリュード』20

横尾義貫・川上貢・谷直樹

1977年「京都河川変遷史論(序説)」『日本建築学会大会学術講演梗概集(中国)』

横山浩一・佐原真 1960年『京都大学文学部博物館考古学資料目録 第1部』

横山卓夫 1974年「京都盆地, その形成過程」『同志社工学会報』第15号

渡辺誠ほか 1975年『桑飼下遺跡発掘調査報告書』

京都大学構内遺跡調査要項

京都大学埋蔵文化財研究センター要項

- 第1条 京都大学に埋蔵文化財研究センター（以下「センター」という）を置く。
- 第2条 センターは、京都大学敷地内の埋蔵文化財についての調査研究及びその保存のため必要な業務を行なう。
- 第3条 センターにセンター長を置く。
- センター長は京都大学の専任教授をもって充てる。
 - センター長の任期は、2年とし、再任を妨げない。
 - センター長は、センターの所務を掌理する。
- 第4条 センターに、必要に応じて、助教授、助手その他の職員を置く。
- 第5条 センターに、調査研究及び保存に関する業務を処理するため、研究部を置く。
- 研究部に主任を置き、前条の教官をもって充てる。
 - 主任は、研究部の業務をつかさどる。
- 第6条 センターに、センターの事業に関する基本的計画、人事その他管理運営に関する重要事項を審議するため、運営協議会を置く。
- 運営協議会は、次の各号に掲げる委員で組織する。
 - センター長。
 - センターの研究部の主任。
 - 前2号以外の学識経験者のうちから総長の委嘱した者、若干名。
 - 事務局長及び施設部長。
 - センター長は、運営協議会を招集し、議長となる。
 - 前各項に規定するもののほか、運営協議会の運営に関し必要な事項は、運営協議会が定める。
- 第7条 この要項に定めるもののほか、センターの組織及び運営に関し必要な事項は、センター長が定める。

センター長	樋口隆康（文学部教授）	運営協議会委員	谷村定雄（施設部長）
運営協議会委員	池田次郎（理学部教授）	研究部主任	泉 拓良（文学部助手）
〃	川上 貢（工学部教授）	研究部研究員	岡田保良（工学部助手）
〃	西川幸治（工学部教授）	〃	清水芳裕（文学部助手）
〃	上田正昭（教養部教授）	〃	五十川伸矢（文学部助手）
〃	石田志朗（理学部助教授）	〃	吉野治雄（施設部技術補佐員）
〃	泉 拓良（文学部助手）	事 務 室	大八木邦雄（施設部事務官）
〃	大塚喬清（事務局長）	〃	梅川厚子（施設部技術補佐員）

京都大学構内遺跡調査会規約

- 第1条 この会は、京都大学構内遺跡調査会（以下「調査会」という）と称し、京都大学の委託により同大学構内における建築物新営工事等に伴い必要な敷地内の遺跡調査を行なうことを目的とする。
- 第2条 調査会は、事務所を京都市左京区北白川西町財団法人阪本奨学会内に置く。
- 第3条 調査会は、第1条の目的を達成するために次の事業を行なう。
- (1) 京都大学の委託により行なう当該敷地内の埋蔵文化財についての発掘調査。
 - (2) 前号の調査により出土した埋蔵文化財の保存、管理に関する事項の審議。
 - (3) 埋蔵文化財の調査に関する発掘調査概要報告書の作成。
 - (4) その他必要とする事項。
- 第4条 調査会に次の役員を置く。
- (1) 会長1名。
 - (2) 委員
イ 京都大学の学識経験者若干名。
ロ 新営工事等の敷地の属する京都大学の部局の長または部局附属施設の長。
ハ 新営工事等の敷地の所在する地域の文化財保護行政当局の推薦する者、若干名。
 - (3) 監事若干名。
2 会長は、前項第2号イの委員の推薦する者とする。
3 委員及び監事は、会長が委嘱する。
4 第1項第2号ロ及びハの委員は、当該敷地内の遺跡調査に関する委員としての任務が終わったときは、退任する。
- 第5条 会長は、調査会を代表し、業務を総括する。
- 2 委員は、委員会を構成し、委員会の議決に基づく業務を執行する。
 - 3 監事は、調査会の会計を監査する。
- 第6条 委員会は、会長及び委員をもって組織する。
- 2 委員会は、会長が招集し、議長となる。
 - 3 委員会は、新営工事等の敷地が京都市以外の地域にある場合で、必要と認めるときは、部会を置くことができる。
- 第7条 第3条の発掘調査の実施に当たるため、調査会に調査班を置く。
- 2 調査班は、調査班長、調査員及び調査補助員をもって組織する。
 - 3 調査班長は、委員会の議に基づき会長が委嘱する。
 - 4 調査員及び調査補助員は、調査班長の推薦により会長が委嘱する。
- 第8条 調査会の事務を処理するため、調査会に事務局を置く。
- 2 事務局に職員若干名を置く。
 - 3 職員は、会長が任免する。
- 第9条 調査会の経費は、京都大学から支出される調査委託費をもって充てる。

第10条 調査会は、4月1日に始まる年度ごとに、事業報告書及び収支決算書を作成し、監事の監査を経て、年度終了後3月以内に委員会の承認を受けるものとする。

第11条 この規約に定めるもののほか、調査会の運営に関し必要な事項は、会長が定める。

- | | | |
|-------------|------------------------|-----------------|
| 会長 | 亀井節夫 (理学部教授) | |
| 委員 | 樋口隆康 (文学部教授) | 石田志朗 (理学部助教授) |
| | 西川幸治 (工学部教授) | 泉 拓良 (文学部助手) |
| | 西村 進 (教養部助教授) | 小野真海 (事務局庶務部長) |
| 規約第4条1項(2)ハ | 今西祥博 (京都市文化観光局文化財保護課長) | |
| 規約第4条1項(2)ロ | 加藤幹太 (理学部長) | 菅原 努 (医学部長) |
| | 西島安則 (工学部長) | 藤永太郎 (瀬戸臨海実験所長) |
| 監事 | 西村利雄 (施設部企画課長) | 堀内祥二 (理学部事務長) |
| | 岸田哲二 (工学部経理課長) | 伊佐憲二 (医学部事務長) |
| 事務局員 | 大八木邦雄 (施設部事務官) | 川野美栄子 (調査会事務局) |
| | 梅川厚子 (施設部技術補佐員) | 中村美代 (調査会事務局) |

調査班長・主任 泉拓良, 岡田保良, 清水芳裕, 五十川伸矢, 吉野治雄

調査員 五十川伸矢, 河村善也, 竹村恵二, 田中はる代, 津隈久美子, 中堀謙二, 花谷浩, 浜崎一志, 藤原喜信, 家根祥多

調査補助員 網谷克彦, 麻生隆, 板野貢三子, 上田佳子, 川勝美幸, 鷺見普照, 関野かをる, 谷美之, 土橋理子, 中出崇雄, 西野素生, 信氏喜久子, 長谷川洋子, 藤井肇, 藤沢かをる, 藤村早苗, 曲田淳, 南秀雄, 宮川慎一, 宮本一夫, 八重樫和宏

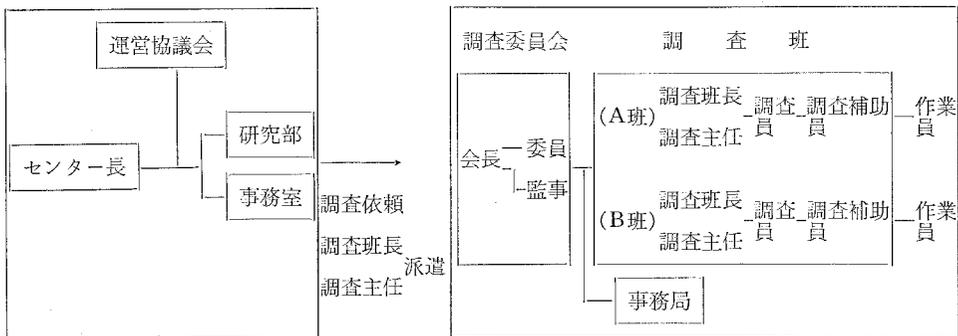
作業員 赤沢俊男, 井口二三子, 池田イシ, 石原規子, 伊藤泰次, 大島與一, 大角久夫, 大野茂雄, 小原祥市, 久世和則, 小寺末之, 佐藤はつ枝, 榎木まつ, 庄司勝治, 白木義藏, 染谷政夫, 田辺千和子, 玉置紀幸, 中村コト, 中村皓子, 橋本俊夫, 福井長治, 福田文治, 藤木チエ子, 藤本ますえ, 馬込浩, 水上光雄, 牟田正義, 安田秀男, 山内信彦, 山崎伝七, 山下公夫, 山路三朗, 山中喜一, 吉田龍太郎, 渡辺静江

現場事務局 袖岡郁子, 文字幸子

(職名は就任当時のものを用い、京都大学の職員に関しては大学名を省略した。)

京都大学埋蔵文化財研究センター

京都大学構内遺跡調査会



北部構内B G 31区調査班

所在地 京都市左京区北白川追分町（図版1-56）
 工事名 理学部物理学科校舎新営
 発掘期間 昭和53年11月1日～同54年3月30日
 面積 約650m²
 調査班長・主任 泉拓良，宇野隆夫
 調査員 田中はる代
 調査補助員 2人
 作業員 8人

本部構内A W 28区調査班

所在地 京都市左京区吉田本町（図版1-57）
 工事名 工学部イオン工学実験施設新営
 発掘期間 昭和53年12月11日～同54年3月30日
 面積 486m²
 調査班長・主任 岡田保良，吉野治雄
 調査員 浜崎一志，津隈久美子
 調査補助員 3名
 作業員 8名

医学部構内A P 19区調査班

所在地 京都市左京区吉田橋町（図版1-74）
 工事名 医学部総合解剖センター新営
 発掘期間 昭和54年7月1日～同55年12月28日
 面積 2,776m²
 調査班長・主任 泉拓良，清水芳裕，吉野治雄
 調査員 五十川伸矢，田中はる代，津隈久美子
 調査補助員 6名
 作業員 20名

本部構内A T 27区調査班

所在地 京都市左京区吉田本町（図版1-75）
 工事名 吉田地区（本部構内）実験排水槽取設け工事
 発掘期間 昭和55年2月1日～同55年3月31日（予定）
 面積 400m²
 調査班長 五十川伸矢

北部構内合宿研修所新営予定地B H 37区試掘調査

所在地 京都市左京区北白川追分町（図版1-66a～j）
 試掘期間 昭和54年5月1日～同54年5月22日
 面積 46m²
 担当者 吉野治雄

医学部総合解剖センター新営予定地A P 19区試掘調査

所在地 京都市左京区吉田橋町（図版1-67a～h）

試掘期間 昭和54年5月1日～同54年5月15日
面積 28m²
担当者 岡田保良, 清水芳裕

基幹整備電気管理設予定地（医学部構内A L18区, 教養部構内A M24区）試掘調査

所在地 医学部構内 京都市左京区吉田橋町（図版1-68a～c）
教養部構内 京都市左京区吉田二本松町（図版1-69a・b）

試掘期間 昭和54年5月16日～同54年5月24日
面積 20m²
担当者 岡田保良, 清水芳裕

工学部機械系校舎新営予定地A T29区試掘調査

所在地 京都市左京区吉田本町（図版1-70a～g）
試掘期間 昭和54年7月5日～同54年7月16日
面積 28m²
担当者 吉野治雄

人文科学研究所分館資料収蔵庫等新営予定地試掘調査

所在地 京都市左京区北白川東小倉町47
試掘期間 昭和54年7月18日～同54年7月20日
面積 8m²
担当者 林巴奈夫, 桑山正進

工学部建築系校舎新営予定地A Z30区試掘調査

所在地 京都市左京区吉田本町（図版1-71a～d）
試掘期間 昭和54年9月4日～同54年9月20日
面積 14m²
担当者 西川幸治, 浜崎一志

理学部附属瀬戸臨海実験所研究棟等新営予定地試掘調査

所在地 和歌山県西牟婁郡白浜町字崎の北459
試掘期間 昭和54年9月17日～同54年10月19日
面積 102m²
担当者 泉拓良, 岡田保良

医学部附属病院和進会館移転予定地A K18区試掘調査

所在地 京都市左京区聖護院川原町54（図版1-72a～f）
試掘期間 昭和55年1月21日～同55年1月27日（予定）
面積 46m²
担当者 泉拓良

教養部構内吉田食堂新営予定地A P22区試掘調査

所在地 京都市左京区吉田二本松町（図版1-73a～f）
試掘期間 昭和55年1月30日～同55年2月7日（予定）
面積 40m²
担当者 泉拓良

京都大学構内遺跡調査の歴史一覧

(地点は図版1を参照, 文献中「理」は京)
(大理文研, 「調」は京大調査会をさす)

年 度	遺 跡 名	地 点	担 当 者	調 査 の 種 類	面 積 (m ²)	遺 構	遺 物	文 献	備 考
大正12年	農 学 部	1・2	浜田耕作	表採・試掘			縄文土器, 石器他	梅原23, 島田24	
13年	農 学 部	不明	藤本理三郎				石 棒	横山・佐原60	
昭和9年	大阪府阿武山古墳		梅原末治	発掘			乾漆棺, 玉飾枕他	梅原36	
10年	北白川小倉町		梅原末治				縄文土器, 石器他	梅原35	
31年	農 学 部	3	羽館 易	採集			縄文土器		
46年	農 学 部	4	石田志朗	採集			弥生土器		
47年	農 学 部	5		採集			石 棒		
	大阪府安満		小野山 節 都出比呂志	事前発掘	1500	条里の溝	弥生土器, 石器他	小野山・都出73	建物をずらし条里の溝を保存
	追分地藏	6	石田志朗 中村徹也	事前発掘	600		弥生土器, 石器他	石田・中村72	
	教養部	7	藤岡謙二郎	工事中採集・実測			縄文土器他	藤岡73	
48年	農 学 部	8	中村徹也	事前発掘		瓦 溜	縄文土器, 瓦(平安)他	埋78b	瓦溜埋戻し
	農 学 部	9	中村徹也	事前発掘	600		縄文土器, 土師器他	中村73	
	農 学 部	10	中村徹也	事前発掘	40		縄文土器他		
	植 物 園	11a	中村徹也	事前発掘	400	縄文後期甕棺・配石遺構	縄文土器他	中村74b 泉 77	甕棺・配石遺構の移築復原を決定
49年	農 学 部	12	中村徹也	事前発掘	800		縄文土器他	中村74a	
	植 物 園	11a~d	中村徹也	追加調査		甕棺・配石遺構	縄文土器他	中村74b	甕棺・配石遺構取上げ
	農 学 部	13	中村徹也	事前発掘	800		縄文土器他	中村75	
50年	教養部	14	小野山 節 中村徹也	事前発掘	750		縄文土器他		
51年	教養部AL24区	15	泉 拓良	立 合		瓦溜, 溝	弥生土器, 瓦(平安)他	調77	工事を中断して一部発掘, 遺跡発見届提出

年度	遺跡名 調査名	地点	担当者	調査の 種類	面積 (㎡)	遺構	遺物	文献	備考	
昭和51年	農学部 BE 33区	16 a~h	泉 拓良	事前発掘	900	縄文時代 土壇, 不 定形ピッ ト群, 井 戸, 集石 ピット, 溝他	縄文土器, 須恵器, 土 師器, 瓦他	調77		
	北 部 BK 30区	17	泉 拓良	立 合				調77	工事続行	
	病 院 AE 15区	18	泉 拓良	試 掘	20	ピット	土師器, 瓦 他	調77	工事中断 遺跡発見届 提出	
	病 院 AE 15区	19	岡田 保良	事前発掘	2200	池, 溝, 柱穴, 井 戸, 土器 溜他	土師器, 陶 磁器, 瓦他	調77		
	病 院 AH 17区	20	岡田 保良	試 掘			土師器, 瓦 他	調77	工事予定地 の発掘調査 決定	
	北 部 BF 28区	21	泉 拓良	試 掘				調77	工事の時に 立合	
	本 部 AV 28区	22	泉 拓良	立 合				調77	工事続行	
	和歌山 瀬 戸		中村 友博	試 掘				縄文土器, 弥生土器他	調77	工事予定地 の一部発掘 調査決定
	奈良県宇 陀郡大宇 陀町カタ ブキ		大宇陀町 教育委員会	遺跡確認					調77	遺跡ではな い
	本 部 AV 27区	23	泉 拓良	試 掘	30		土師器(鎌 倉以降)他	調77	工事の時に 立合	
	本 部 AV 27区	24	泉 拓良	立 合				調77	工事続行	
	北 部 BE 34区	25	泉 拓良	立 合				調77	工事続行	
	北 部 BD 29区	26	泉 拓良	立 合				調77	工事続行	
	北 部 BF 28区	27	泉 拓良	立 合				調77	工事続行	
	病 院 AI 18区	28 a~e	泉 拓良	試 掘	30	溝	土師器(平 安以降)他	調77	一部を発掘, その他を立 合に決定	
植 物 園 BD 35区	29	吉野 治雄	保 存				調77	甕棺・配石 遺構を移築 復原		
本 部 AV 23区	30	泉 拓良	立 合				調77	工事続行		

年度	遺跡名 調査名	地点	担当者	調査の 種類	面積 (㎡)	遺 構	遺 物	文 献	備 考
昭和51年	本 部 AT 25区	31	泉 拓良	立 合				調77	工事続行
	本 部 AU 29区	32	泉 拓良	立 合		ピット	土師器(鎌倉以降)他	調77	工事続行
	本 部 AZ 28区	33	泉 拓良	立 合			縄文土器細片		工事続行
	病 院 AH17区	34	泉 拓良	事前発掘	200	溝, 井戸, 集石, ピット他	土師器, 陶磁器, 瓦(平安以降)他	埋78a	
	教 養 部 AS 23区	35	吉野 治雄	試 掘	10	溝	縄文土器, 須恵器(奈良)他	調77	工事の時に立合
	北 部 BJ 33区	36	宇野 隆夫	試 掘	10		縄文土器	調77	
	医 学 部 AP 18区	37	泉 拓良	立 合			土師器(平安以降)他	調77	工事続行
	病 院 AI 18区	38	泉 拓良	立 合		石 敷	土師器(室町以降)他	調77	一部実測, 工事続行
	和歌山県 瀬 戸		丹羽 佑一	事前発掘	300	縄文時代土壇他	縄文土器, 石器, 弥生土器他	埋78a	
昭和52年	病 院 AF 14区	39	岡田 保良 宇野 隆夫	事前発掘	800	護岸, 井戸, 溝他	土師器, 陶磁器, 瓦他	埋78a	
	医 学 部 AO 18区	40 a~c	泉 拓良 吉野 治雄	試 掘	10	鎌倉時代土壇	土師器, 陶磁器他	埋78a	工事予定地の発掘調査を決定
	医 学 部 AO 18区	41	泉 拓良 吉野 治雄	事前発掘	1200	溝, 井戸土器溜他	土師器, 陶磁器, 瓦他	埋78a	
	北 部 BF 29区	42 a~f	泉 拓良 吉野 治雄	試 掘	50		縄文土器, 植物遺体他	埋78a	
	北 電 気 部 管	42 g~l	吉野 治雄	試 掘	50		須恵器, 土師器他	埋78a	
	北 電 気 部 管	43 a~c	吉野 治雄 宇野 隆夫	立 合		溝, ピット	須恵器, 土師器他	埋78a	実測・遺物採集の後, 工事続行
	本 給 水 部 管	44	宇野 隆夫	立 合				埋78a	工事続行
	本 ガ ス 部 管	45	宇野 隆夫	立 合				埋78a	工事続行
	医 ガ ス 部 管	46	岡田 保良	立 合			土師器他	埋78a	工事続行
	病 給 水 院 管	47	岡田 保良	立 合				埋78a	工事続行
	教 養 部 AQ 23・ AN 23区	48 a・b	宇野 隆夫	試 掘	80	溝	弥生土器, 土師器, 瓦(平安後期)他	埋78a 埋79	

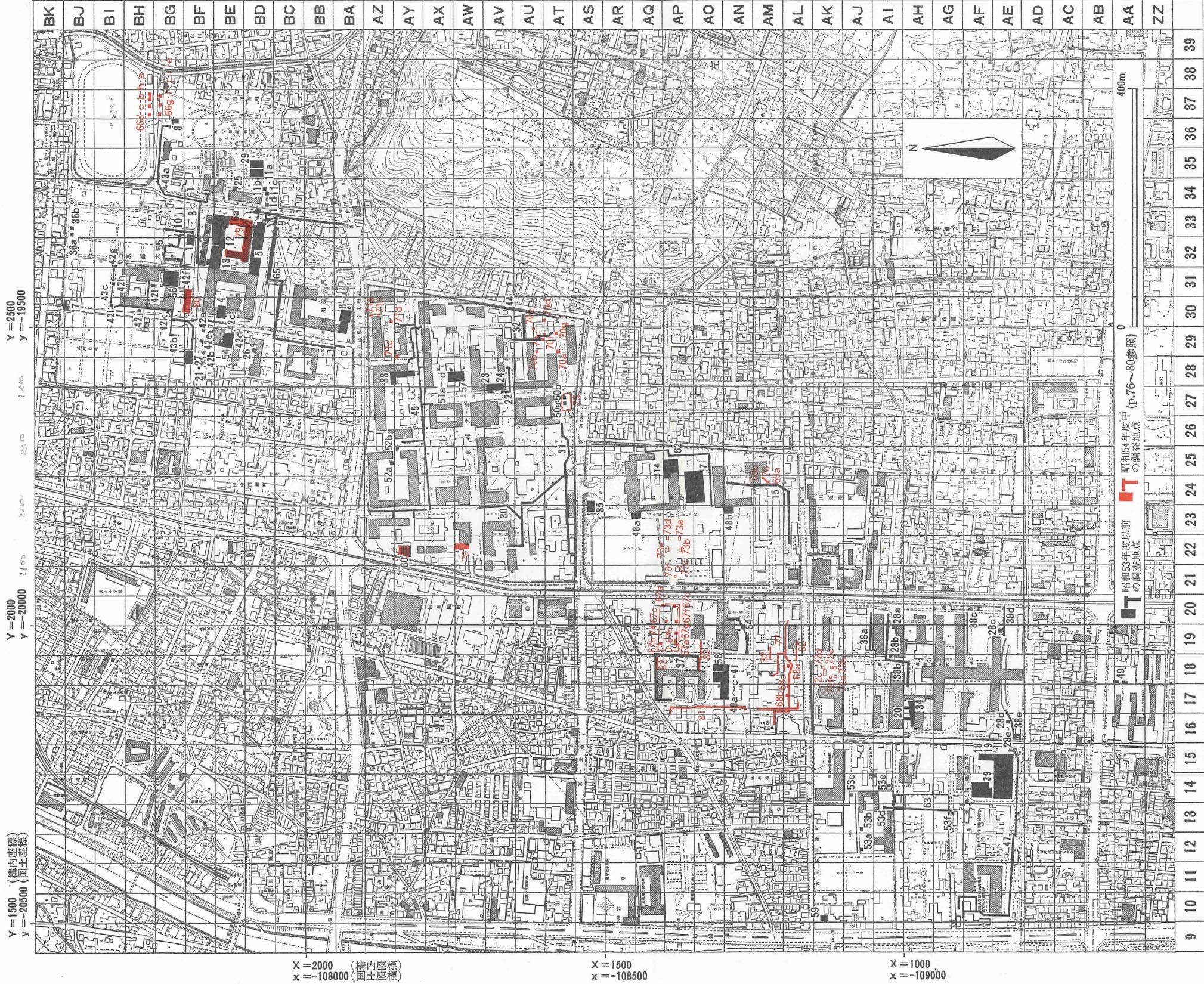
年度	遺跡名 調査地名	地点	担当者	調査の種類	面積 (㎡)	遺構	遺物	文献	備考
昭和53年	白河北殿 比定地 AA 18区	49	岡田保良	試掘	40	溝	瓦, 土師器, 陶磁器	埋79	遺跡確認 調査
	本 部 AT 27区	50 a・b	宇野隆夫	試掘	8	道路 (側溝)	須恵器	埋79	工事予定地 の発掘調査 決定
	本 部 AW 28区	51 a~d	岡田保良	試掘	16	白川道 (路面)	土師器, 陶 磁器	埋79	工事予定地 の発掘調査 決定
	本 部 AY 25区	52 a・b	岡田保良	試掘	8			埋79	
	病 院 電 気 管	53 a~f	宇野隆夫	試掘	24			埋79	
	理 学 部 BE 29区	54	岡田保良 吉野治雄 宇野隆夫	事前発掘	500	方形周溝 墓, 火葬 塚	弥生土器, 土師器, 瓦	埋79	火葬塚と方 形周溝墓を 現地保存
	農 学 部 BG 32区	55	泉 拓良 宇野隆夫	事前発掘	100	土坑, 溝	縄文土器, 土師器, 陶 磁器, 瓦	埋79	
	農 学 部 BG 31区	56	泉 拓良 宇野隆夫	事前発掘	650		縄文土器	埋80	
	本 部 AW 28区	57	岡田保良 吉野治雄	事前発掘	500	白川道 (路面)	陶磁器, 土 師器, 銭貨	埋80	
	医 学 部 AN 18区	58	宇野隆夫 岡田保良 吉野治雄	立 合		建物, 井 戸	土師器, 陶 磁器, 瓦	埋79	発掘・実測 の後, 工事 続行
	京 都 府 市 丹 波 町		岡田保良	立 合				埋79	工事続行
	滋 賀 県 市 高 島 町		岡田保良 高島町 教育委員会	立 合				埋79	工事続行
	京 都 府 市 宇 治 市		宇野隆夫	立 合				埋79	工事続行
	東南了研 AK 10区	59	岡田保良	立 合				埋79	工事続行
	本 部 AY 22区	60	泉 拓良	立 合		高野川旧 河道		埋79	実測後, 工 事続行
	北 方 部 ス 管	61	泉 拓良	立 合			石仏, 石塔 婆	埋79	工事続行
	教 養 部 方 ス 管	62	泉 拓良	立 合				埋79	工事続行
病 院 電 気 管	63	泉 拓良	立 合				埋79	工事続行	
医 学 部 電 気 管	64	吉野治雄	立 合		井戸, 溝	弥生土器, 土師器, 陶 磁器	埋79・80	発掘・実測 後, 工事続 行	

年度	遺跡名	地点	担当者	調査の種類	面積(m ²)	遺構	遺物	文献	備考	
昭和53年	北給水管	65	泉拓良	立合		瓦, 土師器,	瓦, 土師器 陶磁器	埋80	実測後, 工事続行	
昭和54年	北 部 BH 37区	66 a~j	吉野治雄	試掘	46	土坑	土師器, 須 恵器	埋80	工事予定地 の発掘調査 決定	
	医 学 部 AP 19区	67 a~h	岡田保良 清水芳裕	試掘	28	土坑, 集石	土師器, 須 恵器	埋80	同 上	
	医 学 部 AL 18区	68 a~c	岡田保良 清水芳裕	試掘	12		土師器, 陶 磁器	埋80	工事の時に 立合	
	教 養 部 AM 24区	69 a・b	岡田保良 清水芳裕	試掘	8		弥生土器, 土師器	埋80	工事の時に 立合	
	本 部 AT 29区	70 a~g	吉野治雄	試掘	28	溝, 土坑	縄文土器, 弥生土器 土師器, 瓦	埋80	工事予定地 の発掘調査 決定	
	北 白 川 小 倉 町		林巳奈夫 桑山正進	試掘	8			埋80	工事の時に 立合予定	
	和歌山県 瀬 戸		泉拓良 岡田保良	試掘	102	土坑, 縄文 時代貝塚	縄文土器 製塩土器	埋80	工事予定地 の一部発掘 調査決定	
	本 部 AZ 30区	71 a~d	西川幸治 浜崎一志	試掘	14	鎌倉時代 溝	土師器, 瓦 器, 瓦	埋80		
	病 院 東 AK 18区	72 a~f	泉拓良	試掘	46				実施予定	
	教 養 部 AP 22区	73 a~f	泉拓良	試掘	40				実施予定	
	医 学 部 AP 19区	74	泉拓良 清水芳裕 吉野治雄	事前発掘	2776	井戸(鎌倉 室町)溝, 土器溜	土師器, 陶 磁器, 瓦, 旧石器	埋80	現在整理中	
	本 部 AT 27区	75	五十川伸矢	事前発掘	400				実施予定	
	本 部 AW 22区	76	岡田保良	立合				埋80	工事続行	
	医 学 部 電 気 管	77	岡田保良	立合				土師器, 陶 磁器	埋80	工事続行
	教 養 部 電 気 管	78	泉拓良	立合					埋80	工事続行
	北 部 BD 32区	79	泉拓良	立合					埋80	工事続行
	北 部 BF 30区	80	泉拓良	立合					埋80	工事続行
	医 学 部 給 水 管	81	清水芳裕	立合				土師器	埋80	工事続行
医 学 部 ガ ス 管	82	五十川伸矢	立合					埋80	工事続行	
山 科 区 北 花 山		岡田保良 吉野治雄	遺跡確認					埋80	工事予定地 に遺跡なし	

图

版

図版一 京都大学吉田キャンパスの地区割と調査地点



Y = 2500
y = -19500

Y = 2000
y = -20500

Y = 1500 (構内座標)
y = -20500 (国土座標)

X = 2000 (構内座標)
x = -108000 (国土座標)

X = 1500
x = -108500

X = 1000
x = -109000

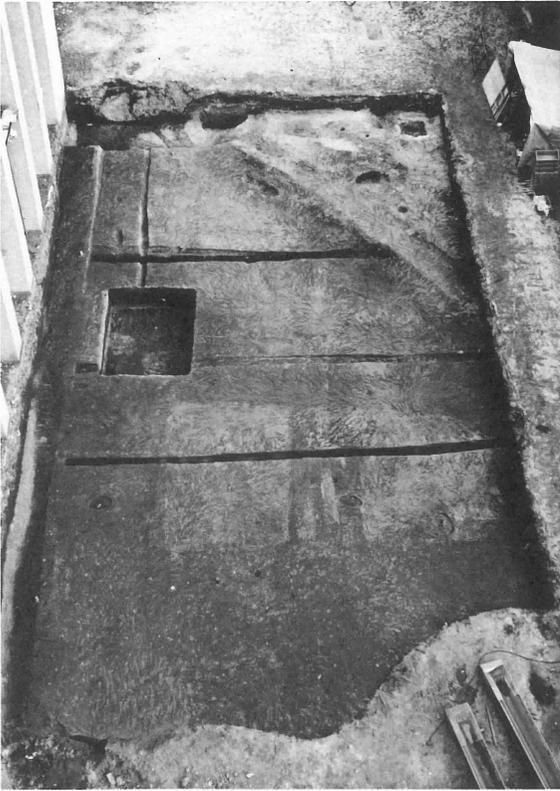
昭和54年度以前
の調査地点

昭和54年度中
の調査地点 (p.76~80参照)

400m

9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39

BK BJ BI BH BG BF BE BD BC BB BA AZ AY AX AW AV AU AT AS AR AQ AP AO AN AM AL AK AJ AI AH AG AF AE AD AC AB AA ZZ



1. 第1検出面の遺構



2. 第2検出面の遺構



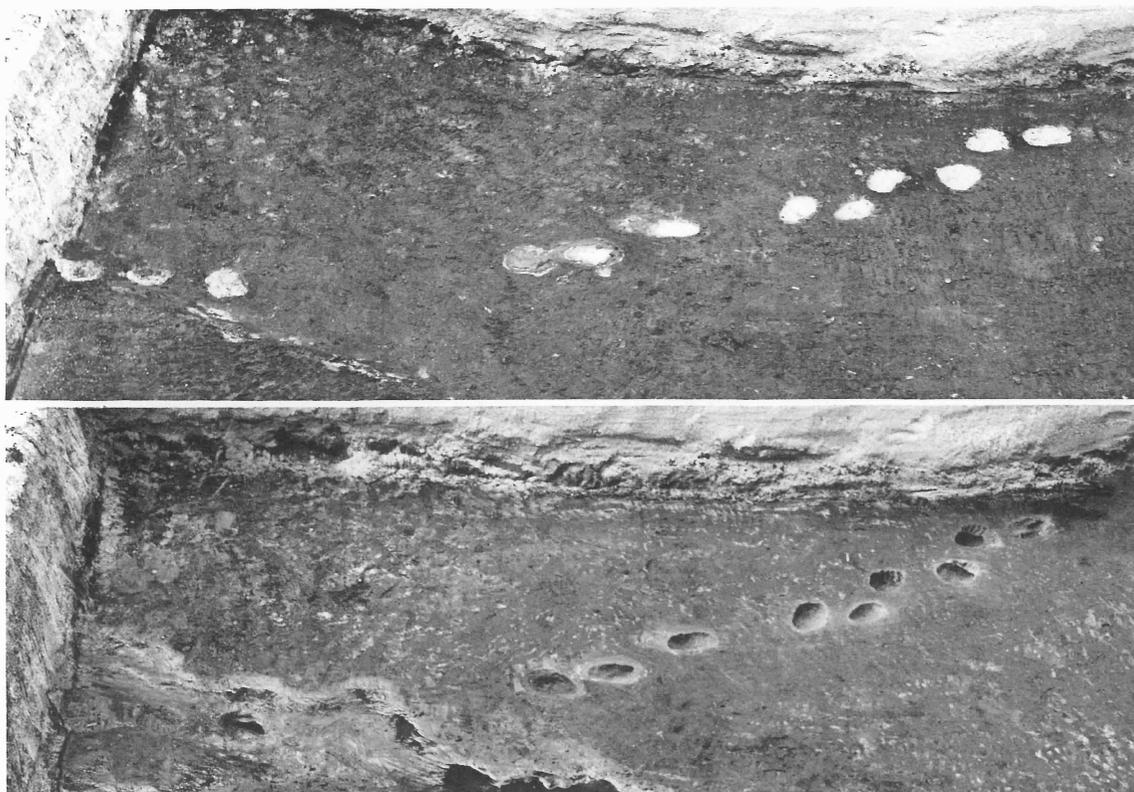
3. 南壁の層位



1. 小川と足跡群（第14層発掘後）



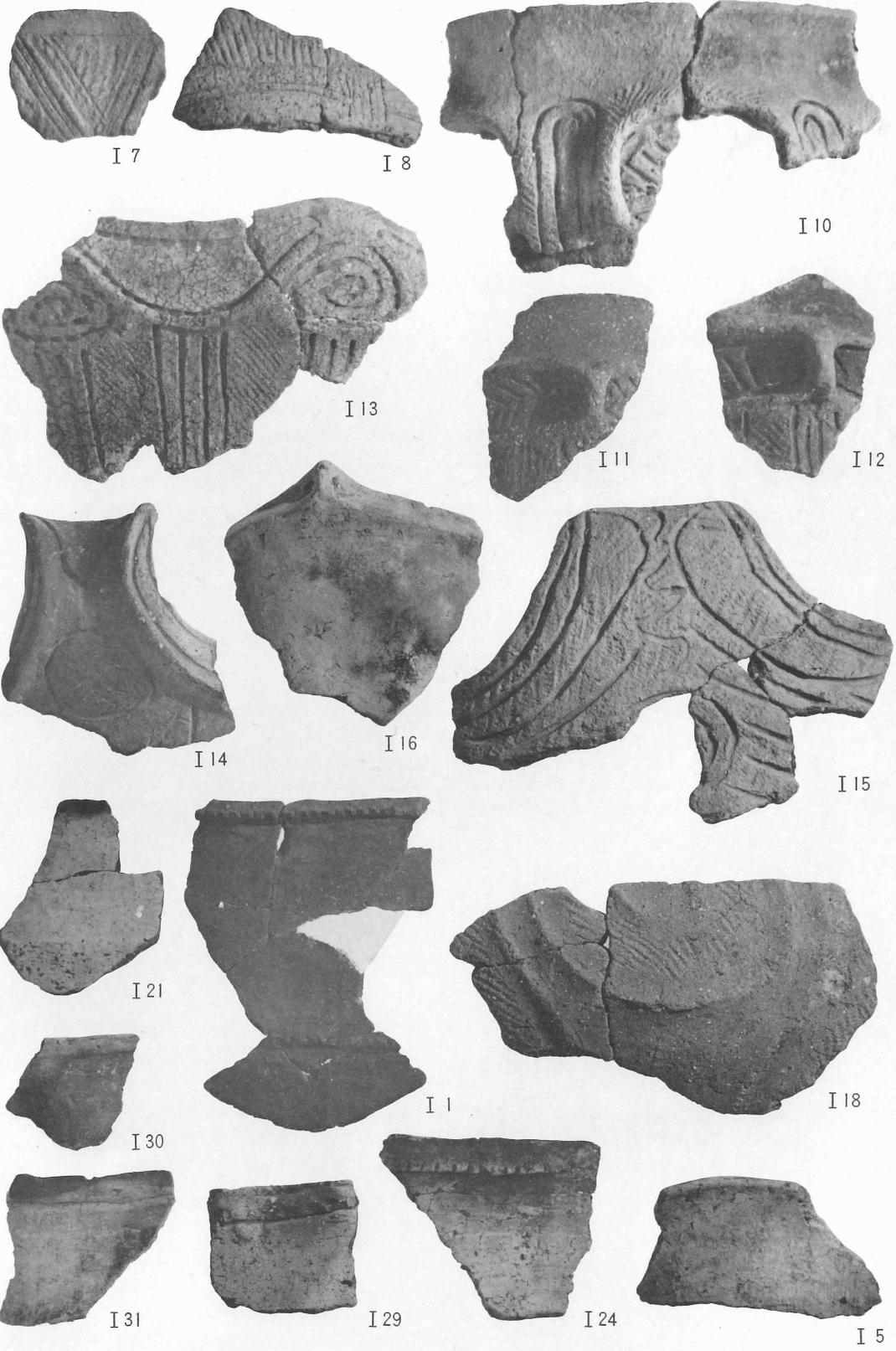
2. 埋没林（第20層発掘後）



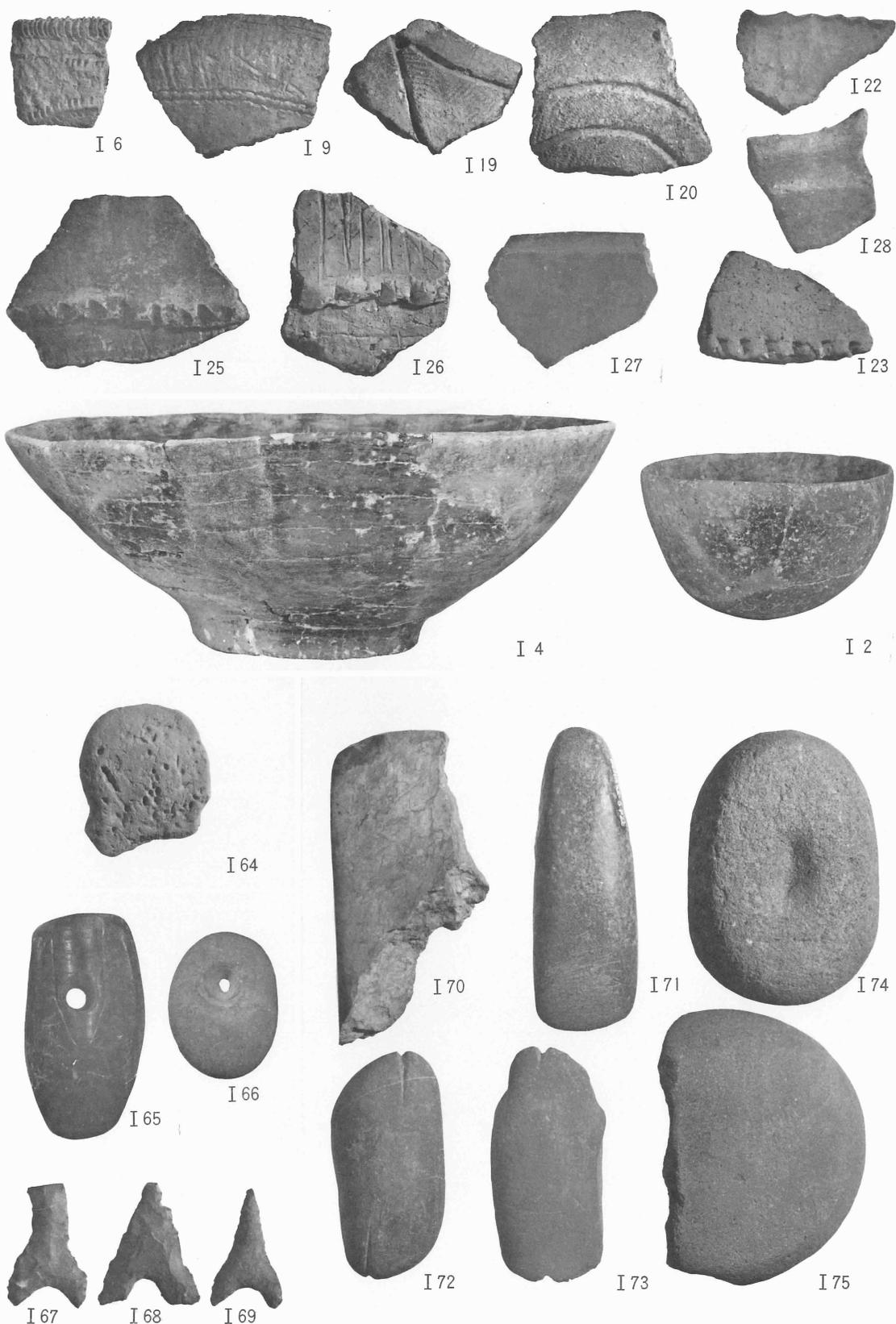
1. 足跡列（上：検出、下：発掘後）



2. 倒木



I 1・7・8・10~16・18・21・24・29~31縄文土器, I 5弥生土器



I 2・4・6・9・19・20・22・23・25~28繩文土器,
I 64土製品, I 65・66石製品, I 67~75石器



I 49



I 59



I 34



I 37



I 56



I 60



I 61



I 53



I 62



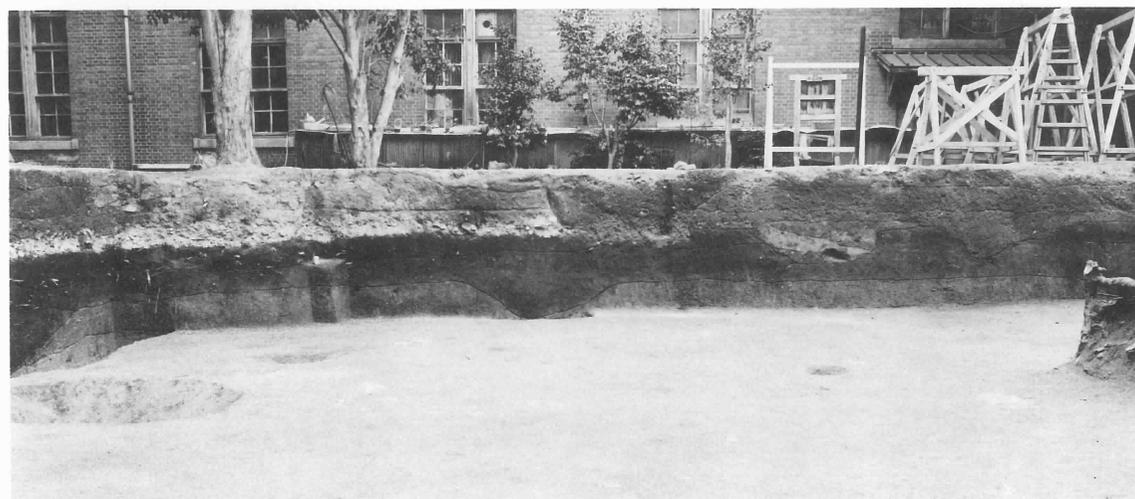
I 63



1. 東壁北部の層位



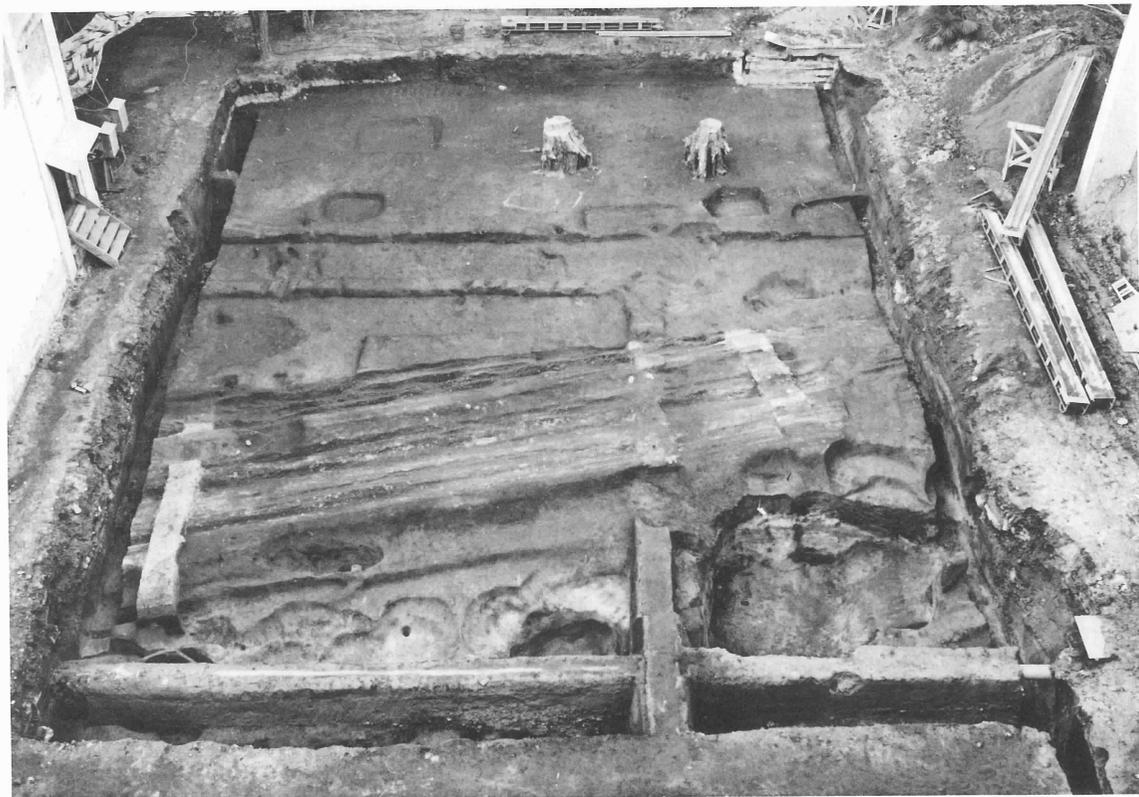
2. 東壁南部の層位



3. 北壁西部の層位



1. 検出全景 (南から)



2. 発掘後全景 (南から)



1. 道SF1断面 (東壁)



2. 道SF1轍 (西から)



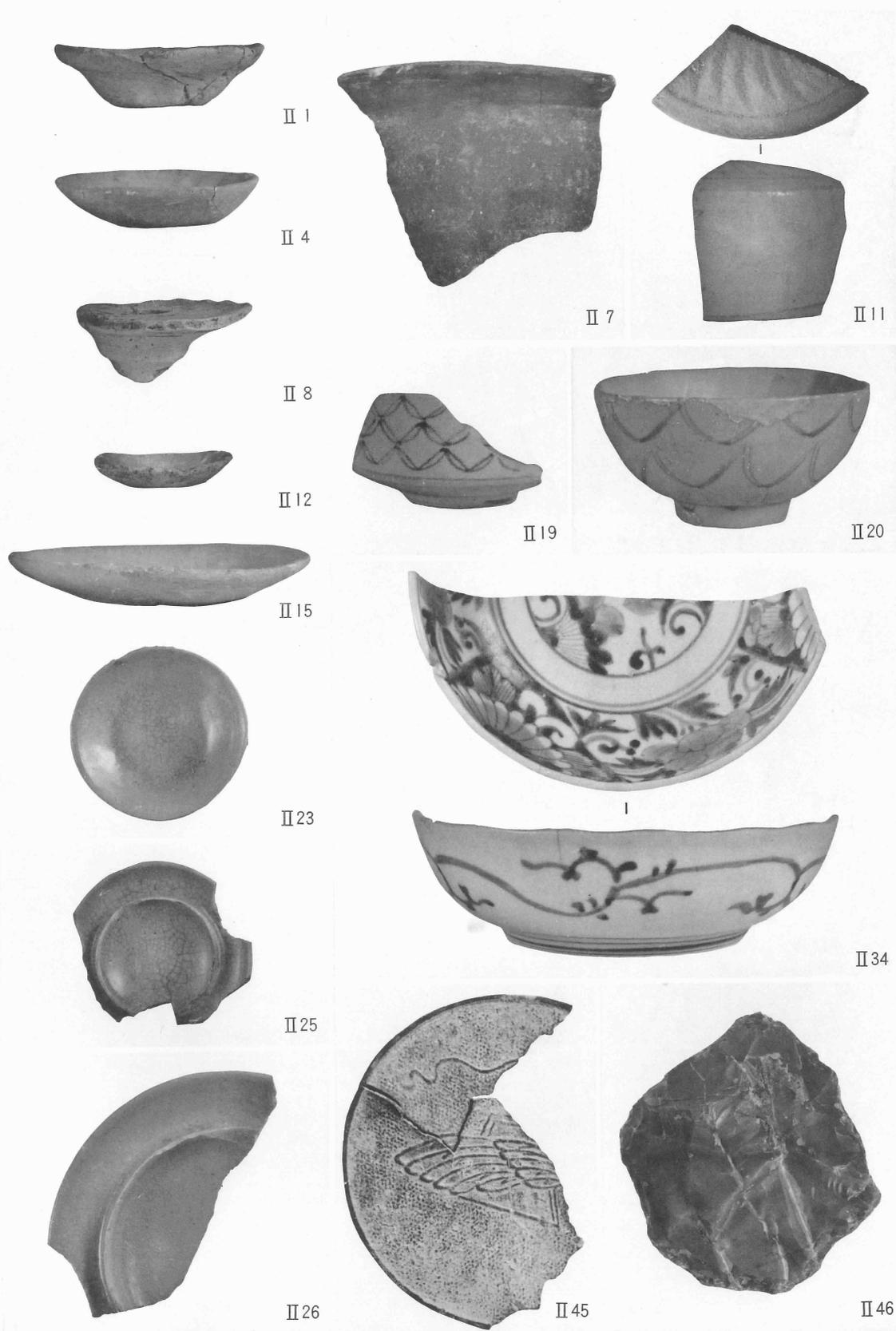
1. 土坑SK 3 上部の集石（北西から）



2. 土坑SK 3 断面（北から）



3. 土坑SK 4 断面（南から）



II 1 · 4 · 8 · 12 · 15土師器, II 7瓦器, II 11青白磁, II 19 · 20 · 34染付
II 23 · 25 · 26陶器, II 45和鏡, II 46火打石



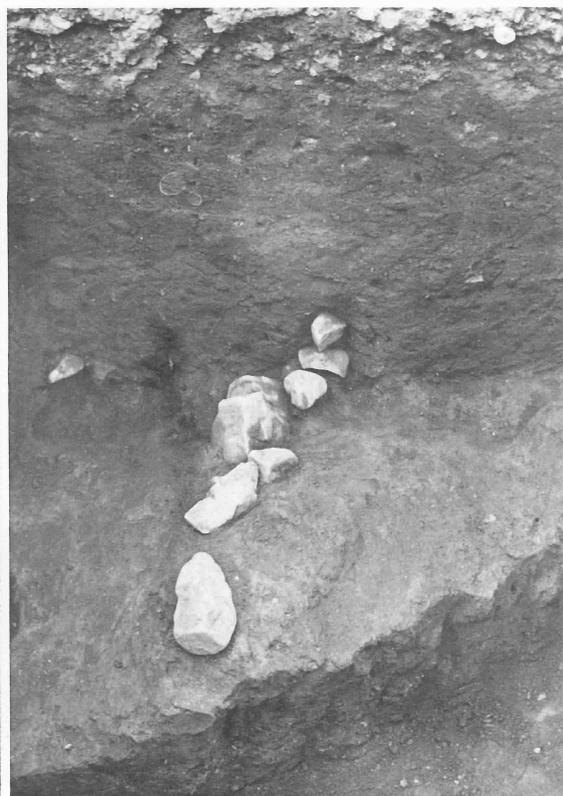
1. BH37区TP 5 北壁の層位



2. BH37区TP 7 北壁の層位



3. AP19区TP 1 南壁の層位



4. AL18区TP 1 検出の石列



1. AT29区TP 6 土坑の層位



2. AT29区TP 4 西壁の層位



3. AT29区TP 4 縄文土器と弥生土器の出土状況



1. 遺跡全景（西から）



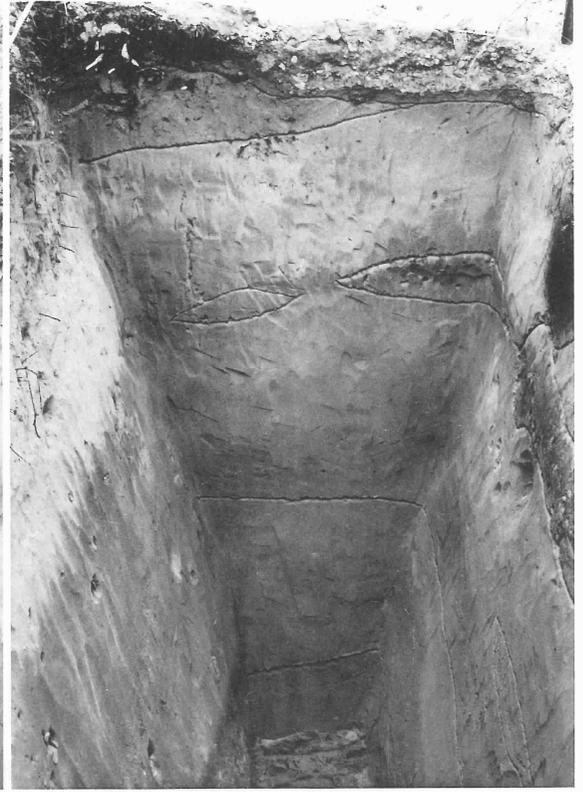
2. 試掘坑A 7 西壁の層位



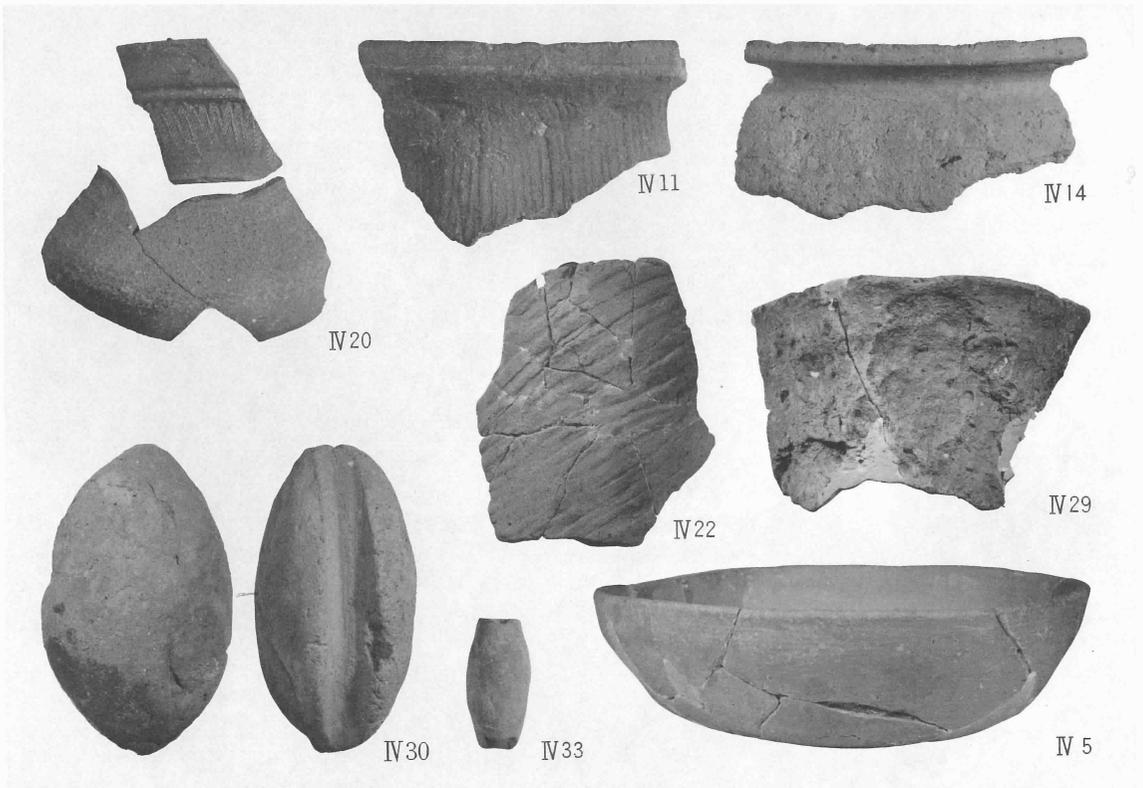
3. 試掘坑A 5 西壁の層位



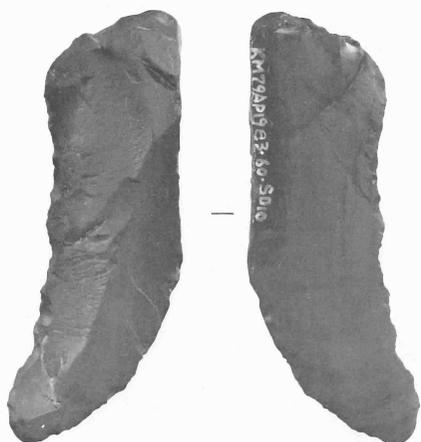
1. 試掘坑C 1北壁の層位



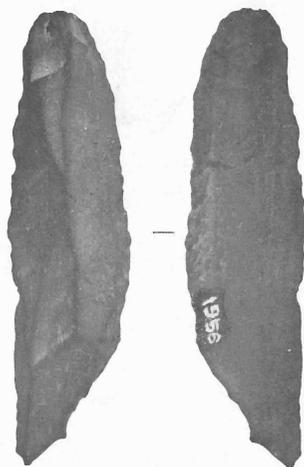
2. 試掘坑D 7南壁の層位



3. 土師器 (IV 5-11-14), 須恵器 (IV20), 製塩土器 (IV22・29), 土錘 (IV30・33)



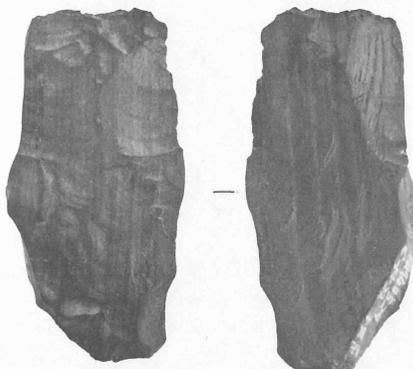
1



2



3



4

- 1 医学部構内A P 19区出土
- 2 北部構内B F 33区出土
- 3 北部構内B E 33区出土
- 4 北部構内B E 33区出土

昭和55年3月24日印刷

昭和55年3月31日発行

京都大学構内遺跡調査研究年報

昭和54年度

編 集 行 京都大学埋蔵文化財研究センター

印 刷 本 中 西 印 刷 株 式 会 社
京都市上京区下立売通り小川東入